

凌雲の類云
云一魏明帝
の時、韋誕
といふ人凌
雲觀にのぼ
りて榜に屈
書し忽ち白
頭となりし
事、三國史
に見ゆ

受く。外より來る病は少し。藥を飲んで汗を求むるには、驗なきことあれども、一旦恥ぢ恐るゝことあれば、かならず汗を流すは、心のしわざなりといふことを知るべし。凌雲の額を書きて、白頭の人となりし例なきにあらず。物に争はず、おのれを枉げて人に従ひ、我身を後にして、人を先にするには如かず。萬のあそびにも、勝負を好む人は、勝ちて興あらんためなり。おのれが藝の勝りたる事をよろこぶ。されば負けて興なく覺ゆべきこと、また知られたり。我負けて人を歡ばしめんと思はゞ、更にあそびの興なかるべし。人に本意なく思はせて、わが心を慰めん事、徳に背けり。むつまじき中に戯るゝも、人をはかり欺きて、おのれが智の勝りたることを興とす。これまた禮にあらず。さればはじめ興宴より起りて、長き恨を結ぶ類おほし。これ皆あらそひを好む失なり。人に勝らんことを思はゞ、たと學問して、その智を人に勝らんと思ふべし。道を學ぶとならば、善に誇らず、ともがらに争ふべからずといふ事を知るべきゆるなり。大なる職をも辭し、利をも捨つるは、たと學問の力なり。

貧しきものは財をもて禮とし、老いたるものは力をもて禮とす。おのが分を知りて、及ばざる時は速にやむを智といふべし。許さざらん人は人のあやまりなり。分を知らずして強ひて剛むは、おのれがあやまりなり。貧しくて分を知らざれば盗み、力衰へて分を知らざれば病をうく。鳥羽の作道は、鳥羽殿建てられて後の號にはあらず、昔よりの名なり。元良親王、元日の奏賀の聲はなはだ殊勝にして、大極殿より鳥羽の作道まで聞えけるよし、李部王の記に待るとかや。夜のおとどは東御枕なり。大かた東を枕として、陽氣を受くべきゆるに、孔子も東首し給へり。寢殿のしつらひ、或は南枕常のことなり。白河院は北首に御寢なりけり。「北は忌むことなり。また伊勢は南なり。太神宮の御方を御跡にせさせ給ふこといかど」と人申しけり。たゞし太神宮の遙拜は辰巳に向はせたまふ。南にはあらず。高倉院の法華堂の三昧僧、何某の律師とかやいふもの、ある時鏡を取りて顔をつくぐ、

官名、僧綱の一、釋氏要覽に、律鈔解題云佛言善解一字名律師一字者律字也云々

これを云々
一向書に念
茲在茲

と見て、我貌の醜くあさましきことを、あまりに心憂く覺えて、鏡さへうとましましき心地しければ、その後長く鏡をおそれて手にだに取らず、更に人に交る事なし。御堂の勤ばかりにあひて、籠り居たりと聞き傳へしこそ、ありがたく覺えしか。かしこけなる人も、人の上をのみ計りて、おのれをば知らざるなり。我を知らずして外を知るといふ理あるべからず。されば己を知るを、物知れる人といふべし。貌醜けれども知らず、心の愚なるをも知らず、藝の拙きをも知らず、身の數ならぬをも知らず、年の老いぬるをも知らず、病の冒すをも知らず、死の近きことをも知らず、行ふ道の至らざるをも知らず、身の上の非をも知らねば、まして外の譏を知らず。たゞし貌は鏡に見ゆ、年は數へて知る。我身の事知らぬにはあらねど、すべき方のなければ、知らぬに似たりとぞいひまし。貌を改め、齡を若くせよとはあらず。拙きを知らば、何ぞやがて退かざる。老いぬと知らば、何ぞしづかに身を安くせざる。行愚なりと知らば、何ぞこれを思ふことこれにあらざる。すべて人に愛樂せられずして衆に交るは恥なり。貌みにくく心おく

不堪の藝
堪能ならざる藝
壯なる一曲
禮に三十
曰壯、血氣
盛の者

そるること
深きわけ
なき言、つ
まらぬ言葉
あきらめ
説き明かす

れにして出で仕へ、無智にして大才に交り、不堪の藝をもちて堪能の座につらなり、雪の頭を戴きて壯なる人にならび、況や及ばざることを望み、協はぬことを憂へ、來らざることを待ち、人に恐れ、人に媚ぶるは、人の與ふる恥にあらず、貪る心にひかれて、自ら身を恥しむるなり。貪ることのやまざるは、命を終ふる大事今こゝに來れりと、たしかに知らざればなり。

資季大納言入道とかや聞えける人、具氏宰相中將に逢ひて、「わぬしの問はれんほどのこと、何事なりとも答へ申さざらんや」といはれければ、具氏「いかゞ侍らん」と申されけるを、「さらばあらがひ給へ」といはれて、「はかしくしき事は片端もまねび知り侍らねば、尋ね申すまでもなし。何となきそとろごとの中に、おほつかなき事をこそ問ひ奉らめ」と申されけり。「ましてこゝもとの淺きことは、何事なりともあきらめ申さん」といはれければ、近習の人々、女房なども、「興あるあらがひなり。同じくは御前にて争はるべし。負けたらん人は供御をまうけらるべし」と定めて、御前にてめし合せられた

馬のきつりやう云々
黒川眞頼翁
詳しく考案
を立てて雁
(かり)の隠
語なりとい
ひたれど如
何にか

土偏一鹽の
字を塩の俗
字にて答へ
し也

りけるに、具氏「幼くより聞きならひ侍れど、その心しらぬこと侍り。馬のきつりやうきつにのをか、なかくほれいりくれんどうと申すことは、いかなる心にか侍らん。うけたまはらん」と申されけるに、大納言入道はたとつまりて、「これはそごろごとなれば、いふにも足らず」といはれけるを、「もとより深き道は知り侍らず。そごろごを尋ね奉らんと、定め申しつ」と申されければ、大納言入道負になりて、所課いかめしくせられたりけるとぞ。

醫師あつしけ、故法皇の御前にさぶらひて、供御の参りけるに、「今参りはべる供御のいろを、文字も功能も尋ね下されて、そらに申しはべらば、本草に御覽じあはせられ侍れかし。一つも申し誤り侍らじ」と申しける時しも、六條の故内府まるり給ひて、「有房ついでに物習ひ侍らん」とて、「まつしほといふ文字は、いつれの偏にか侍らん」と問はれたりけるに、「土偏に候ふ」と申したりければ、「才のほど既にあらはれにたり。今はさばかりにて候へ、ゆかしきところなし」と申されけるに、とよみになりて罷り出でに

けり。

とよみにな
りてどつ
と大笑にな
りて

浅茅が宿
あれ果てた
る宿
心ぶかう
趣深く、文
段抄の説に
依ればこの
語の下に又
なくあはれ
なりと補ふ

花は盛に、月ば隈なきをのみ見るものは。雨にむかひて月を戀ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれに情ふかし。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ見どころ多けれ。歌の詞書にも、「花見に罷りけるにはやく散り過ぎにければ」とも、「さはる事ありて罷らで」なども書けるは、「花を見て」といへるに劣れる事かは。花の散り月の傾くを慕ふならひはさる事なれど、ことにかたくななる人ぞ、「この枝かの枝散りにけり。今は見所なし」などはいふめる。萬の事も始終こそをかしけれ。男女の情も、偏にあひ見るをばいふものは。逢はでやみにし憂さを思ひ、あだなる契をこち、長き夜をひとり明し、遠き雲を思ひやり、浅茅が宿に昔を忍ぶこそ、色このむとはいほめ。望月の隈なきを、千里の外まで眺めたるよりも、曉近くなりて待ちいでたるが、いと心ぶかう、青みたる様にて、深き山の杉の梢に見えたる木の間のかけ、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、またなくあはれなり。椎柴白樺などの、濡れたるや

色こくし
つこく
あからめ
よそ目、わ
き目

うなる葉の上いきらめきたるこそ、身にしみて、心あらん友もがなと、都こひしう覺ゆれ。すべて月花をばさのみ目にて見る物かは。春は家を立ちさらでも、月の夜は閨のうちながらも思へるこそ、いと頼もしうをかしけれ。よき人は偏にすける様にも見えず、興ずる様もなほざりなり。片田舎の人こそ、色こくよろづはもて興ずれ。花のもとには、ねぢより立ちより、あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、はては大なる枝心なく折り取りぬ。泉には手足さしひたして、雪にはおりたちて跡つけなと、萬の物、よそながら見る事なし。さやうの人の祭見さま、いとめづらかなりき。「見ごといとおそし。そのほどは棧敷不用なり」とて、奥なる屋にて酒飲み物食ひ、圍碁雙六など遊びて、棧敷には人をおきたれば、「わたり候ふ」といふ時に、おのく肝つふるやうに争ひ走上りて、落ちぬべきまで簾張りいでて、押しあひつゝ、一事も見洩さじとまほりて、とありかよりと物事にいひて、わたり過ぎぬれば、又渡らんまでといひて降りぬ。唯物をのみ見んとするなるべし。都の人のゆしけなるは、眠りていとも見ず。若くすすく

及びか
す及び腰
になりて後
より人にの
び掛からず

らうがはし
し
こくら多

なるは、官仕にたちる、人の後にさぶらふは、さまあしくも及びかよらず、わりなく見んとする人もなし。何となく葵かけ渡してなまめかしきに、明け離れぬほど、忍びて寄する車どものゆかしきを、それかかれかなと思ひよすれば、牛飼下部などの見知れるもあり。をかしくもきらくしくも、さまざまに行きかふ、見るもつれくならず。暮るゝ程には、立て竝べつる車ども、所なくなみるつる人も、いづかたへ行きつらん、程なく稀になりて、車どものらうがはしさも濟みぬれば、簾疊も取り拂ひ、目の前に淋しけになり行くこそ、世のためしも思ひ知られてあはれなれ。大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ。かの棧敷の前をこより行きかふ人の見知れるが数多あるにて知りぬ、世の人数もさのみは多からぬにこそ。この人みな失せなん後、我身死ぬべきに定りたりとも、ほどなく待ちつけぬべし。大なる器物に水を入れて、細き孔をあけたらんに、滴ること少しと云ふとも、怠る間なく漏りゆかば、やがて盡きぬべし。都の中に多き人、死なざる日はあるべからず。一日に一人二人のみならんや。鳥部野、舟岡、さらぬ野山に

まゝ子立一
黒白の石を
並べ印した
る石より數
へて十に當
るを除く遊
戯

後の葵一祭
過ぎたる後
の葵、賀茂
の祭に葵か
くること前
にも見ゆ

も、送る數おほかる日はあれど、送らぬ日はなし。されば棺をひさぐもの、作りてうち置くほどなし。若きにもよらず、強きにもよらず、思ひかけぬは死期なり。今日まで遁れ來にけるは、ありがたき不思議なり。暫時も世をのどかに思ひなんや。まゝ子立といふものを、雙六の石にてつくりて、立て並べたる程は、取られん事いづれの石とも知らねども、數へ當てよひとつを取りぬれば、その外は遁れぬと見れど、またくかぞふれば、かれこれ間拔き行くほどに、いづれも遁れざるに似たり。兵の軍にいづるは、死に近きことを知りて、家をも忘れ身をも忘る。世をそむける草の庵には、しづかに水石をもてあそびて、これを他所に聞くと思へるはいとはかなし。しづかなる山の奥、無常の敵きほひ來らざらんや。その死に臨めること、軍の陣に進めるにおなじ。祭過ぎぬれば、後の葵不用なりとて、ある人の御簾なるを皆取らせられ侍りしが、色もなくおほえ侍りしを、よき人のしたまふ事なれば、さるべきにやと思ひしかど、周防の内侍が、

玉だれに云
云一和泉式
部の詠、下
句、枯れて
もかよへ人
の面影
なりならぬ
云々一此贈
答千載集哀
傷部に出づ
辨の歌の上
句あやめ草
涙の玉にぬ
きかへて、

かくれどもかひなき物はもろともにみすの葵の枯葉なりけり
と詠めるも、母屋の御簾に葵のかよりたる枯葉を詠めるよし、家の集に書けり。古き歌の詞書に、枯れたる葵にさしてつかはしけるとも侍り。枕草紙にも、來しかた戀しきもの、かれたる葵と書けるこそ、いみじくなつかしう思ひよりたれ。鴨長明が四季物語にも、玉だれに後の葵はとまりけりとぞ書ける。おのれと枯るよだにこそあるを、名残なくいかど取り捨つべき。御帳にかよれる藥玉も、九月九日菊にとりかへらるといへば、菖蒲は菊の折までもあるべきにこそ。枇杷の皇太后宮かくれ給ひて後、ふるき御帳の内に、菖蒲藥玉などの枯れたるが侍りけるを見て、をりならぬをなほぞかけつると、辨の乳母のいへる返事に、あやめの草はありながらとも、江の侍従が詠みしぞかみありけるを、このごろぞ世に多くなり侍るなる。吉野の花、左近の櫻、皆ひとへにて

返歌は玉ぬ
きしあやめ
の草はあり
ながら夜殿
は荒れん物
とやは見し
京極入道中
納言一藤原
定家

こそあれ。八重櫻はことやうのものなり。いとこちたくねぢけたり。植ゑずともありな
ん。遅櫻またすさまじ、蟲のつきたるもむづかし。梅はしろき、うす紅梅、一重なるが
疾く咲きたるも、かさなりたる紅梅の、にほひめでたきもみなをかし。「おそき梅は櫻に
咲きあひて、おほえおとりけおされて、枝に萎みつきたる、こころうし。一重なるがまづ
咲きて散りたるは、心とくをかし」とて、京極入道中納言は、なほ一重梅をなん軒近く植
ゑられたりける。京極の屋の南むきに、今も二本はへるめり。柳またをかし。卯月ばか
りの若楓、すべて萬の花紅葉にも優りてめでたきものなり。橘、桂、いづれも木はもの
ふり、大なるよし。草は山吹、藤、杜若、撫子、池には蓮、秋の草は萩、薄、桔梗、萩、
女郎花、藤袴、紫苑、吾木香、刈萱、龍胆、菊、黄菊も、葛、薦、朝顔、いづれもいと
高からず、さよやかなる垣に、しけからぬよし。この外世にまれなるもの、唐めきたる
名の聞きにくし、花も見なれぬなど、いとなつかしからず。大かた何も珍しくありが
たきものは、よからぬ人のもて興ずるものなり。さやうの物なくてありなん。

さまあし
見つともな
し

悲田院一孤
兒病者を收
容して施養
せし所
けやけく
きつぱり
と、木で鼻
をこくつた
様に
すぐよか
剛直

身死して財残ることは、智者のせざるところなり。よからぬもの蓄へおきたるも拙く、よ
きものは、心をとめけんとはかなし。こちたく多かる、まして口をし。我こそ得めなど
いふものどもありて、あとに争ひたる、さまあし。後は誰にと志すものあらば、生けらん
中にぞ譲るべき。朝夕なくて協はざらん物こそあらめ。その外は何も持たでぞあらまほ
しき。
悲田院の堯蓮上人は、俗姓は三浦のなにがしとかや、さうなき武者なり。故郷の人の來
りて物がたりすとて、「吾妻人こそいひつることは頼まれる。都の人はことうけのみよく
て、實なし」といひしを、聖「それはさこそ思すらめども、おのれは都に久しく住みて、馴
れて見侍るに、人の心おとれりとは思ひ侍らず。なべて心やはらかに情あるゆゑに、人
のいふほどの事、けやけく否びがたく、よろづを言ひはなたず、心弱くことうけしつ。偽
せんとは思はねど、乏しくかなはぬ人のみあれば、おのづから本意通らぬこと多かるべ
し。吾妻人は我かたなれど、けには心の色なく情おくれ、偏にすぐよかなるものなれば、

聲うちゆが
み音聲な
まりて

かたへ一傍
輩

するすみ
匹如身、人
の一物も手
に持たぬを
するすみと
いふ(沙石
集)

初より否といひて止めぬ。にぎはひ豊なれば、人には頼まるゝぞかし」とことわられ侍りしこそ。この聖、聲うちゆがみあらしくして、聖教のこまやかなる理いと辨へずもやと思ひしに、この一言の後心にくとなりて、多かる中に寺をも住持せらるゝは、かく利きたるところありて、その益もあるにこそと覺を侍りし。

心なしと見ゆるものも、よき一言はいふものなり。ある荒夷の恐しけなるが、かたへにあひて、「御子はおはすや」と問ひしに、「一人も持ち侍らず」と答へしかば、「さては物のあはれは知り給はじ。情なき御心にぞものし給ふらんといとおそろし。子ゆゑにこそ萬のあはれは思ひ知らるれ」といひたりし、さもありぬべき事なり。恩愛の道ならでは、かよるものの心に慈悲ありなんや。孝養の心なきものも、子持ちてこそ親の志はおもひ知るなれ。世をすてたる人のよろづにするすみなるが、なべてほだし多かる人の、よろづに諂ひ望みかきを見て、無下に思ひくたすは、僻事なり。その人の心になりて思へば、まことにかなしからん親のため妻子のためには、恥をも忘れ盗もしつべきことな

かなしから
む云々一最
愛なる親や
妻子の爲め
には云々、
かなしはい
とほしかば
ゆしの義な
るべし、文
段抄に只今
飢ゑ凍ゆる
を見てかな
しく思はん
親妻子とい
へるは如何
違ふ所一生
前道に違ふ
所

り。されば盗人をいましめ、僻事をのみ罪せんよりは、世の人の飢ゑす寒からぬやうに、世をばおこなはまほしきなり。人恒の産なき時は恒の心なし。人窮りて盗す。世治らずして凍餒の苦あらば、科のもの絶ゆべからず。人を苦しめ法を犯さしめて、それを罪なはんこと、不便のわざなり。さていかゞして人を恵むべきとならば、上のおごり費すところを止め、民を撫で農をすよめば、下に利あらんこと疑あるべからず。衣食世の常なる上にひがごとせん人をぞ、まことの盗人とはいふべき。人の終焉のありさまのいみじかりし事など、人のかたるを聞くに、たゞ靜にして亂れずといはゞ心にくかるべきを、愚なる人は、あやしく異なる相を語りつけ、いひし言葉もふるまひも、おのれが好む方に譽めなすこそ、その人の日ごろの本意にもあらずやと覺ゆれ。この大事は、權化の人も定むべからず、博學の士もはかるべからず。おのれ違ふ所なくば、人の見聞くにはよるべからず。梅尾の上人道を過ぎ給ひけるに、河にて馬洗ふをのこ、あしくといひければ、上人た

宿執開發—
前世の功德
あらはるゝ
こと

桃尻—尻淨
きて鞍にす
わらぬ也

沛艾—康熙
字典に、沛
艾姿容俊偉
貌、文選註
には馬行貌、
馬の逞しく
などり上れ
るないふ

ちとまりて、「あなたふとや。宿執開發の人かな。阿字々々と唱ふるぞや。いかなる人の御馬ぞ。あまりにたふとく覺ゆるは」と尋ね給ひければ、「府生殿の御馬に候ふ」と答へけり。「こはめでたき事かな。阿字本不生にこそあなれ。うれしき結縁をもしつるかな」とて感涙を拭はれけるとぞ。

御隨身秦の重躬、北面の下野入道信願を、「落馬の相ある人なり。よく／＼慎み給へ」といひけるを、いとまことしからず思ひけるに、信願馬より落ちて死にけり。道に長じぬる一言、神の如しと人おもへり。さて「いかなる相ぞ」と人の問ひければ、「極めて桃尻にして、沛艾の馬を好みしかば、この相をおほせ侍りき。いつかは申し誤りたる」とぞいひける。

明雲座主、相者に逢ひ給ひて、「おのれ若兵杖の難やある」と尋ね給ひければ、相人「まことにその相おはします」と申す。「いかなる相ぞ」と尋ね給ひければ、「傷害の恐おはしますまじき御身にて、假にもかくおほしよりて尋ね給ふ。これ既にそのあやぶみの兆

なり」と申しけり。はたして矢にあたりてうせ給ひにけり。

灸治あまた所になりぬれば神事に穢ありといふこと、近く人のいひ出せるなり、格式等にも見えすとぞ。

四十以後の人、身に灸を加へて三里を焼かざれば上氣のことあり、かならず灸すべし。鹿茸を鼻にあてて嗅ぐべからず、ちひさき蟲ありて、鼻より入りて腦をはむといへり。

能をつかんとする人、藝能に志す人、堅固かたほなる一向に未熟なる瑕瑾—疵銀の義、瑾は説文に瑾瑜

美玉也、左傳に瑾瑜匿
銀などあり
てもと疵の
義にあらず
美玉の義な
るを早くよ
り斯く誤川
し來れり
おほつかな
からずして
—文段抄、
おほつかな
くは無きに
して止むべ
しと也、大
體に通じた
る所にて止
めよの義

放埒せざれば、世の博士にて、萬人の師となること、諸道かはるべからず。
ある人のいはく、年五十になるまで上手に至らざらん藝をば捨つべきなり。勵み習ふべ
き行末もなし。老人の事をば人もえ笑はず、衆に交りたるもあいなく見ぐるし。大かた
よろづのしわざは止めて、暇あるこそめやすくあらまほしけれ。世俗の事にたづさはり
て、生涯を暮すは下愚の人なり。ゆかしく覺えんことは學び聞くとも、その趣を知りな
ば、おほつかなからずして止むべし。もとより望むことなくしてやまんは、第一のこと
なり。

西大寺靜然上人、腰かどまり眉白く、まことに徳たけたるありさまにて、内裏へ參ら
れたりけるを、西園寺内大臣殿「あなたふとのけしきや」とて信仰の氣色ありければ、資
朝卿これを見て、「年のよりたるに候ふ」と申されけり。後日に、むく犬のあさましく老
いさらほひて毛はけたるをひかせて、「この氣色たふとく見えて候ふ」とて内府へ參らせ
られたりけるとぞ。

まもり—見
守り

機嫌—文段
抄に、向へ
る人の喜ぶ

爲兼大納言入道めしとられて、武士ども打圍みて、六波羅へ率て行きければ、資朝卿、一
條わたりにてこれを見て、「あな羨し。世にあらんおもひで、かくこそ有らまほしけれ」
とぞいはれける。

この人、東寺の門に兩宿せられたりけるに、かたはものども集り居たるが、手も足もね
ぢゆがみうちかへりて、いづくも不具に異様なるを見て、とりぐに類なきくせものな
り、尤も愛するに足れりと思ひて、まもり給ひけるほどに、やがてその興つきて、見に
くよいぶせく覺えければ、たゞすなほに珍しからぬものには如かずと思ひて、かへりて
後、この間植木を好みて、異様に曲折あるを求めて目を喜ばしめつるは、かのかたはも
のを愛するなりけりと、興なく覺えければ、鉢に裁ゑられける木ども、みなほり棄てら
れにけり。さもありぬべきことなり。

世にしたがはん人は、まづ機嫌を知るべし。ついであしきことは、人の耳にも逆ひ、心
にも違ひて、その事成らず。さやうの折節を心得べきなり。たゞし病をうけ、子うみ、死

氣色怒れる
きざしを見
てそれと大
方知るを機
嫌を知ると
はいへり

つばる一芽
ぐむ、きざ
す

大臣の大變
一任大臣披
露の宴

ぬる事のみ、機嫌をはからず、ついであしとて止むことなし。生住異滅の移り變るまじとの大事は、たけき河の漲り流るゝが如し。しばしも滯らず、直に行ひゆくものなり。されば眞俗につけて、かならず果し遂げんと思はんことは、機嫌をいふべからず。とかくの用意なく、足を踏みとどむまじきなり。春暮れて後夏になり、夏はてと秋の來るにはあらず。春はやがて夏の氣を催し、夏より既に秋はかよひ、秋はすなはち寒くなり、十月は小春の天氣、草も青くなり梅も苔みぬ。木の葉の落つるも、まづ落ちてめぐむにはあらず、下よりきざしつはるに堪へずして落つるなり。迎ふる氣下に設けたる故に、待ちとるついで甚早し。生老病死のうつり來ること、またこれに過ぎたり。四季はなほ定れる序あり、死期は序を待たず。死は前よりしも來らず、かねて後に迫れり。人みな死あることを知りて、待つ事しかも急ならざるに、覺えずして來る。沖の干潟遙なれども、磯より潮の滿つるが如し。

大臣の大變は、さるべき所を申しうけて行ふ、常のことなり。宇治左大臣殿は、東三條

させる事の
よせ一文段
抄に、さし
て御一門な
どいふ事の
よせもあら
れどと也、
諸抄大成の
一説に、よ
せは子細な
り何とぞ極
りたる流例
はなけれど
も也

殿にて行はる。内裏にてありけるを申されけるによりて、よそへ行幸ありけり。させる事によせなければども、女院の御所など借り申す故實なりとぞ。

筆をとればものかよれ、樂器をとれば音をたてんと思ふ。盃をとれば酒をおもひ、賽をとれば攤うたんことを思ふ。心はかならず事に觸れて來る。假にも不善のたはぶれをなすべからず。あからさまに聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。卒爾にして多年の非を改むることもあり。假に今この文をひろげざらましかば、このことを知らんや。これすなはち觸るゝ所の益なり。心更に起らずとも、佛前にありて珠數を取り經を取らば、怠るうちにも善業おのづから修せられ、散亂の心ながらも繩床に坐せば、おほえずして禪定なるべし。事理もとより二つならず、外相もしそむかざれば、内證かならず熟す。強ひて不信といふべからず。仰ぎてこれを尊むべし。

「盃の底を捨つる」といふかど心得たる」とある人の尋ねさせたまひしに、「擬當と申し侍るは、底に凝りたるを捨つるにや候ふらん」と申し侍りしかば、「さにはあらず、魚道

みなむすび
—公家の袴
僧の袈裟等
の飾に絲に
て結びさぐ
るもの

二品禪門—
藤原行忠

承仕法師—
寺中の雑役
をなす者

なり。流を残して口のつきたる所をすぶぐなり」とぞ仰せられし。

「みなむすびといふは、絲をむすび重ねたるが、蟻といふ貝に似たればいふ」と或やんごとなき人仰せられき。になといふは誤なり。

「門に額かくるを、うつといふはよからぬにや。勘解由小路二品禪門は、額かくるとのたまひき。見物の棧敷うつもよからぬにや。平張うつなどは常の事なり。棧敷構ふるなどいふべし。護摩たくといふもわろし。修する、護摩するなどいふなり。行法も法の字をすみていふわろし、濁りていふ」と清閑寺僧正仰せられき。常にいふ事にかゝることのみ多し。

花の盛は、冬至より百五十日も、時正の後七日ともいへど、立春より七十五日、おほやう違はず。

遍照寺の承仕法師、池の鳥を日ごろ飼ひつけて、堂の内まで餌をまきて、戸ひとつをあけたれば、數も知らず入りこもりける後、おのれも入りて、立て籠めて捕へつゝ殺しけ

使廳—檢非
違使廳

太衝—九月
の異名

吉平—安倍
晴明の子

顯密—顯は
天台宗、密
は眞言宗

るよそほひ、おどろしく聞えけるを、草刈る童聞きて人に告げければ、村の男ども、おこりて入りて見るに、大雁どもふためきあへる中に、法師まじりて、うち伏せねぢ殺しければ、この法師を捕へて、所より使廳へ出したりけり。殺すところの鳥を頸にかけさせて、禁獄せられけり。基俊大納言別當の時になん侍りける。

太衝の太の字、點うつたすといふこと、陰陽のともがら相論のことありけり。もりちか入道申し侍りしは、「吉平が自筆の占文の裏に書かれたる御記、近衛關白殿にあり。點うちたるを書きたり」と申しき。

世の人相逢ふ時、しばらくも黙止することなし。かならず言葉あり。そのことを聞くに、おほくは無益の談なり。世間の浮説、人の是非、自他のために失多く得少し。これをかたる時、たがひの心に、無益のことなりといふことを知らず。

東の人の、都の人にまじはり、みやこの人の、東に行きて身をたて、また本寺本山をはなれぬる顯密の僧、すべてわが俗にあらずして、人にまじはれる、見ぐるし。

人間の營みあへるわざを見るに、春の日に雪佛をつくりて、そのために金銀珠玉の飾を
 いとなみ、堂塔を建てんとするに似たり。その構を待ちてよく安置してんや。人の命あ
 りと見るほども、下より消ゆること、雪のごとくなるうちに、いとなみ待つこと甚お
 ほし。

あらぬ道—
 自分の専門
 外の道
 品—位、家
 柄などない
 者—馬鹿
 いひけたれ

一道にたづさはる人、あらぬ道の席にのぞみて、「あはれ我道ならましかば、かくよそに
 見侍らじものを」といひ、心にも思へること、常のことなれど、よにわろく覺ゆるなり。知
 らぬ道の羨しく覺えば、「あなうらやまし、などか習はざりけん」と言ひてありなん。我
 智を取り出でて人に争ふは、角あるものゝ角をかたづけ、牙あるものゝ牙をかみいだす
 類なり。人としては善にほこらず、物と争はざるを徳とす。他に勝ることのあるは大な
 る失なり。品のたかさにても、才藝のすぐれたるにても、先祖の譽にても、人にまされ
 りと思へる人は、たとひ詞に出でてこそいはねども、内心に若干の科あり。謹みてこれ
 を忘るべし。をこにも見え、人にもいひけたれ、禍をも招くは、たゞこの慢心なり。一

—いひ消さ
 れる、けな
 される

老の方人—
 老幼の人

おとなしく
 云々—大人
 しくして彼
 是と非難を
 加へ難き人
 の意、おと
 なしくは弊
 抄には老人

道にもまことに長じぬる人は、みづから明にその非を知るゆゑに、志常に満たすし
 て、つひに物に誇ることなし。

年老いたる人の、一事すぐれたる才能ありて、「この人の後には誰にか問はん」などい
 はるとは、老の方人にて生けるも徒ならず。さはあれど、それもすたれたる所のなき
 は、一生この事にて暮れにけりと拙く見ゆ。「今は忘れにけり」といひてありなん。大方
 は知りたりとも、すゝろにいひ散らすは、さばかりの才にはあらぬにやと聞え、おのづ
 から誤もありぬべし。「さだかにも辨へ知らず」などいひたるは、なほまことに道のあ
 るじとも覺えぬべし。まして知らぬこと、したりがほに、おとなしくもどきぬべくもあ
 らぬ人のいひ聞かするを、さもあらずと思ひながら聞き居たる、いとわびし。

「何事の式といふことは、後嵯峨の御代まではいはざりけるを、近き程よりいふ詞なり」と
 人の申し侍りしに、建禮門院の右京大夫、後鳥羽院の御位の後、また内住したることを
 いふに、世の式も變りたる事はなきにもと書きたり。

の義と見え
たれど年た
け身分高き
人の義に解
すべし

阮籍一竹林
七賢の隨一
好まぬ人を
ば白眼を以
て見、心に
かなへる友
には青眼を
以て接す

ひじりめー
聖目(セイ)

さしたる事なくて人のがり行くは、よからぬことなり。用ありて行きたりとも、その事はてなば疾く歸るべし。久しく居たる、いとむつかし。人と對ひたれば、詞おほく、身もくたびれ、心もしづかならず、萬の事はりて時をうつす、互のため益なし。厭はしけにいはんもわろし、心づきなき事あらんをりは、なか／＼その由をいひてん。おなじ心に向はまほしく思はん人の、つれ／＼にて、「いましばし、今日は心しづかに」などいはんは、この限にはあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべきことなり。その事となきに人の來りて、のどかに物語して歸りぬる、いとよし。また文も「久しく聞えさせねば」などばかり言ひおこせたる、いと嬉し。貝をおほふ人の、わが前なるをばおきて、よそを見わたして、人の袖のかけ、膝の下まで目をくばるまに、前なるをば人におほはれぬ。よくおほふ人は、よそまでわりなく取るとは見えすして、近きばかり掩ふやうなれど、多くおほふなり。碁盤のすみに石を立てよはじくに、むかひなる石をまもりて弾くはあたらす、わが手もとをよく見て、こよ

碁盤の上
下左右中央
四隅凡て九
個の黒星

清獻公一宋
の趙抃

風にあたり
云々一本草
序に、眞語
曰常不能
慎事上者
自致二百病
之本而怨
咎於神靈
乎當風臥
濕反責他
人於失覆
皆癡人也

なるひじりめをすぐに弾けば、立てたる石必ずあたる。萬のこと外にむきて求むべからず、たゞこゝもとを正しくすべし。清獻公がことばに、好事を行じて前程を問ふことなかれといへり。世を保たん道もかくや侍らん。内を慎まず、軽くほしきまよにしてみだりなれば、遠國必ずそむく時、始めて謀をもとむ。「風にあたり濕に臥して、病を神靈に訴ふるは愚なる人なり」と醫書にいへるが如し。目の前なる人の愁をやめ、惠をほどこし道を正しくせば、その化遠く流れんことを知らざるなり。禹の行きて三苗を征せしも、師をかへして徳を布くには如かざりき。

若き時は血氣内にあまり、心物に動きて、情欲おほし。身をあやぶめて碎け易きこと、珠を走らしむるに似たり。美麗を好みて寶を費し、これを捨てて苦の袂にやつれ、勇める心盛にして物と争ひ、心に恥ぢ羨み、好む所日々定らず、色にふけり情にめで、行を潔くして百年の身をあやまり、命を失へるためし願はしくして、身の全く久しからんことをば思はず、すけるかたに心ひきて、ながき世がたりとなる。身をあやまつことは、

若き時のしわざなり。老いぬる人は精神おとろへ、淡くおろそかにして、感じ動くところなし。心おのづから静なれば、無益のわざをなさず、身をたすけて愁なく、人の煩なからんことを思ふ。老いて智の若き時にまされること、若くして貌の老いたるにまされるが如し。

高野大師
弘法大師

小鷹大鷹
小鷹には
鳴、鶴等を
捕り、大鷹
には雉子を
捕る

小野小町がこと、極めてさだかならず。衰へたるさまは、玉造といふ文に見えたり。この文清行が書けりといふ説あれど、高野大師の御作の目録に入れり。大師は承和のはじめにかくれ給へり。小町が盛なること、その後のことにや、なほおほつかなし。小鷹によき犬、大鷹につかひぬれば、小鷹にわろくなるといふ。大に就き小を捨つる理まことにしかなり。人事おほかる中に、道を樂むより氣味深きはなし。これまことの大事故なり。一たび道を聞きて、これに志さん人、いづれの業かすたれざらん、何事かを營まん。愚なる人といふとも、賢き犬の心におとらんや。世にはこゝろえぬ事の多きなり。ともあるごとには、まづ酒をすゝめ、強ひ飲ませたる

によび呻
吟して

これらにな
き人事我
國に無き他
國の事
まばゆから
すはづか
しき様子も
なく

を興とすること、いかなる故とも心得ず。飲む人の、顔いと堪べがたけに眉をひそめ、人目をはかりて捨てんとし、遁けんとするを捕へて、引きとどめて、すどろに飲ませつれば、うるはしき人も忽に狂人となりて、をこがましく、息災なる人も目の前に大事の病者となりて、前後も知らず倒れふす。祝ふべき日などはおさましかりぬべし。あくる日まで頭いたく、物食はずによびふし、生を隔てたるやうにして、昨日のこと覺えず、公私たはやくわたくしの大事を缺きて煩となる。人をしてかゝる目を見すること、慈悲もなく、禮儀にもそむけり。かく辛き目にあひたらん人、ねたく口をしと思はざらんや。他の國にかゝる習ならひなりと、これらになき人事にて傳へ聞きたらんは、あやしく不思議に覺えぬべし。人の上にて見たるだに心うし。思ひ入れたるさまに心にくしと見し人も、思ふ所なく笑ひのよしり、詞おほく、烏帽子ゆがみ、紐はづし、脛高くかゝけて、用意なきけしき、日ごろの人とも覺えず。女は額髪はれらかに搔きやり、まばゆからず、顔うちさゝけてうち笑ひ、盃もてる手に取りつき、よからぬ人は、肴とりて口にさしあて、み

すぢりたる
一曲奏し
たる
のりあひ
罵り合ひ
えもいはぬ
何ともい
はれぬ、嘔
吐など也

酒をとりて
云々一梵網

づからも食ひたる、さまあし。聲のかぎり出しておのゝ論ひ舞ひ、年老いたる法師召し出されて、黒く穢き身を肩ぬぎて、目もあてられずすぢりたるを、興じ見る人さへうとましく憎し。あるはまた我身いみじき事ども、かたはら痛くいひ聞かせ、あるは酔泣し、下さまの人はのりあひ諍ひて、あさましく恐しく、はぢがましく心憂きことのみありて、はては許さぬ物どもおし取りて、縁より墮ち、馬車より落ちてあやまちしつ。物にも乗らぬ際は、大路をよろほひ行き、築地、門の下などに向きて、えもいはぬ事ども爲ちらし、年老い袈裟かけたる法師の、小童の肩をおさへて、聞えぬ事どもいひつよよろめきたる、いとかはゆし。かゝる事をして、この世も後の世も、益あるべきわざならば如何はせん。この世にては過おほく、財を失ひ、病をまうく。百薬の長とはいへど、萬の病は酒よりこそ起れ。憂を忘るといへど、酔ひたる人ぞ、過にし憂をも思ひ出でて泣くめる。後の世は、人の智恵を失ひ、善根を焼くこと火の如くして悪を増し、よろづの戒を破りて地獄におつべし。酒をとりて人に飲ませたる人、五百生が間手なきも

經に、自身
手遇酒器
與人飲酒
者五百世
無手何況
自飲云々

上すくなし
一参考に、
盃の上少し
と也
かいどり姿
かいどり
即ち鞋(ハ)
チカケ)を
著たるが如
き姿、文段
抄に、下著
ばかりにて
帯をもせぬ

のに生るとこそ、佛は説きたまふなれ。かくうとまきしと思ふものなれど、おのづから捨て難き折もあるべし。月の夜、雪の朝、花のもとにても、心のどかに物語して盃いだしたる、萬の興を添ふるわざなり。つれづれなる日、おもひの外に友の入りきて、執り行ひたるも心慰む。なれくしからぬあたりの御簾の中より、御菓子御酒など、よきやうなるけはひしてさし出されたる、いとよし。冬せばき所にて、火にて物いりなどして、隔なきどちさし向ひて多く飲みたる、いとをかし。旅のかりや、野山などにて、「御肴何」などいひて、芝の上にて飲みたるもをかし。いたういたむ人の、強ひられて少し飲みたるもいとよし。よき人のとりわきて、「今ひとつ、上すくなし」など、のたまはせたるも嬉し。近づかまほしき人の上戸にて、ひしくと馴れぬる、また嬉し。さはいへど、上戸はをかしく罪許さるゝものなり。酔ひくたびれて朝寝したる所を、あるじの引きあけたるに、まどひて、ほれたる顔ながら、細き鬚さしいだし、物も著あへず抱きもち、ひきしろひて逃ぐるかひどり姿のうしろ手、毛おひたる細脛のほど、をかしくつ

也

小松の御門
— 光孝天皇

鎌倉の中書
王 — 一品中
務卿宗尊親
王

吉田中納言
— 藤原藤房

きづきし。
黒戸は、小松の御門位につかせ給ひて、昔たゞ人におはしましよ時、まさな事せさせ給ひしを忘れたまはで、常にいとなませ給ひける間なり。御薪にすよけたれば黒戸といふとぞ。

鎌倉の中書王にて御鞠ありけるに、雨ふりて後いまだ庭のかわかざりければ、いかゞせんと沙汰ありけるに、佐々木隠岐入道、鋸の屑を車に積みておほく奉りたりければ、一庭に敷かれて、泥土のわづらひなかりけり。「とりためけん用意ありがたし」と人感じあへりけり。この事ある者のかたりいでたりしに、吉田中納言の、「乾砂子の用意やはなかりける」とのたまひたりしかば、恥しかりき。いみじと思ひける鋸の屑、賤しく異様のことなり。庭の儀を奉行する人、乾砂子をまうくるは、故實なりとぞ。

ある所の侍ども、内侍所の御神樂を見て人にかたるとて、寶劔をばその人ぞ持ち給へるなどいふを聞きて、うちなる女房の中に、「別殿の行幸には、晝御座の御劔にてこそ

入宋 — 宋に
渡る事

江帥 — 大江
匡房

さぎちやう
— 三總打、
左義長、正
月十五日清
涼殿の庭上
にて爆竹を
なす儀式

あれ」と忍びやかにいひたりし、心にくかりき。その人、ふるき典侍なりけるとかや。

入宋の沙門道眼上人、一切經を持來して、六波羅のあたり、焼野といふ所に安置して、殊に首楞嚴經を講じて、那蘭陀寺と號す。その聖の申されしは、「那蘭陀寺は大門口北むきな

りと、江帥の説といひ傳へたれど、西域傳、法顯傳などにも見えす、更に所見なし。江帥はいかなる才覺にてか申されけん、おほつかなし。唐土の西明寺は北向勿論なり」と申しき。

さぎちやうは、正月にうちたるさぎちやうを、眞言院より神泉苑へ出して焼きあぐるなり。法成就の池にこそとはやすは、神泉苑の池をいふなり。

「ふれくこのき、たんばのこのきといふ事、米搗きふるひたるに似たれば粉雪といふ。たまれこのきといふべきを、誤りてたんばのとは言ふなり。垣や木のまたにとうたふべし」と或ものしり申しき。昔よりいひけることによ。鳥羽院をさなくおはしまして、雪の降

讃岐典侍一
堀河院の女
官

守をいれ申
す一相模守
を我亭に招
き入るる
けいめい一
經營、接待

るにかく仰せられけるよし、讃岐典侍が日記に書きたり。

四條大納言隆親卿、からざけといふものを供御にまゐらせられたりけるを、「かく怪しきもの参るやうあらじ」と人の申しけるを聞きて、大納言「鮭といふ魚まゐらぬことにてあらんにこそあれ。鮭の素干なでふことかあらん。鮎の素干はまゐらぬかは」と申されけり。

人つく牛をば角を切り、人くふ馬をば耳を切りてそのしるしとす。しるしをつけずして人をやぶらせぬるは、主の科なり。人くふ犬をば養ひ飼ふべからず。これみな科あり、律の禁なり。

相模守時頼の母は、松下禪尼とぞ申しける。守をいれ申さるることありけるに、すよけたるあかり障子のやぶればかりを、禪尼手づから小刀して切りまはしつゝ張られければ、兄の城介義景、その日のけいめいして候ひけるが、「たまはりて、なにがし男に張らせ候はん。さやうの事に心得たるものに候ふ」と申されければ、「その男尼が細工によ

の川意をな
す係なりし
なり

城陸奥守一
秋田城介に
して陸奥守
を兼ねし也

もまさり侍らじ」とてなほ一間づつ張られけるを、義景「皆を張りかへ候はんは、遙にたやすく候ふべし。斑に候ふも見苦しくや」と重ねて申されければ、「尼も後はさわくと張りかへんと思へども、今日ばかりはわざとかくてあるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して用ゐることぞと、若き人に見ならはせて、心づけんためなり」と申されける、いと有難かりけり。世を治むる道、儉約を本とす。女性なれども聖人の心に通へり。天下をたもつほどの人を子にて持たれける、誠にたゞ人にはあらざりけるとぞ。

城陸奥守泰盛は雙なき馬乗なりけり。馬を引き出でさせけるに、足をそろへて鬮をゆらりと超ゆるを見ては、「これはいさめる馬なり」とて鞍を置きかへさせけり。また足を延べて鬮に蹴あてぬれば、「これは鈍くして過あるべし」とて乗らざりけり。道を知らざらん人、かばかり恐れなんや。

吉田と申す馬乗の申し侍りしは、「馬毎にこはきものなり。人の力争ふべからずと知るべし。乗るべき馬をばまづよく見て、強き所弱き所を知るべし。次に轡鞍の具に危きこと

非家—その道の家柄ならぬ人

やあると見て、心にかゝる事あらば、その馬を馳すべからず。この用意をわすれざるを馬乗とは申すなり。これ秘藏のことなり」と申しき。

よろづの道の人、たとひ不堪なりといへども、堪能の非家の人にならぶ時、必ずまざることは、たゆみなく慎みて軽々しくせぬと、偏に自由なるとの等しからぬなり。藝能所作のみにあらず、大方のふるまひ心づかひも、愚にして謹めるは得の本なり、巧にしてほしきまよなるは失の本なり。

あるもの子を法師になして、「學問して因果の理をもしり、説經などして世わたるたづきともせよ」といひければ、教のまよに説經師にならんために、まづ馬に乗りならひけり。輿車もたぬ身の、導師に請ぜられん時、馬など迎におこせたらんに、桃尻にて落ちなんは心愛かるべしと思ひけり。次に佛事の後酒など勧むることあらんに、法師のむけに能なきは、檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふことをならひけり。二つのわざやうく境に入りければ、いよくよくしたくおほえて嗜みけるほどに、説經ならふ

すさまじく—不興

早歌—小歌端歌の類に

や、又はハヤウタにて所謂しりとりなどの類か
—あられます事—豫期する事

むねと云々—主として希望する事

べき暇なくて年よりにけり。この法師のみにもあらず、世間の人なべてこの事あり。若きほどは諸事につけて、身をたて、大なる道をも成し、能をもつき、學問をもせんと、行末ひさしくあられます事ども、心にはかけながら、世をのどかに思ひてうち怠りつゝ、まづさしあたりたる目の前の事にのみまぎれて月日をおくれば、ことごとくになす事なくして身は老いぬ。終にももの上手にもならず、思ひしやうに身をもたず、悔ゆれどもとり返さるゝ齡ならねば、走りて坂をくだる輪の如くに衰へゆく。されば一生のうち、むねとあらまほしからん事の中に、いづれか勝ると、よく思ひくらべて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひすてよ、一事を勵むべし。一日の中一時のうちにも、數多のことに來らん中に、すこしも益のまさらんことを營みて、その外をばうち捨てよ、大事をいそぐべきなり。いづかたをも捨てじと心にとりもちては、一事も成るべからず。たとへば碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人にさきだちて、小をすて大につくが如し。それにとりて、三つの石をすてよ、十の石につくことは易し。十をすてよ十一につくことは

かたし。一つなりとも勝らんかたへこそつくべきを、十までなりぬれば惜しくおほえて、多くまさらぬ石にはかへにくし。これをも捨てず、かれをもとらんと思ふころに、かれをも得ず、これをも失ふべき道なり。京にすむ人、急ぎて東山に用ありて既に行きつきたりとも、西山に行きてその益まさるべき事を思ひえたらば、門よりかへりて西山へゆくべきなり。こゝまで来著きぬれば、この事をばまづいひてん、日をさよぬことなれば、西山の事はかへりてまたこそ思ひたよめと思ふゆゑに、一時の懈怠すなはち一生の懈怠となる。これをおそるべし。一事を必ず成さんとおもはど、他の事の破るよをも痛むべからず。人のあざけりをも恥づべからず。萬事にかへずしては一の大事成るべからず。人のあまたありける中にて、あるもの「ますほの薄まそほの薄な」といふことあり。渡邊のひじりこの事を傳へ知りたり」と語りけるを、登蓮法師その座に侍りけるが聞きて、雨の降りけるに、「簞笠やある、貸したまへ。かの薄のことならひに、渡邊の聖のがり尋ねまからん」といひけるを、「あまりに物さわがし。雨やみてこそ」と人のいひ

ますほ云々
十寸穂の
薄、眞麻穂
の薄、一は
穂の一尺計
なるない
ひ、一は穂

の糸の亂れ
たるが如き
ないふとぞ
敏きときは
云々論語
陽貨篇

ければ、「無下の事をも仰せらるよものかな。人の命は雨のはれまを待つものかは。我も死に聖もうせなば、尋ね聞きてんや」とて、はしり出でて行きつゝ習ひ侍りにけりと申し傳へたるこそ、ゆゑしくありがたう覺ゆれ。敏きときはすなはち功ありとぞ、論語といふふみにも侍るなる。この薄をいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因縁をぞ思ふべかりける。今日はその事をなさんと思へど、あらぬいそぎまづ出でてまぎれ暮し、待つ人はさはりありて、たのめぬ人はきたり、頼みたる方のごとはたがひて、思ひよらぬ道ばかりはかなひぬ。煩はしかりつる事はことなくて、安かるべき事はいと心ぐるし。日々に過ぎゆくさま、かねて思ひつるに似ず。一年のこともかくのごとし。一生の間もまたしかなり。かねてのあらまし皆違ひゆくかと思ふに、おのづから違はぬ事もあれば、いよくものは定めがたし。不定と心得ぬるのみ誠にて違はず。妻といふものこそ、男のもつまじきものなれ。いつも獨住にてな、ど聞くこそ心にくけ

男をぞ一男
こそ誤な
るべき由古
來の定説也

半空一おる
そかに、疎
略に

ばえ一物の
つや
およすげた
る一大様に
大人めける

れ。たれがしが婿になりぬとも、またいかなる女をとりするて相住むな。ときよつれば、
無下に心おとりせらるゝわざなり。ことなることなき女を、よしと思ひ定めてこそそひ
居たらめと、賤しくもおしはかられ、よき女ならば、この男をぞらうたくして、あが佛
とまもりたるらめ。たとへば、さばかりにこそと覺えぬべし。まして家の内を行ひをさ
めたる女、いとくちをし。子など出でてかしづき愛したる、心うし。男なくなりて
後、尼になりて年よりたるありさま、亡きあとまであさまし。いかなる女なりとも、明
暮そひみんには、いと心づきなくにかりなん。女のため半空にこそならめ。よそな
がら時々通ひすまんこそ、年月へても絶えぬなからひとならめ。あからさまに來て泊
り居な。どせんは、めづらしかりぬべし。
夜に入りてものはえなしといふ人、いとくちをし。萬の物のきら、かざり、色ふしも、
夜のみこそめでたけれ。晝はことそぎおよすけたる姿にてもありなん。夜はきらよかに
花やかなる装束いとよし。人のけしきも、夜の火影ぞよきはよく、物いひたる聲も、暗

けはれなく
一髪と暗と
なく
ゆする一沐
浴髪あらひ
などするな
いふ
くらき人
闇愚の人
文字の法
師、諳證の
禪師一は
教相を習ひ
て座禪を知
らぬ者、一
は座禪に專
にして教相
に暗き者

くて聞きたる、用意ある、心にくし。何も物の音も、たゞ夜ぞひとときはめでたき。さし
てことなることなき夜、うち更けて參れる人の、清けなる様したるいとよし。若きどち
心とどめて見る人は、時をもわかぬものなれば、殊にうちとけぬべき折節ぞ、けはれな
く引きつくるはまほしき。よき男の、日くれてゆるし、女も夜ふくるほどにすべりつ
つ、鏡とりて顔な。どつころひ出づるこそをかしけれ。
神佛にも、人の詣でぬ日、夜まるりたるよし。
くらき人の、人をはかりて、その智を知れりとおもはん、更にあたるべからず。拙き人
の、基うつことばかりに敏くたくみなるは、賢き人の、この藝におろかなるを見て、お
のれが智に及ばずとさだめて、よろづの道のたくみ、わが道を人の知らざるを見て、お
のれ勝れたりと思はんこと、大なるあやまりなるべし。文字の法師、諳證の禪師、互に
はかりて、おのれに如かずと思へる、共にあたらす。おのれが境界にあらざるものをば、
争ふべからず、是非すべからず。

達人一賢達
の人、賈誼
騶鳥賦通人
大觀兮物無
不可、注
に通一作
達

つや／＼
一向

欺かす一あ
ざけり笑は
すの義なら
ん

達人の人を見る眼は、すこしも誤る處あるべからず。たとへば、ある人の世に虚言を構へいだして、人をはかる事あらんに、正直にまことと思ひて、いふまゝにはからるゝ人あり。あまりに深く信をおこして、なほわづらはしく虚言を心をそふる人あり。また何としも思はで、心をつけぬ人あり。又いさゝかおほつかなく覺えて、たのむにもあらずたのまずもあらで、案じ居たる人あり。又まことしくは覺えねども、人のいふことなれば、さもあらんとて止みぬる人もあり。又さまざまに推し心えたるよしして、かしこけに打ちうなづき、ほゑるみて居たれど、つや／＼知らぬ人あり。また推し出して、あはれさるめりと思ひながら、なほ誤もこそあれと怪しむ人あり。又異なるやうもなかりけりと、手を打ちて笑ふ人あり。また心えたれども、知れりともいはず、おほつかなからぬは、とかくの事なく、知らぬ人と同じやうにて過ぐる人あり。またこの虚言の本意をはじめより心えて、すこしも欺かす、構へいだしたる人とおなじ心になりて、力をあはする人あり。愚者の中のはぶれだに、知りたる人の前にては、このさまざまの得た

久我内大臣
殿一通基
この殿一通
基を指す
土御門相國
一実
西宮一西宮
記、西宮左
大臣高明の
作

る所、詞にても顔にても、かくれなく知られぬべし。ましてあきらかならん人の、惑へるわれらを見んこと、掌の上のものを見んがごとし。たゞしかやうの推量にて、佛法までをなすらへ言ふべきにはあらず。
ある人、久我殿を通りけるに、小袖に大口きたる人、木造の地藏を田の中の水におしひたして、ねんごろに洗ひけり。心えがたく見るほどに、狩衣の男ふたりみたり出で来て、「こゝにおはしましけり」とてこの人を具して往にけり。久我内大臣殿にてぞおはしける。尋常におはしましける時は、神妙にやんごとなき人にておはしけり。
東大寺の神興、東寺の若宮より歸座のとき、源氏の公卿まるられけるに、この殿大將にて先をおはれけるを、土御門相國「社頭にて警蹕いかゞはべるべからん」と申されければ、「隨身のふるまひは、兵杖の家が知ることに候ふ」とばかり答へ給ひけり。さて後に仰せられけるは、「この相國、北山抄を見て、西宮の説をこそ知られざりけれ。眷屬の悪鬼悪神を恐るゝゆゑに、神社にて殊に先をおふべき理あり」とぞ仰せられける。

定額―一定
の人数

揚名介―源
氏夕顔に見
え源氏三秘
事の―也

退凡下乗―
西域記九に
出づ

諸寺の僧のみにもあらず、定額の女孺といふこと、延喜式に見えたり。すべて數さだま
りたる公人の通號にこそ。

揚名介にかぎらず、揚名目といふものあり。政事要略にあり。

横川の行宣法印が申しはべりしは、「唐土は呂の國なり、律の音なし。和國は單律の國に
て、呂の音なし」と申しき。

吳竹は葉ほそく、河竹は葉ひろし。御溝にちかきは河竹、仁壽殿の方によりて植ゑられ
たるは吳竹なり。

退凡下乗の卒都婆、外なるは下乗、内なるは退凡なり。

十月をかみなづきといひて、神事にはどかるべきよしは、記したるものなし。本文も見
えず。たゞし當月諸社の祭なきゆゑに、この名あるか。この月萬の神たち、太神宮へ集
り給ふなどいふ説あれども、その本説なし。さることならば、伊勢には殊に祭月とす
べきに、その例もなし。十月諸社の行幸、その例もおほし。たゞしおほくは不吉の例な

鞞―矢籠に
て平胡籬
(ヒラヤナ
グヒ)の類、
音に清濁兩
説あり

看督長―檢
非違使廳に
附屬せる官

法曹―明法
家

り。

勅勘の所に鞞かくる作法、今は絶えて知れる人なし。主上の御惱、大かた世の中のさわ
がしき時は、五條の天神に鞞をかけらる。鞍馬にゆぎの明神といふも、鞞かけられたり
ける神なり。看督長の負ひたる鞞を、その家につけられぬれば、人いで入らず。この事
絶えて後、今の世には封をつくることになりけり。

犯人を笞にて打つときは、拷器によせてゆひつくるなり。拷器のやうも、よする作法も、
今はわきまへ知れる人なしとぞ。

比叡山に、大師勸請の起請といふことは、慈惠僧正書きはじめ給ひけるなり。起請文
といふこと、法曹にはその沙汰なし。いにしへの聖代、すべて起請文につきて行はるゝ

政はなきを、近代このこと流布したるなり。また法令には、水火にけがれをたてず、
入物にはけがれあるべし。

徳大寺右大臣殿、檢非違使の別當のとき、中門にて使廳の評定おこなはれけるほどに、

にれ云々―
反芻動物の
呑みし食を
更に口に戻
し嚼む事

怪を見て云
云―千金方
黄帝雜忌咒
に出づ

さうなく―
左右なく、
やたらに

官人章兼が牛はなれて、廳のうちへ入りて、大理の座のはまゆかの上へのほりて、にれ
うち噛みて臥したりけり。重き怪異なりとて、牛を陰陽師のもとへ遣すべきよし、おの
おの申しけるを、父の相國さまたまひて、「牛に分別なし。足あらばいづくへかのほらざ
らん。庭弱の官人、たましく出仕の微牛をとらるべきやうなし」とて、牛をば主にかへ
して、臥したりける疊をばかへられにけり。あへて凶事なかりけるとなん。怪を見て
あやしまざる時は、怪かへりてやぶるといへり。

龜山殿たてられんとて、地をひかれけるに、大なる蛇數もしらす凝り集りたる塚あり
けり。この所の神なりといひて、事のよし申しければ、いかゞあるべきと勅問ありける
に、「ふるくよりこの地を占めたるものならば、さうなく掘り捨てられがたし」とみな人
申されけるに、「この大臣一人、王土に居らん蟲、皇居を建てられんに、何のたよりをか
なすべき。鬼神は邪なし。答むべからず。たゞ皆ほりすつべし」と申されたりければ、
塚をくづして、蛇をば大井川に流してけり。更にたよりなかりけり。

經文な、どの紐をゆふに、上下より襷にちがへて、二すぢの中より、わなかしらを横
さまにひき出すことは、常のことなり。さやうにしたるをば、華嚴院の弘辨僧正解き
てなほさせけり。「これはこの頃やうのことなり。いと見にくし。うるはしくは、たゞく
るくると巻きて、上より下へ、わなの先をさしはさむべし」と申されけり。ふるき人に
て、かやうのこと知れる人になん侍りける。

人の田を論ずるもの、訟にまけてねたさに、その田を刈りてとれとて、人をつかはしけ
るに、まづ道すがらの田をさへ刈りもてゆくを、「これは論じ給ふ所にあらず。いかにか
くは」といひければ、刈るものども「その所とても刈るべき理なけれども、僻事せん
とてまかるものなれば、いづくをか刈らざらん」とぞいひける。ことわりいとをかしか
りけり。

喚子鳥は春のものなりとばかりいひて、いかなる鳥ともさだかに記せるものなし。ある
眞言書の中に、喚子鳥なくとき招魂の法をば行ふ次第あり。これは鶴なり。萬葉集の長

喚子鳥―百
千鳥、稻お
ほせ鳥と共
に古今三鳥
と稱し所謂
古今傳授の
秘傳とせる
もの也
萬葉集云々
―第一章

讃岐國安益郡之時軍王見山作歌

顔回も云々
論語雅也
篇に、顔回不幸短命而死矣

ひしげくだ
く一塵碎す

歌に、霞たつながき春日のなごつとけたり。鶴鳥も喚子鳥の事様に通ひて聞ゆ。萬の事はたのむべからず。愚なる人は、ふかくものを恐むゆゑに、うらみ怒ることあり。勢ありとて恐むべからず、こはきものまつ滅ぶ。財多しとて恐むべからず、時の間に失ひやすし。才ありとて恐むべからず、孔子も時に遇はず。徳ありとてたのむべからず、顔回も不幸なりき。君の寵をも恐むべからず、誅をうくること速なり。奴したがへりとして恐むべからず、そむき走ることあり。人の志をもたのむべからず、かならず變ず。約をも恐むべからず、信あることすくなし。身をも人をも恐まざれば、是なる時はよろこび、非なる時はうらみず、左右廣ければさはらず、前後遠ければふさがらず。せばき時はひしげくだく。心を用ゐること少しきにしてきびしき時は、物に逆ひ争ひてやぶる。寛くして柔なるときは、一毛も損せず。人は天地の靈なり。天地はかぎるところなし。人の性何ぞことならん。寛大にして窮らざるときは、喜怒これにさはらずして、物のためにわづらはず。

想夫戀一季吟の説に、白氏文集、韻府等に相夫憐とあるをあやまれるならん
最明寺入道
北條時頼

秋の月はかぎりなくめでたきものなり。いつとても月はかくこそあれとて、思ひわかざらん人は、無下に心うかるべきことなり。御前の火爐に火をおくときは、火箸してはさむことなし。土器より直にうつすべし。さればころびおちぬやうに心えて、炭を積むべきなり。八幡の御幸に、供奉の人淨衣をきて、手にて炭をさよれければ、ある有職の人「白きものを著たる日は、火箸を用ゐる、苦しからず」と申されけり。想夫戀といふ樂は、女男を戀ふるゆゑの名にはあらず。もとは相府蓮、文字のかよへるなり。晉の王儉、大臣として、家に蓮を植ゑて愛せしときの樂なり。これより大臣を蓮府といふ。廻忽も廻鶻なり。廻鶻國とてえびすのこはき國あり、その夷、漢に伏して後にきたりて、おのれが國の樂を奏せしなり。平宣時朝臣、老ののち昔がたりに、「最明寺入道あるよひの間によばると事ありしに、やがてと申しながら、直垂のなくとかくせしほどに、また使きたりて、直垂な」どの

さふらはぬにや、夜なればことやうなりとも疾くとありしかば、なえたる直垂、うち
 うちのまよにて罷りたりしに、銚子にかはらけ取りそへてもて出でて、この酒をひとり
 たうべんがさうぐしければ申しつるなり。肴こそなけれ、人はしづまりぬらん。さり
 ぬべき物やあるといづくまでも求め給へとありしかば、紙燭さしてくまぐを求めし
 ほどに、臺所の棚に、小土器に味噌の少しつきたるを見出でて、これを求め得てさふ
 らふと申しよかば、事足りなんとて、心よく數獻におよびて興に入られはべりき。その
 世にはかくこそ侍りしか」と申されき。

最明寺入道、鶴岡の社参のついでに、足利左馬入道のもとへ、まづ使を遣して、立ちい
 られたりけるに、あるじまうけられたりけるやう、一獻にうち鮑、二獻にえび、三獻に
 かい餅にて止みぬ。その座には亭主夫婦、隆辨僧正、あるじがたの人にて坐せられけり。
 さて「年ごとにたまはる足利の染物心もとなく候ふ」と申されければ、「用意しさふら
 ふ」とて、いろくの染物三十、前にて女房どもに小袖に調せさせて後につかはされけ

あるじ一饗
 應
 うち鮑一献
 斗鮑、鮑の
 肉を打ち延
 して鮑斗と
 せる物

り。その時見たる人のちかくまで侍りしが、かたり侍りしなり。

徳をつく
 利徳を身に
 つける、財
 産を作る

ある大福長者のいはく、「人はよろづをさしおきて、ひたぶるに徳をつくべきなり。貧し
 くては生はるかひなし。富めるのみを人とす。徳をつかんとおもはど、すべからくまづ
 その心づかひを修行すべし。その心といふは他の事にあらず。人間常住のおもひに住し
 て、假にも無常を觀する事なかれ。これ第一の用心なり。次に萬事の用をかなふべから
 ず。人の世にある、自他につけて所願無量なり。欲に従ひて志を遂げんと思はど、百
 萬の錢ありといふとも、しばらくも住すべからず。所願は止むときなし。財は盡くる期
 あり。かぎりある財をもちてかぎりなき願に従ふこと得べからず。所願心にきざすこと
 あらば、われを亡すべき悪念きたれりと、かたく慎しみおそれて、小用をもなすべから
 ず。次に錢を奴の如くしてつかひ用るるものとしらば、長く貧苦を免るべからず。君の
 如く神のごとくおそれ尊みて、従へ用ることなかれ。次に恥にのぞむといふとも、怒り
 怨むることなかれ。次に正直にして約をかたくすべし。この義を守りて利をもとめん人

癡直―熱氣
 甚しき腫物
 究竟、理即
 一天台に理
 即、名字即、
 觀行即、相
 似即、分身
 即、究竟即
 の六即あり、
 理即は
 凡夫畜類ま
 で佛性を具
 するをい
 ひ、究竟即
 は妙覺の位
 如來の地

は、富の來ること、火のかわけるに就き、水の下れるに従ふが如くなるべし。錢つもりて
 盡きざるときは、宴飲聲色を事とせず、居所をかざらず、所願を成せざれども、心とこし
 なへに安く樂し」と申しき。そもく人は所願を成せんがために財をもとむ。錢をたか
 らとする事は、願をかなふるがゆゑなり。所願あれどもかなへず、錢あれども用るざら
 んは、全く貧者とおなじ。何をか樂とせん。このおきてはたゞ人間の望を絶ちて、貧を
 憂ふべからずと聞えたり。欲をなして樂とせんよりは、しかじ財なからんには、癡直
 を病むもの、水に洗ひて樂とせんよりは、病まざらんにはしかじ。こゝにいたりては、
 貧富分くところなし。究竟は理即到ひとし。大欲は無欲に似たり。
 狐は人に食ひつくものなり。堀河殿にて、舍人が寢たる足を狐にくはる。仁和寺にて、
 夜本寺の前をとほる下法師に、狐三つ飛びかゝりて食ひつきければ、刀を抜きてこれを
 拒ぐ間、狐二疋をつく。ひとつはつき殺しぬ。二は遁けぬ。法師はあまた所くはれなが
 ら、ことゆゑなかりけり。

龍秋―樂人
 豊原龍秋
 荒涼―過言

のく―口を
 のく意にて
 笛を吹くに
 口をもち直
 すをいふ
 性骨―天性
 その骨を得
 たるをいふ

四條 黄門命ぜられていはく、「龍秋は道にとりてはやんごとなき者なり。先日きたりて
 いはく、短慮のいたり、極めて荒涼の事なれども、横笛の五の穴は、いさよかいぶか
 しき所の侍るか、ひそかにこれを存す。そのゆゑは、干の穴は平調、五の穴は下無調
 なり。その間に勝絶調をへだてたり。上の穴雙調、次に亮鐘調をおきて、夕の穴黄鐘調
 なり。その次に鸞鏡調をおきて、中の穴盤涉調、中と六とのあはひに神仙調あり。かや
 うに間々にみな一律をぬすめるに、五の穴のみ上の間に調子をもたずして、しかも間を
 くばる事ひとしきゆゑに、その聲不快なり。さればこの穴を吹くときは、かならずのく
 のけあへぬときは物にあはず。吹きうる人かたしと申しき。料簡のいたり、まことに興
 あり。先達後生をおそるといふこと、この事なり」と侍りき。他日に景茂が申し侍りし
 は、「笙は調へおほせてもちたれば、たゞ吹くばかりなり。笛はふきながら、息のうち
 て、かつしらべもてゆく物なれば、穴ごとに口傳の上に、性骨を加へて心を入るよこと
 五の穴のみにかぎらず。偏にのくとばかりも定むべからず。あしく吹けば、いづれの穴

もこころよからず。上手はいづれをも吹きあはす。呂律のものにかなはざるは、人の咎なり、器物の失にあらす」と申しき。

太子—聖徳太子

はかせ—師範、定規

何事も、邊土は卑しくかたくななれども、天王寺の舞樂のみ、都に恥ぢずといへば、天王寺の伶人の申しはべりしは、「常寺の樂は、よく圖をしらべ合せて、ものの音のめでたくとのほり侍ること、外よりも勝れたり。ゆゑは太子の御時の圖、今にはべるをはかせとす。いはゆる六時堂の前の鐘なり。そのこゝる黄鐘調の最中なり。寒暑に従ひて上り下りあるべきゆゑに、二月涅槃會より聖靈會までの中間を指南とす。秘藏のことなり。この一調子をもちて、いづれの聲をもとのへ侍るなり」と申しき。およそ鐘のこゑは黄鐘調なるべし。これ無常の調子、祇園精舎の無常院の聲なり。西園寺の鐘、黄鐘調に鑄らるべしとて、あまたたび鑄替へられけれども、かなはざりけるを、遠國よりたづね出されけり。法金剛院の鐘の聲、また黄鐘調なり。

放免—又ハリメンとも

建治弘安のころは、祭の日の放免のつけものにて、ことやうなる紺の布四五端にて、馬を

讀む、檢非違使廳に雇はれ替固の役を勤むる小者、元放免せられし罪人を以て任じたるよりの稱、つけものはその著用せる錦繡

歌のこゝろ蜘蛛のいにあれたる駒はつなぐとも二道かくる人は頼まじと云ふ古歌の意味

つくりて、尾髪にはとうしみをして、蜘蛛のいかきたる水干に著けて、歌のこゝろなどいひてわたりしこと、常に見及び侍りしなども、興ありてしたる心地にてこそ侍りしかと、老いたる道志どもの今日もかたりはべるなり。この頃は、つけもの年をおくりて過差ことの外になりて、萬の重きものを多くつけて、左右の袖を人にもたせて、みづからは鋒をだに持たず、息つきくるしむ有様いと見ぐるし。

竹谷の乘願房、東二條院へまゐられたりけるに、「亡者の追善には何事か勝利おほき」とたづねさせ給ひければ、「光明眞言、寶篋印陀羅尼」と申されたりけるを、弟子ども

「いかにかくは申し給ひけるぞ。念佛に勝ること候ふまじとは、など申し給はぬぞ」と申しければ、「わが宗なれば、さこそ申さまほしかりつれども、まさしく稱名を追福に修して巨益あるべしと説ける經文を見及ばねば、何に見えたるぞと、重ねて問はせたまはば、いかゞ申さんとおもひて、本經のたしかなるにつきて、この眞言、陀羅尼をば申しつるなり」とぞ申されける。

田鶴のおほいどの一良經の三男基家

さうまき一鞘巻、鏢なき短刀にて緒を鞘に巻き腰に結びつく

田鶴のおほいどののは、童名たづ君なり。鶴を飼ひ給ひけるゆゑにと申すは僻事なり。陰陽師有宗入道、鎌倉よりのほりて、尋ねまうできたりしが、まつさし入りて、「この庭のいたづらに廣きこと、あさましくあるべからぬ事なり。道を知るものは植うる事をつとむ。細道ひとつのこして、みな畠に作りたまへ」と諫め侍りき。誠にすこしの地をも徒におかんことは益なきことなり。食物薬種などどうぞおくべし。多久資が申しけるは、通憲入道、舞の手のうちに興ある事どもをえらびて、磯の禪師といひける女に教へてまはせけり。白き水干にさうまきをさよせ、烏帽子をひき入れたりければ、男舞とぞいひける。禪師がむすめ静といひける、この藝をつけり。これ白拍子の根源なり。佛神の本縁をうたふ。その後源光行、おほくの事をつくれり。後鳥羽院の御作もあり。龜菊に教へさせ給ひけるとぞ。後鳥羽院の御時、信濃の前司行長稽古のほまれありけるが、樂府の御論義の番にめされて、七徳の舞を二つ忘れたりければ、五徳の冠者と異名をつきにけるを、心うさことに

せしむる人数に召さるる也
山門一比叡
山延曆寺

ふしはかせ一節の規範
妙観一攝州
勝尾寺の觀音を刻みし人

して、學問をすてよ遁世したりけるを、慈鎮和尚、一藝あるものをば、下部までも召しおきて、不便にせさせ給ひければ、この信濃入道を扶持し給ひけり。この行長入道平家物語を作りて、生佛といひける旨目に教へてかたらせけり。さて山門のことを殊にゆゑしくかけり。九郎判官のことは委しく知りて書き載せたり。蒲の冠者のことは能く知らざりけるにや、多くの事どもをしるしもらせり。武士の事弓馬のわざは、生佛東國のものにて、武士に問ひ聞きてかよせけり。かの生佛がうまれつきの聲を、今の琵琶法師は學びたるなり。六時禮讀は、法然上人の弟子安樂といひける僧、經文を集めて作りてつとめにしけり。その後太秦の善觀房といふ僧、ふしはかせを定めて聲明になせり。一念の念佛の最初なり。後嵯峨院の御代よりはじまれり。法事讀もおなじく善觀房はじめたるなり。千本の釋迦念佛は、文永のころ、如輪上人これをはじめられけり。よき細工は少し鈍き刀をつかふといふ。妙觀が刀はいたくたよす。

とよまれて
一騒がれて

園別當入道
一藤原基氏

なんでふ云
云一何ぞ百
日の鯉を切
らん、明に
虚言と聞ゆ
と也、切ら
んぞ迄が北
山殿の詞

五條の内裏には妖物ありけり。藤大納言殿かたられ侍りしは、殿上人ども黒戸にて碁をうちけるに、御簾をかよけて見るものあり。誰そと見向きたれば、狐人のやうについてさしのぞきたるを、あれ狐よとよまれて、まどひ遁けにけり。未練の狐、ばけ損じけるにこそ。

「園別當入道は、さうなき庖丁者なり。ある人のもとにて、いみじき鯉を出したりければ、みな人、別當入道の庖丁を見ばやと思へども、たやすくうち出でんもいかゞとためらひけるを、別當入道さる人にて、このほど百日の鯉を切りはべるを、今日缺き侍るべきにあらず、まけて申しうけんとして切られける、いみじくつきくしく興ありて、人ども思へりけると、ある人北山太政入道殿にかたり申されたりければ、かやうのこと、おのれは世にうるさく覺ゆるなり。切りぬべき人なくば、たべ、切らんといひたらんは尙よかりなん。なんでふ百日の鯉を切らんぞとのたまひたりし、をかしくおほえし」と人のかたり給ひける、いとをかし。大かた、ふるまひて興あるよりも、興なくて安らかなる

ついで云々
一其場合の
おもしるき
やうに、文
段抄に其首
尾をつくる
ひて面白き
やうにしな
す事也とい
へるは如何

ちう一柱な
り、琴には
ことごと
ひ、琵琶に
はちうとい
ふ

ひもの木一
檜物師の使
ふ木

がまさりたることなり。賓客の整應なんども、ついでをかききやうにとりなしたるも、誠によけれども、唯その事となくととり出でたる、いとよし。人に物をとらせたるも、ついでなくて、これを奉らんといひたる、まことの志なり。惜しむよしして乞はれんと思ひ、勝負のまけわざにことつけなんどしたる、むつかし。すべて人は無智無能なるべきものなり。ある人の子の、見ざまなんどあしからぬが、父の前にて人ともいふとて、史書の文をひきたりし、さかしくは聞えしかども、尊者の前にてはさらすとも覺えしなり。

またある人の許にて、琵琶法師の物語をきかんとて、琵琶を召しよせたるに、ちうのひとつ落ちたりしかば、「作りてつけよ」といふに、ある男の中に、あしからずと見ゆるが、「ふるきひさくの柄ありや」なんどいふを見れば、爪をおふしたり。琵琶なんど弾くにこそ。めくら法師の琵琶、その沙汰にもおよばぬことなり。道に心えたるよしにやと、かたはらいたかりき。「ひさくの柄はひもの木とかやいひて、よからぬものに」とぞ或人

をこがまし
—馬鹿げて
居る
うららかに
—明瞭に

仰せられし。わかき人は、少しの事もよく見えわろく見ゆるなり。
よろづの科あらじとおもはど、何事にも誠ありて、人をわかすうやくしく、言葉すく
なからんにはしかじ。男女老少みなさる人こそよけれども、殊にわかかたちよき人の
言うるはしきは、忘れがたく思ひつかるものなり。よろづのとはは、馴れたるさまに
上手めき、所をたるけしきして、人をないがしろにするにあり。
人のものを問ひたるに、知らずしもあらじ。ありのまゝにいはんはをこがましとにや、心
まどはすやうに返事したる、よからぬ事なり。知りたる事も、なほさだかにと思ひてや
問ふらん。又まことに知らぬ人もなか無からん。うららかに言ひきかせたらんは、おと
なしく聞えなまし。人はいまだ聞き及ばぬ事を、わが知りたるまゝに、「さてもその人の
事のあさましき」などばかり言ひやりたれば、「いかなる事のあるにか」と推し返し問
ひにやるこそ、こゝろづきなけれ。世にふりぬる事をも、おのづから聞きもらすことも
あれば、おほつかなからぬやうに告げやりたらん、悪しかるべきことかは。かやうの事

木精—山
彦、木神、
木魅、罔象
など何れも
同じく木石
の化生妖怪
を云ふ也

しる所—知
行所
いざたまへ
—いざ来た
まへ
かいもちひ
—牡丹餅

は、ものなれぬ人のあることなり。
主ある家には、すどろなる人、心のまゝに入りくることなし。あるじなき所には、道行
人みだりに立ち入り、狐鼻やうのものも、人けにせかれねば、所をがほに入りすみ、木精
などいふけしからぬ形もあらはるものなり。また鏡には色形なき故に、よろづの影
きたりてうつる。鏡に色形あらましかば、うつらざらまし。虚空よくものを容る。われ
らが心に、念々のほしきまゝにきたり浮ぶも、心といふものの無きにやあらん。心にぬ
しあらましかば、胸のうちに若干のことは入りきたらざらまし。
丹波に出雲といふ所あり。大社を遷して、めでたくつくれり。志太の某とかやしる所な
れば、秋の頃、聖海上人、その外も人あまたさそひて、「いざたまへ、出雲拜みに。か
いもちひめさせん」とて、具しもていきたるに、おのく拜みて、ゆよくしく信おこした
り。御前なる獅子狛犬、背きて後ざまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、「あなめ
でたや。この獅子のたちやういと珍し。深きゆるあらん」と涙ぐみて、「いかに殿ばら、殊

つとーみや
げ
やない筥
關根氏説に
は柳の木を
廣さ五分程
に三角に削
り編み合せ
たる筥にて
後世其蓋の
棧を高くし
て足とせる
をばヤナイ
バと稱す云
云、本文な
るは後者を
云へるが如

勝の事は御覽じとがめずや。無下なり」といへば、おのくあやしみて、「まことに他に
ことなりけり。都のつとにかたらん」などいふに、上人なほゆかしがりて、おとなし
く物知りぬべき顔したる神官をよびて、「この御社の獅子のたてられやう、定めてならひ
あることに侍らん。ちと承らばや」といはれければ、「そのことに候ふ。さがなき童ど
もの仕りける、奇怪に候ふことなり」とて、さし寄りてするなほして往にければ、上人
の感涙いたづらになりけり。
やない筥にすうるものは、縦さま横さま、物によるべきにや。「巻物な、どはたてさま
におきて、木のあはひより、紙捻を通してゆひつく。硯も縦さまにおきたる、筆ころば
すよし」と三條右大臣殿おほせられき。勘解由小路の家の能書の人々は、假にも縦さま
におかるよことなし、かならず横さまにするられ侍りき。
御隨身近友が自讃とて、七箇條かきとどめたることあり。みな馬藝させることなき事ど
もなり。そのためしをおもひて、自讃のこと七つあり。

く、舊説に
よれば筥蓋
共に同名な
るが如し

當代—今上
帝
坊—春宮
坊、皇太子
にておはす
る時

一、人あまたつれて花見ありきしに、最勝光院の邊にて、男の馬をはしらしむるを見
て、「今一度馬を馳するものならば、馬倒れて落つべし。しばし見給へ」とて立ちとま
りたるに、また馬を馳す。とどむる所にて、馬を引きたふして、乗れる人泥土の中
ころび入る。その詞のあやまらざることを、人みな感ず。
一、當代いまだ坊におはしましよころ、萬里小路殿御所なりしに、堀河大納言殿伺候し
たまひし御曹子へ、用ありて参りたりしに、論語の四五六の巻をくりひろげ給ひて、「た
だ今御所にて、紫の朱うばふ事を悪むといふ文を、御覽せられたき事ありて、御本を
御らんすれども、御覽じ出されぬなり。なほよくひき見よと仰事にて、求むるなり」と
仰せらるよに、「丸の巻のそくくの程に侍る」と申したりしかば、「あなうれし」とても
てまらせ給ひき。かほどの事は、兒どもも常のことなれど、昔の人は、いさよかの
事をもいみじく自讃したるなり。後鳥羽院の御歌に、袖と袂と一首の中にあしかりな
んやと、定家卿に尋ね仰せられたるに、

秋の野の云
云—古今集
在原棟梁

疑狀—任官
志願の申文
也、壽命院
抄に、くわ
んの音なれ
どもくわじ
やうと讀む
べき由或る
有職の人の
説也

三塔—東
塔、西塔、横
川をいふ
佐理、行成

秋の野の草のたもとか花すよきほに出でてまねく袖とみゆらん

とはべれば、何事かさふらふべきと申されたることも、時にあたりて本歌を覺悟す、道の冥加なり、高運なりなど、ことごとくしく記しおかれ侍るなり。九條相國伊通公の歎狀にも、ことなる事なき題目をも書きのせて、自讀せられたり。

一、常在光院の撞鐘の銘は、在兼卿の草なり。行房朝臣清書して、型にうつさせんとせしに、奉行の入道かの草をとり出でて見せ侍りしに、花の外に夕をおくれば聲百里に聞ゆといふ句あり。「陽唐の韻と見ゆるに、百里あやまりか」と申したりしを、「よくぞ見せ奉りける。おのれが高名なり」とて、筆者の許へいひやりたるに、「あやまり侍りけり。數行となほさるべし」と返事はへりき。數行もいかなるべきにか、もし數歩の意か、おほつかなし。

一、人あまた伴ひて、三塔巡禮の事侍りしに、横川の常行堂の中、龍華院と書けるふるき額あり。「佐理行成の間うたがひありて、いまだ決せずと申し傳へたり」と堂僧こ

—小野道風
を合せて三
蹟といふ

誰か—原本
これや
八災—憂、
苦、喜、樂、
尋、伺、出
息、入息

所化—弟
子、師を能
化といふ
加持香水—
正月八日よ
り十五日の
朝まで行は
る御法事
中の法式

とごとしく申し侍りしを、「行成ならば裏書あるべし。佐理ならば裏書あるべからず」といひたりしに、裏は塵つもあり、蟲の巢にていぶせけなるを、よくはき拭ひて、おのく見侍りしに、行成位署名年號さだかに見え侍りしかば、人みな興に入る。

一、那蘭陀寺にて、道眼ひじり談義せしに、八災といふことを忘れて、「誰かおほえ給ふ」といひしを、所化みなおほえざりしに、扇のうちより、これくによといひ出したれば、いみじく感じ侍りき。

一、賢助僧正に伴ひて、加持香水を見はべりしに、いまだ果てぬほどに、僧正かへりて侍りしに、陣の外まで僧都見えす。法師どもをかへして求めさするに、おなじさまなる大衆多くて、えもとめあはずといひて、いと久しくて出でたりしを、「あなわびし。それもとめておはせよ」といはれしに、かへり入りて、やがて具していでぬ。

一、二月十五日、月あかき夜、うちふけて千本の寺にまうでて、後より入りて、一人顔深くかくして聽聞し侍りしに、優なる女の、すがたにほひ人よりことなるが、わけ入

雲宿一、二十
八宿の一、
四方七宿の
第二、宿の
字シユクと
讀む説もあ
り

りて膝ひざにるかゝれば、にほひななどもうつるばかりなれば、便びんあしと思ひてすり退のきたるに、なほ居い寄りておなじさまなれば立ちぬ。その後、ある御所ごしょさまのふるき女房にようばうの、そゞろごと言はれしついでに、「無下むげに色なき人におはしけりと、見おとし奉ることなんありし。情なしと恨み奉る人なんある」とのたまひ出したるに、「更にこそ心えはべらね」と申して止みぬ。この事後のちに聞き侍りしは、かの聽聞ちやうもんの夜、御局みつぼねのうちより人の御覽ごらんじ知りて、さぶらふ女房にようばうをつくりたてて、出し給ひて、「便びんよくばことばななどかけんものぞ。そのありさま参りて申せ、興きようあらん」とてはかり給ひけるとぞ。
八月十五日九月廿三日は雲宿うんじやくなり。この宿清明しゆくせいめいなるゆゑに、月をもてあそぶに良夜りやうやとす。
しのぶの浦うらの蟹かにのみるめもところせく、くらぶの山ももる人しけからんに、わりなく通はん心のいろこそ、浅あからずあはれと思ふふしぐの、忘れがたきことも多からめ。親はらからゆるして、ひたぶるに迎へするたらん、いとまばゆかりぬべし。世にありわぶ

さそふ水云
云一、小町の
歌、わびぬ
れば身を浮
草の根をた
えて誘ふ水
あらばいな
むとぞ思ふ
しられず云
云一、新古今
西行、疎く
なる人を何
しに恨むら
ん知られず
しらぬ折も
ありしに
分けこしは
山一古今集
に、筑波山

る女の、似にけなき老法師らうぼうし、あやしの東人あづまびとなりとも、にぎはよしきにつきて、さそふ水あらばななどいふを、なか人なかといづかたも心にくきさまにいひなして、しられずしらぬ人を迎へもて来らんあいなさよ。何事なにことをかうち出づる言の葉はにせん。年月としつきのつらさをも、分けこしは山のななどもあひかたらはんこそ、つきせぬ言の葉はにてもあらめ。すべてよその人のとりまかなひたらん、うたて心づきなき事多かるべし。よき女ならんにつけても、品くだり、みにくく、年もたけなん男は、かくあやしき身のために、あたら身をいたづらになさんやほと、人も心劣こころたじりせられ、わが身はむかひ居たらんも、影かげはづかしくおほえなん、いとこそあいなからめ。梅の花かうばしき夜の臘月たはらつきにたよすみ、御垣みかきが原はらの露つゆ分けいでんありあけの空そらも、わが身みさまに忍しのばるべくもなからん人は、たゞ色このまざらんにはしかじ。
望月もちづきのまどかなる事は、しばらくも住すませず、やがて虧かけぬ、心とどめぬ人は、一夜ひとよの中に、さまでかはる様さまも見えぬにやあらん。病やまひのおもるも、住すまする隙ひまなくして、死期しごす

は山しげ山
しげけれど
思ひ入るに
はさはらざ
りけり

違順一文段
抄に、違は
わが心に違
ふことにて
苦也、順は

に近し。されどもいまだ病急ならず、死に赴かざる程は、常住平生の念にならひて、生
の中に多くの事を成じて後、しづかに道を修せんと思ふほどに、病をうけて死門にのぞ
む時、所願一事も成ぜず、いふかひなくて、年月の懈怠を悔いて、この度もしたちなほ
りて、命をまたくせば、夜を日につぎて、この事かの事怠らず成じてんと、願をおこす
らめど、やがて重りぬれば、われにもあらずとり亂してはてぬ。この類のみこそあらめ。
この事まづ人々急ぎ心におくべし。所願を成じてのち、いとまありて道にむかはんとせ
ば、所願つくべからず。如幻の生の中に何事をかなさん。すべて所願皆妄想なり、所願
心にきたらば、妄心迷亂すと知りて、一事をもなすべからず。直に萬事を放下して道に
向ふときは、さはりなく、所作なくて、心身ながくしづかなり。
とこしなへに違順につかはるとことは、偏に苦樂のためなり。樂といふは好み愛する事
なり。これを求むること止む時なし。樂欲するところ、一には名なり。名に二種あり。行
跡と才藝とのほまれなり。二には色欲、三には味なり。よろづのねがひ、この三には

わが心にし
たがふこと
にて樂也

しかず。これ顛倒の相よりおこりて、若干のわづらひあり。求めざらんにはしかじ。
八つになりし年、父に問ひていはく、「佛はいかなるものにか候ふらん」といふ。父がい
はく、「佛には人のなりたるなり」と。また問ふ、「人は何として佛にはなり候ふやらん」
と。父また、「佛のをしへによりてなるなり」とこたふ。また問ふ、「教へ候ひける佛を
ば、何がをしへ候ひける」と。また答ふ、「それもまた、さきの佛のをしへによりてなり
給ふなり」と。また問ふ、「その教へはじめ候ひける第一の佛は、いかなる佛にか候ひけ
る」といふとき、父「空よりやふりけん、土よりやわきけん」といひて笑ふ。「問ひつめ
られてえ答へずなり侍りつ」と諸人にかたりて興じき。

徒然草終

枕草紙索引

語句の配列順は總て歴史的假名遣に據る
本索引は本文中の題をも一行に取扱へり

ア	○愛憎	一に思はれずば	二四〇七	○鸚鵡	二四〇二	冬	二五〇二
		思ふと憎むと	七三三	○赤色「織物」を見よ	一七〇三	枕許の横笛	二二〇四
	親子	三三〇〇	○縣の井戸	二五〇二	目覺	三九〇二	三九〇二
	親族	三三〇八	○曉、曙、朝	二五〇二	物の音	三八〇四	三八〇四
	憎き人の來る	一七五〇	秋	二五〇二	別	一八五〇三	一八五〇三
	憎き人の追從	二八六〇二	朝寢	二五〇六	○赤紐	一〇五〇九	一〇五〇九
	憎き人の不幸	二四〇二	語り明したる	二四〇二	○秋	二〇五〇二	二〇五〇二
	人に愛せらるゝ	三三〇三	九月九日	二五〇三	曉	二〇五〇二	二〇五〇二
	人に憎まるゝ	三三〇七	雲	二五〇二	雨風	二〇四〇〇	二〇四〇〇
	宮仕所	三三〇八	咳	二五〇四	鶯	二五〇二	二五〇二
	伶俐ぶる人	二五八〇九	手おそく洗ふ人	一七三〇二	雨後の庭園	二五〇八	二五〇八
			疾く起き往ぬる	二五〇二	落葉	二〇五〇四	二〇五〇四
			ぬか	二五〇〇	重れ著	二〇五〇三	二〇五〇三
			春	二	唐衣	二八三〇二	二八三〇二

鳥	一ノ三	〇柏	二三ノ二〇	〇淺緑「染色、模様」を見よ	六七ノ五
雁	一ノ四	〇同	二六ノ三	〇あさむつ橋	六九ノ二
庭園	二五ノ七	〇同	二八ノ一	〇葦	七〇ノ六
野	一三八ノ八	〇柏の上襲	九ノ五	〇同	七〇ノ六
同	二四〇ノ二	〇朝風の里	六七ノ二〇	〇足	二八ノ六
野分	二〇五ノ七	〇槿	六九ノ八	〇足柄の關	一三七ノ二
蟲	一ノ五	〇淺黄の帷子	四〇ノ三	〇あしぎぬ	一五ノ一
夕暮	一ノ二	〇朝倉山	一五ノ二	〇展	一四〇ノ七
夕日	一ノ三	〇朝餉の間	一〇ノ二	〇足駄	二九三ノ七
〇明順朝臣	一七〇ノ七	〇朝座	四四ノ一	〇朝の原	一五ノ二〇
〇欠伸	二七四ノ三	〇淺茅	六九ノ七	〇悪しと人にいはるゝ人	二七五ノ二
〇胡床	二五九ノ二	歌の題	六六ノ七	〇足ぶくろ	一五ノ一
〇味爽	一九五ノ三	「草は」	六六ノ二〇	〇網代一春	二二ノ八
〇あげばり	二五〇ノ二	露	一三九ノ二〇	〇網代車	三六ノ二〇
〇柏	九ノ五	〇朝日	二五〇ノ二	〇飛鳥川	六二ノ二
〇同	一七〇ノ三	〇「あさむしきもの」	一五ノ二	〇飛鳥の市	一六ノ三
〇同	二七〇ノ九	〇淺間山	一五ノ六	〇飛鳥井	一九ノ一

〇あすはひの木	五三ノ七	捧げたる	二〇〇ノ五	小さき	一七五ノ三
〇「あそびは」	二〇九ノ三	中宮の賜ひし	一一ノ四	〇葵かつら	二二三ノ五
〇あそびわざ	二二〇ノ一	塵	二八ノ七	〇安倍野	二〇九ノ七
〇「あぢきなきもの」	七九ノ九	檜扇	二二ノ六	〇安倍の原	一五ノ二〇
〇「あつげなるもの」	一四九ノ九	骨	二二ノ四	〇阿彌陀の大呪	二〇八ノ六
〇「あてなるもの」	五五ノ五	三重がさね	一四ノ八	〇阿彌陀の峯	一五ノ八
〇あとびの火箸	一三三ノ七	蟲ばみたるかほぼり	二六七ノ一	〇尼	九ノ五
〇粟津野	二〇九ノ六	物のをりの扇	二六ノ六	〇同	九三ノ二
〇粟津原	一五ノ二〇	〇逢坂の里	六七ノ二〇	かづきしたる	二七六ノ二〇
〇「あはれなるもの」	一三八ノ九	〇逢坂の關	一三三ノ三	危険	二七ノ二
〇扇	一〇ノ八	〇同	一三六ノ二	栲繩	二七ノ一
五重	一四ノ七	〇櫻の木	五三ノ二	男女	二七六ノ二
枝扇	二九ノ二	〇葵	四九ノ二	〇雨風	二四ノ一〇
香染	一三三ノ二	髮	七〇ノ二	〇天降人	一〇三ノ一
海月の骨	三五ノ二	枯れたる	三五ノ九	〇天雲	三三ノ二
去年のかほぼり	二〇九ノ三	「草は」	六六ノ二	〇甘栗使	一〇一ノ三

○あまづら	五六ノ六	十二月晦日	二七ノ二	○綾「織物」服装を見よ	六八ノ四
○あまにそぎたる	一七五ノ七	正月の寺籠	一四〇ノ五	○あやふ草	
○あまの川	六七ノ二	節會	一五ノ三	○争事	
○あまびこの橋	六〇ノ五	前駆	一四ノ七	蛇の雌雄	三六ノ七
○雨		外出	一四ノ三	曲玉に緒通すこと	三六ノ二
雨と霧と	七三ノ三	同	二八五ノ八	丸木の本末	三六ノ一
雨の日に來る人	二五ノ七	橋	四八ノ一	○嵐「風」を見よ	
雨ふると日てると	七三ノ二	徒然	一六ノ三	○嵐山	一五ノ五
歩く人	二六八ノ一	寺詣	一四ノ三	○荒島	一七ノ二
市女笠	一七六ノ九	同	二八五ノ八	○あらぬ人	七三ノ四
音信	二六八ノ六	疾く降り止め	二六ノ五	○假	
片時降る	二六ノ二	夏の夜	一ノ二	板屋	三三ノ五
穢き板屋	一四六ノ六	ひぢかさ雨	一七ノ七	「歌の題は」	六九ノ七
九月九日	一四ノ一	佛名	一五ノ三	「ふるものは」	三六ノ三
心もとなきもの	二六ノ二	文を見る	二六八ノ三	○あらわに	三三ノ一
五月雨は咎めなし	一六ノ一	○あめうし	五八ノ一	○蟻	
七月	五七ノ七	○あめの陵	一六ノ三	ありとほし	三三ノ二
				蟻通	

蜜	三三ノ三	○青摺の唐衣	一〇五ノ七	小弓「小弓」を見よ	
水	五七ノ五	○青末渡「染色、模様」を見よ	六八ノ二	雙六「雙六」を見よ	二五ノ七
○有明	四九ノ五	○青鞭草	六九ノ七	重食	一七〇ノ二
七月	一五ノ一	○同	五二ノ二	謎々合	一七〇ノ二
笛	七三ノ一〇	○青鈍「染色、模様」を見よ	一七ノ五	耽る男	八〇ノ一
○「ありがたきもの」	三三ノ二	○青葉	二二ノ二	篇をつく	二〇ノ一
○蟻通	三三ノ二	○青淵	一七ノ五	鞠	
○蟻通の明神	三三ノ一	○白馬	二二ノ五	掩韻「掩韻」を見よ	三三ノ四
○有馬の湯	二八ノ二	白馬の節會	二二ノ五	○いかと崎	三三ノ三
○藍	七三ノ三	藏人式部丞	二六九ノ八	○殿籠	一七ノ五
○青色「染色、模様」を見よ	二〇ノ一〇	○青柳(襲の色目)	一四ノ二〇	○雷	七三ノ二
○青色すがた	一六ノ五	○青山吹(襲の色目)	一三九ノ四	○怒	七三ノ二
○青草	六八ノ四	○遊戯	三三ノ一	○班鳩	五四ノ五
○青朽葉(襲の色目)	二二ノ三	あそびわざ	三三ノ一	○生蠶	一七ノ七
○あなざし	三三ノ一	○碁「碁」を見よ	三三ノ一	○生田の森	二七ノ四
○青磁の龜	三三ノ三			○活田の社	三三ノ二
				○池は	四九ノ四

○いさめの里	六七〇	○一條院	一六〇六	細糸	五〇二
○石	二七〇三	歌にて人を謀り給ふ	一六〇六	とみの物縫ふ	一七〇三
○石山	二〇八〇三	翁丸	一三〇二	針に通す	一八二〇四
○伊勢の海	一六〇八	御笛ふかせ給ふ	三三〇九	村渡	一〇四〇六
○板敷	一七〇二〇	清少等の局に臨み給ふ	三三〇四	紫	一〇三〇九
○同	二八〇三	八幡臨時祭	一六〇八	○「いとほしげなきもの」	七八〇二
○いたどり	一七〇二〇	○一人一行粧	一〇三〇八	○否かへじ	一〇九〇三
○板屋	一七〇二〇	○一の舞	一六〇二二	○同(笙の笛)	一〇〇二
○覆盆子	三三〇五	○「市は」	一五〇二二	○印南野	二〇九〇六
鳥の齋の産飯くふ	三三〇八	○市女笠	一七六〇九	○いな淵	一六〇六
○覆盆子	三三〇七	○一切經	二五〇二〇	○稻荷	二六二〇
美しき兒の食ひたる	三三〇七	○五幡山	一五〇二	○いにすし	一七〇六
暗きに食ふ	七〇三	○一品の宮	三三〇二	○犬	一〇九
文字	一七〇二〇	○いつまで草	六六〇五	翁丸	一〇九
○著しからぬ人の聲	一七〇二二	○泉川	六六〇二	忍び來る人	二九〇五
○一條	一七〇二	○出雲筵	一七四〇六	長鳴	三二〇二
○一條殿「公信」を見よ	一七〇二	○絲		鷄を追ふ	二七九〇五

○犬島	二二〇八	四阿屋	二六三〇六	車	六六〇二
○犬ふせぎ	一四一〇五	新に叙爵したる人	一五二〇八	車宿	一九二〇九
○稻	一七〇二二	板敷「板敷」を見よ	一五二〇二	樽階	一四〇〇六
○同	二二〇〇六	いたづらなる	一九二〇二	木立焼けたる	一九〇〇三
○いはせの森	一三〇五	板屋	一九二〇九	小牛蒨	一七〇二
○石田の森	一三〇六	「家は」	一七〇一	小檜垣	一九二〇九
○岩田山	一五〇三	いみじうしつらひたる	二〇六〇三	小廂	二六四〇二
○山石榴	七〇四	大なる	二六〇二	障子「障子」を見よ	二七〇五
○盤余の池	四九〇五	格子「格子」を見よ	二七〇六	侍の曹司	二七〇五
○肝	二九〇六	高欄「高欄」を見よ	二七〇六	三尺の几帳	二七〇五
○「いひにくきもの」	二八七〇五	かきいた	二七〇六	蒨	一六〇一〇
○伊吹山	一五〇二	懸盤	二七〇五	寢殿	一三二〇二
○衣服「服装」を見よ	一五〇二	瓦葺	一八三〇八	住まぬ	一九三〇一
○家、建物「宮中」参照	一七〇七	からかさ	二七〇六	對「對」を見よ	一三二〇二
明順朝臣の家	二七〇七	唐廂「唐廂」を見よ	二七〇六	立部「立部」を見よ	二七〇六
新しき簪	二七〇五	北おもて	二七〇七	棚厨子	二七〇六
		厨	二七〇五	中盤	二七〇六

銚子	二七ノ六	南面	二二ノ五	○庵	三三ノ二〇
衝立障子	二七ノ五	御階	二四ノ六	○今内裏	三ノ六
月	一四〇ノ三	宮つかへ人	二七ノ五	○新参	三ノ八
局	一四ノ五	葎	一四〇ノ三	○同	一六八ノ二〇
長押	一八ノ三	馬道	三三ノ一	○今参	二五ノ二
西面	一三ノ六	物怪調する家	二九ノ三	○今様歌	二六〇ノ五
塗籠	二六ノ八	門	一五ノ二	○「いみじくきたなきもの」	二四ノ三
はしたしもの	二七ノ五	門前の出入	六ノ二	○飲食	
牛蒡	八四ノ二	母屋「母屋」を見よ		あはせ	二八八ノ二
ひさげ	二七ノ六	遣戸「遣戸」を見よ		御膳	一一ノ五
廂「廂」を見よ		四足門	六ノ九	おもの	二八八ノ二
ひちをりたる廂	二七ノ六	廊「廊」を見よ		御膳奏す	一八ノ一
檜皮屋	一〇四ノ九	渡殿「渡殿」を見よ		粥	二九〇ノ五
東面	二八ノ二	圓座	二七ノ六	汁物	二八八ノ二
火桶	二七ノ七	餌袋	二七ノ六	水飯	二八ノ三
丸屋	二六ノ六	女の獨棲	一九ノ三	工匠	二八八ノ一
みつ葉よつばの殿造	五二ノ五	○「家は」	一七ノ一	陪膳	一八ノ七

終の御飯	一八ノ一	ウ		○鶯のさへづり(音楽)	二〇ノ二
もちかゆ	三ノ二	○蕪萍	六ノ二〇	○うぐひすの陵	一六ノ三
湯漬	二六ノ八	○萍	一九ノ一	○細網縁の壘	一九〇ノ九
○妹背山	一五ノ六	○浮島	二〇七ノ九	○右近の陣	一八四ノ四
○「いやしげなるもの」	一七四ノ二	○浮田の森	一七〇ノ五	○右近の目	一八八ノ一〇
○彌高の峯	一五ノ八	○鶯		○牛	
○伊豫籬		歌	五五ノ五	あめうし	五八ノ一
筋ふとき	一七四ノ六	梅	五五ノ一	牛飼	三三ノ九
「にくきもの」	二九ノ七	宮中	五五ノ一〇	大なる	二六ノ三
紫革	一九ノ二	聲	五五ノ一〇	毛色	三三ノ三
○いりすみ	一七ノ八	文	五五ノ五	鞆の香	二六ノ一
○いりたふぬ	一三ノ七	郭公との比較	三三ノ四	○うしおに	一七七ノ八
○いりたち山	一四ノ三	杜鵑の聲に似せんと	二二ノ七	○牛飼	
○入日	三六ノ七	むしくひ	五五ノ三	牛にくみたる	三三ノ九
○色「色彩」染色、模様を見よ		夜	五五ノ二	きたなげなる	三三ノ一
○色ふし	一〇八ノ二	夜なかぬ	三三ノ四	無作法なる	二八九ノ四
				容貌風采	三三ノ二

○牛はさめ	一七ノ六	○歌―「和歌」を見よ	二九ノ九
○うしろめたさに	二四ノ九	○うたじめの橋	三〇ノ五
○薄色―「染色、模様」を見よ	二五ノ四	○假寐の橋	三〇ノ八
○薄色の裳	二五ノ四	○假寐の森	一三ノ五
○薄墨の袈裟衣	二五ノ三	○宇多法師(横笛)	二〇ノ五
○薄紅梅	一九ノ七	○「歌は」	二六ノ四
○薄鈍―「染色、模様」を見よ	一八ノ三	○歌よみがまし	一五ノ三
○薄二藍	三六ノ三	○内	三三ノ二
○羅	二八ノ五	○袈	二〇ノ九
赤色の羅の御衣	二九ノ二	○同	二八ノ一
袈裟	二九ノ二	○袈姿	八五ノ二
小袈	二五ノ二	○うちぎぬ	四ノ二
夏	二八ノ二	○打出の濱	二七ノ二
薄様	八〇ノ二	○「うちとくまじきもの」	二七ノ二
同	一〇四ノ六	○内大臣殿―「伊周」を見よ	三五ノ一
同	一五ノ二	○うちの御使	三五ノ一
同	二〇ノ一	○團扇	一〇ノ七
		○團扇	二九ノ九
		○うちばし	二三ノ五
		○うちふし(人名)	一八ノ五
		○搦目	八五ノ二
		○打目	二二ノ六
		○うつ木垣根	二四ノ九
		○うつき森	二七ノ四
		○「うつくしきもの」	一七ノ三
		○うつすべき人	二九ノ三
		○卵榎	二六ノ八
		○同	九六ノ二
		○卵榎の木	一七ノ四
		○うつば(物語)	二〇ノ二
		○太秦詣	三三ノ六
		○卵杖	九六ノ二
		○齊院より獻じたる	九六ノ二
		祝言	七八ノ七

法師	一七ノ八	○荊棘	一七ノ八
○于定國の事	七ノ八	○産屋	三ノ八
○内舎人	二五ノ一	○同	一〇三ノ六
○有度濱(語りもの)	一六ノ二	○産養	二六ノ七
○うなる(こが原)	二五ノ二	○うへ―「一條院」を見よ	一三ノ六
○采女	二五ノ二	○うへ―「道隆の室」を見よ	一三ノ六
葡萄酒の織物の指貫	二五ノ三	○うへ木の森	三ノ二
猿澤の池	四九ノ二	○うへのきぬ	五ノ二
服装	二五ノ二	○同―鞆負佐	五八ノ五
馬に乗せて引出づ	二五ノ二	○うへのきぬの袴	一四ノ二
○卵花	二八ノ九	○上の局	一七ノ五
車に葺き指す	二八ノ九	○同	二〇ノ七
暖が垣根	四七ノ二	○上の女房	一八ノ三
杜鵑	四七ノ九	○うへの判官	五八ノ七
○卵花重	二八ノ二	○馬―「馬」を見よ	二五ノ八
○乳母―「乳母」を見よ	二八ノ二	○海	二五ノ八
○上衣	二八ノ二	航海する人	二五ノ八
		早朝	二七ノ八
		船夫	二五ノ二
		泊り	二七ノ六
		波荒き	二七ノ六
		のどかなる	二七ノ三
		船路	二七ノ二
		○「海は」	一六ノ七
		○梅(襲の色目)	九七ノ三
		○梅	五五ノ一
		鶯	八五ノ四
		御前の梅	四七ノ八
		紅梅	一三ノ六
		花の皆散りたる	五八ノ七
		雪	八四ノ二
		○梅壺	二〇ノ二
		○梅壺の少將(物語)	二〇ノ二
		○「浦は」	二〇ノ二

○羨しき人	一八ノ三	○枝扇	二四ノ七	○卵籠	九六ノ一〇
○「うらやましきもの」	一七九ノ五	○葡萄染「織物」服装「染色、模様」	二四ノ七	○餅俵	一五ノ二
○雲林院	五九ノ九	○垣下 <small>えんが</small> を見よ	二四ノ三	○押小路のほどぞ	一八七ノ二
○うるさかり	二四ノ三	○同	二四ノ三	○「おそろしきもの」	一七三ノ五
○「うれしきもの」	二九ノ三	○同	二八ノ二〇	○落窪少將	二六ノ五
○右衛門尉	二七ノ五	○同	六ノ三	○音無川	六六ノ三
○右衛門佐	一五ノ二	○同	一三ノ一	○音無の瀧	六六ノ八
エ					
○えせもの	一八ノ七	○翁	二七ノ七	○音羽山	一五ノ四
子産みたる折	一八ノ七	○翁丸(犬)	二〇ノ九	○鬼	五九ノ九
従者かんがふる	一八ノ七	○贈物	二〇ノ九	○鬼童	一六ノ三
見ならひするもの	二七ノ二	○おいらか	一六八ノ五	○鬼屋の鬼	七六ノ二
○「えせもの」の所うるなりの事	二七ノ五	○大海	二八ノ四	○生 <small>お</small> の浦	一七七ノ八
オ					
○御産屋「産屋」を見よ	二七ノ六	○否かへじ(笙の笛)	二〇ノ二	○おふきの市	二〇八ノ二
○音楽、樂器	二七ノ六	○宇多法師(横笛)	二〇ノ五	○大荒木の森	一六ノ二
○「おほきにてよきもの」	二六ノ一〇	○宮中の樂器の名	二〇ノ三	○御佛名「佛名」を見よ	一三ノ四
○大口	二五ノ三	○琴	二四ノ二		
○大藏卿	三三ノ三	○行啓を迎ふる	二四ノ八		
○おほさき <small>さき</small>	七ノ一	○釘打(横笛)	二〇ノ五		
○「おぼつかなきもの」	七ノ八	○朽目(和琴)	二〇ノ四		
○おほとなぶら	二〇ノ八	○支象(琵琶)	二〇ノ三		
○同	二〇ノ三	○小水龍(横笛)	二〇ノ五		
○おほと <small>の</small> 油	一九ノ四	○高麗唐土の樂	二五ノ八		
○大殿 <small>ご</small> もり	九六ノ六	○箏	二〇ノ九		
○おほどれたる	七〇ノ三	○笙の笛	二二ノ六		
○大原野	二六ノ一〇	○鹽竈(和琴)	二〇ノ四		
○大比禮(舞曲)	一六ノ二	○「しらべは」	二〇ノ〇		
○大比禮山	一五ノ三	○水龍(横笛)	二〇ノ四		
○御賀茂詣	二二ノ三				
○大井川	六六ノ二				
○御まへの池	四九ノ二				

○おほかみ	一七ノ六	○御産屋「産屋」を見よ	二七ノ六	調 <small>てう</small>	二〇ノ一〇
○「おほきにてよきもの」	二六ノ一〇	○否かへじ(笙の笛)	二〇ノ二	殿上の御遊び	七六ノ三
○大口	二五ノ三	○宇多法師(横笛)	二〇ノ五	葉 <small>は</small> 二(横笛)	二〇ノ五
○大藏卿	三三ノ三	○宮中の樂器の名	二〇ノ三	算樂	二二ノ八
○おほさき <small>さき</small>	七ノ一	○琴	二四ノ二	琵琶「琵琶」を見よ	
○「おぼつかなきもの」	七ノ八	○行啓を迎ふる	二四ノ八	笛「笛」を見よ	
○おほとなぶら	二〇ノ八	○釘打(横笛)	二〇ノ五	二貫(和琴)	二〇ノ四
○同	二〇ノ三	○朽目(和琴)	二〇ノ四	牧馬(琵琶)	二〇ノ四
○おほと <small>の</small> 油	一九ノ四	○支象(琵琶)	二〇ノ三	無名(琵琶)	二〇ノ四
○大殿 <small>ご</small> もり	九六ノ六	○小水龍(横笛)	二〇ノ五	同	二〇ノ四
○おほどれたる	七〇ノ三	○高麗唐土の樂	二五ノ八	夜	二〇ノ一
○大原野	二六ノ一〇	○箏	二〇ノ九	和琴	二〇ノ四
○大比禮(舞曲)	一六ノ二	○笙の笛	二二ノ六	渭橋(琵琶)	二〇ノ四
○大比禮山	一五ノ三	○鹽竈(和琴)	二〇ノ四	井手(琵琶)	二〇ノ四
○御賀茂詣	二二ノ三	○「しらべは」	二〇ノ〇	○御菓物「菓物」を見よ	二〇ノ四
○大井川	六六ノ二	○水龍(横笛)	二〇ノ四	○陰陽師	二〇ノ三
○御まへの池	四九ノ二			主從	二〇ノ三

紙冠	二九三ノ八	愛情	三三六ノ二〇	よき子もちたる	一八〇ノ六
祓	三六ノ四	海に沈めらる	二七〇ノ五	小野殿の母	二七〇ノ二〇
○御乳母の大輔	二二ノ四	えせ親	二七〇ノ五	女親の老いたる	二二三ノ二
○澤潟	六六ノ三	孝子	三六ノ二〇	織物	
○おもてぶせ	二四八ノ三	かけて誓ふ	二八ノ二〇	赤色	二五〇ノ三
○御物忌「物忌」を見よ		繼母子	二八ノ二五	同	二五八ノ五
○おもの	二八八ノ二	子多き	二八ノ二六	綾	一七〇ノ九
○御膳	二一ノ五	子の好色の意見	二七〇ノ七	同	五〇ノ九
○御膳奏す	一八ノ一	なげく人	七六ノ一	同	二〇ノ九
○思ふ人「戀愛」参照		業平の母	二七八ノ二	同	一一ノ九
いたく酔ひたる	二四ノ五	別居	一七六ノ九	色	二五八ノ一
人にほめらるゝ	二九ノ二	蓑蟲	二九ノ九	葡萄酒	二〇三ノ八
病中の慰め	二五ノ六	宮仕人	一九ノ八	同	一九〇ノ二
二人持ちたる男	一七六ノ三	物恐しき折	二五ノ七	同	二五八ノ八
物書くたのぞく	三三ノ九	養子	七〇ノ三	大海	二八三ノ四
○親、親子		山籠の法師の親	七二ノ九	堅紋	二四〇ノ七
愛子、藏人に任ず	二〇三ノ九	病	一七四ノ九	かとり	二五三ノ四

唐錦	二〇ノ八	○蚊	二九ノ二	吳竹の事	一五九ノ二
朽葉	二五ノ二	ほそ聲になのる	二九ノ二	清少と問答	六〇ノ二
紅梅	二八ノ三	暈の落つる	三三ノ二	清少に餅飲を贈る	一五二ノ二
同	一七三ノ二	○搔練襲	二六ノ三	殿上の御遊び	七九ノ一
同	二五八ノ九	○香	四一ノ七	女の評	六〇ノ三
濃き綾	二五八ノ八	○航海	二七五ノ八	○香染「染色」「服装」を見よ	
しびら	二八三ノ四	○格子	一九四ノ二	○強盜	一七七ノ七
生絹	五〇ノ八	○同	一九七ノ〇	○かうたての森	一七〇ノ六
染色	二八三ノ八	○同	二〇五ノ二	○定考	一五三ノ九
萌黄の固紋	二八ノ三	○同	二〇ノ三	○寄居蟲	二八〇ノ五
立紋	二四ノ七	○格子のつぼ	二五ノ九	○かうぶりえて	一九三ノ八
○「織物は」	二八三ノ七	○庚申	二三ノ四	○高野	二〇八ノ三
		○好色「戀愛」参照	二八ノ二	○高欄	一七ノ六
		獨住する	二八ノ二	○同	一〇四ノ四
		老人	一九ノ三	○同	一〇四ノ二
		○行成	二五ノ二	○同	一四〇ノ九
		逢坂の關	二五ノ二	○同	二四ノ六

○鏡	山鳥	心見ゆる	鏡の池	かきつぎ	かきいた	書立	杜若	「かきまさりするもの」	○楽器「音楽」を見よ	○學者	○神樂	還立の	楠	人長	同	○神樂歌
五四ノ三	三三ノ七	四九ノ二	八七ノ九	二七ノ六	二五ノ三	一〇三ノ九	一三六ノ七	一〇三ノ二	一五ノ八	五三ノ二	七八ノ七	一六五ノ三	二六〇ノ五	二六〇ノ五	二六〇ノ五	二六〇ノ五
○かくれの淵	○かくれ簀	○鏝	○懸子	○かけはし	○懸盤	○同	○同	○笠置	○鶴の橋	○かさし	○笠取山	○汗衫	○同	○同	○同	○同
一六ノ六	一三〇ノ二	八ノ三	三三ノ九	六七ノ六	四一ノ二	一八ノ三	二七ノ五	二〇八ノ三	六七ノ六	二ノ四	三三ノ八	一五ノ二	五〇ノ二	五六ノ六	二四ノ四	二四ノ四
○汗衫	○同	○同	○同	○「汗衫は」	○鎧太刀	○かしこ淵	○柏木	○葉守神	○兵衛佐	○柏原の陵	○春日	○春日野	○春日詣	○春日祭	○霞	○霞
一五ノ七	一五ノ八	一五ノ二〇	二八三ノ六	二八三ノ五	一〇一ノ八	一六ノ四	五三ノ二	五三ノ二	五三ノ二	一六ノ三	二六三ノ〇	二〇九ノ七	一〇三ノ八	一七八ノ八	二〇ノ二	二〇ノ二

○風	秋の暁	秋の夕	荒くはあらぬ	通ひ来る人	こがらし	七月	野分	暴風	春風の問答	船	女	○「風は」	○鹿背山	○家族談話	○方人	○同
二〇五ノ二	一ノ五	一四〇ノ四	二六七ノ六	二〇四ノ〇	五七ノ七	二五ノ七	一七七ノ五	二四七ノ二	一九二ノ五	二〇五ノ二	二〇四ノ九	一四〇ノ二	二七四ノ五	一七〇ノ八	一八九ノ二	一八九ノ二
○かたさり山	○辱く	○方達	饗應	齊信方達にゆく	夜深く歸る	○かたさめ山	○交野	○交野少將	○交野の少將(物語)	○酢漿	○かたばみ(紋)	○「かたばらいたきもの」	○かたへ	○堅紋	○かたらひの岡	○乞見
一四ノ二	二四ノ六	三三ノ九	八四ノ三	二七〇ノ二	一五ノ六	二〇九ノ六	二六七ノ四	二九ノ二	六八ノ四	二八三ノ二〇	二四ノ四	二九ノ八	二四ノ七	三四ノ九	一四六ノ五	一四六ノ五
○片岡	○加持	○同	○勝間田の池	○桂	○鬘	○鬘短き人	○七尺の鬘	○葛城神	○同	○葛城山	○門「門」を見よ	○かとり	○鏡	○同	○雁緋	○兼證が事
二四ノ九	二八ノ二	二九ノ四	四九ノ四	五二ノ〇	一四八ノ五	一九〇ノ二	一八六ノ二	一九七ノ九	一五ノ五	二五三ノ四	五六ノ六	一七三ノ九	七〇ノ二	二四七ノ二	二四七ノ二	二四七ノ二

○川一月下	三六ノ八	○選立の御神樂	一六ノ八	葉守の神	五ノ二
○かはぎぬ	一七ノ二	○蛙	一九ノ二	平野	二六ノ二
○川霧	三九ノ六	○かへる山	一五ノ六	松尾	二六ノ六
○かはぐちの海	一六ノ八	○顔「容貌、風采」を見よ	七ノ一	水分神	二六ノ二
○川竹	三九ノ二	○鷹來紅	七ノ一	「社は」	三四ノ二
○川千鳥	五ノ八	○雷に豆	一五ノ二	八幡	二六ノ九
○「川は」	六ノ二	○雷「雷」を見よ	一五ノ二	あしき人	七ノ二
○「川は」	六ノ二	○神「神社」参照	三五ノ一	葵	七ノ二
○蠟燭	三五ノ二	蠟道の明神	三五ノ一	大やかなる童	二九ノ一
○去年の	三五ノ二	稻荷	二六ノ二	頭あらひてほす	一七ノ六
○ふるき	二〇ノ三	大原野	二六ノ二	頭の毛	二四ノ四
○むしばみたる	二七ノ一	春日	二六ノ二	髪短き人	一四ノ五
○土器	一五ノ二	葛城の神「葛城の神」を見よ	二六ノ八	唐衣の中なる	二五ノ三
○同	一七ノ九	「神は」	二六ノ八	清げなる童	二九ノ一
○貝	一四ノ二	賀茂	二六ノ二	黒き髪 <small>の筋太き</small>	一七ノ三
○飯匙	二〇ノ二	任事の明神	三四ノ二	肥えたる人の髪多き	一四ノ二
○かひるき	七ノ二	職の神	二〇ノ六		
○楓	五ノ六				

硯	二七ノ二	白う清き	二四ノ四	雪月花時最憶君(朗詠)	一九ノ四
そぎすゑ	二〇ノ四	檀紙「檀紙」を見よ	二〇ノ九	大度嶺之梅早落(朗詠)	一三ノ六
立ちあがる	二二ノ二	紫	二九ノ八	月與秋期而身何去(朗詠)	一五ノ八
燈火	一九ノ五	○紙冠	二七ノ五	露應別淚(菅家文章)	一八ノ二
長く麗しき人	一八ノ六	○神南備の森	二七ノ五	西去都門(白樂天)	八七ノ四
女房	二五ノ七	○「神は」	二六ノ八	花心開(白樂天)	二四ノ二
○紙		○函谷關	一五ノ四	琵琶聲停欲語遲(白樂天)	七九ノ二
赤き蒲様	一五ノ二	○漢詩	三九ノ三	雪滿群山(朗詠)	一九ノ三
淺緑	二七ノ二	朝爲行雲(文選)	二九ノ三	蘭省花時(白樂天)	八〇ノ二
淺緑なる蒲様	二〇ノ一	遊子猶行殘月(朗詠)	二七ノ三	梨花一枝帶春雨(白樂天)	四八ノ九
青き蒲様	八〇ノ二	一聲秋(朗詠)	七ノ六	凜々氷鋪(朗詠)	二七ノ三
紙屋紙	一六ノ三	香爐峰雪(白樂天)	二七ノ九	廬山雨夜(白樂天)	八ノ二
清き紙	二四ノ四	瓦有松(白樂天)	八七ノ五	○漢書の御屏風	二六ノ三
胡桃色といふ色紙	一六ノ三	九品蓮臺之間(朗詠)	三四ノ二	○上達部	三ノ三
紅梅	二五ノ九	稱此君(朗詠)	一五ノ七	○同	一五ノ六
色紙	二四ノ四	聲驚明王之眠(朗詠)	二七ノ七	○「上達部は」	三ノ一
同	二四ノ五	蕭會稽之過古廟(朗詠)	一七ノ七	○雷鳴の陣	三ノ一

おそろし	二六九ノ二〇	赤色櫻の五重の唐衣	二五八ノ一
舎人の言語	三三〇ノ三	青木漉	二九ノ二
○閑院の太政大臣の女御	一八九ノ五	織物の唐衣	二九ノ九
○鴨	五四ノ九	著垂れたる	一九八ノ八
○賀茂	二六ノ二〇	五月節句	五〇ノ二
○同	三三ノ二〇	櫻の唐衣	一七ノ二〇
○賀茂臨時祭	一六五ノ七	同	二五ノ四
○掃殿寮	二四七ノ五	染色	二四ノ七
○掃部司	一六四ノ一	同	二八三ノ二
○同	一六四ノ八	名	一五ノ二〇
○粥	二九〇ノ五	○「唐衣は」	二八三ノ一
○粥の木	三三ノ二	○唐崎	二六三ノ四
○唐葵	七ノ三	○烏	
○唐綾	一九九ノ五	秋の夕	一ノ三
○唐鏡	三五ノ三	集り鳴く	二九ノ四
○からかさ	二七ノ六	燗の産飯くふ	二九ノ八
○唐衣		見いれ聞きいれする人なし	五ノ七
		夜の烏	七ノ四
		○枳殼	一七ノ八
		○唐錦	一〇ノ八
		○唐廂	二九ノ七
		○同	二五ノ二〇
		○から給	三三ノ七
		○唐繪の革の帯	二〇ノ一
		○雁	一ノ四
		○同	五四ノ八
		○狩衣	
		青き	二六〇ノ九
		青葉	二六〇ノ九
		香染	四ノ一
		香染のうすき	二六〇ノ九
		領	一七ノ二
		さくら	二六〇ノ九
		白きふくさの赤色	二六〇ノ九

ふぢ	二六〇ノ二〇	「木は」	五ノ九
松の葉いろしたる	二六〇ノ九	野分の朝	二五ノ八
前を下に捲り入る	二八ノ八	葉	二五ノ二
亂れ著たる	二四ノ二	○舅姑「舅姑」を見よ	
やなぎ	二六〇ノ九	○宮中	
童	一七二ノ一	朝餉の間	一〇ノ二
○「狩衣は」	二六〇ノ八	絳	五四ノ二〇
○かりのこ	五ノ六	右近の陣	一八四ノ四
○かりの子	一七六ノ五	上の局「上の局」を見よ	
○狩袴	九ノ五	梅壺	八四ノ二
○刈萱	六九ノ二	御産屋	一〇三ノ六
○家屋「家、建物」を見よ		御物忌	一八八ノ二〇
		漢書の御屏風	二六九ノ二
		雷鳴の陣「雷鳴の陣」を見よ	
		掃部司	一六四ノ一
		后宮	五〇ノ六
		北の陣「北の陣」を見よ	
○木			
風に倒れたる	一四八ノ五		
「木の花は」	四七ノ七		
		宜陽殿	一〇ノ五
		藏人所	一五ノ二
		吳竹壺	一六五ノ四
		黒戸「黒戸」を見よ	
		管絃の遊	一〇ノ七
		官のつかさ	一八三ノ七
		五月節句	五ノ四
		五節	一七ノ二
		坤元録の御屏風	二六九ノ二
		左衛門の陣「左衛門の陣」を見よ	
		職の御曹司「職の御曹司」を見よ	
		仁壽殿	一〇七ノ七
		深夜の御笛	二五ノ二
		深夜男ども召す	二五ノ二
		正月	二ノ九

正月十五日	三ノ二	登華殿「登華殿」を見よ	一六ノ八	九月節句	五〇ノ八
宿泊	二九ノ二	主殿司	一八ノ二	露	一五ノ九
承香殿	一六ノ九	中の戸	五〇ノ七	とくろくうつろひたる	六九ノ二〇
清涼殿「清涼殿」を見よ	二〇八ノ一	縫殿	一七ノ三	〇きくだの森	一三ノ四
清涼殿のそり橋	二〇八ノ一	廂「廂」を見よ	一五〇ノ二〇	〇戲言諧謔	二四ノ七
宣耀殿	二九ノ六	畫御座	五八ノ九	下衆	三〇ノ九
臺盤所「臺盤所」を見よ	四ノ二	藤壺	一八五ノ八	猿樂こと	一三ノ九
陣「陣」を見よ	二七〇ノ一	廊「廊」を見よ	二七四ノ三	せんぞくれう	一三ノ九
除目	二七〇ノ一	廊に忍ぶ	二九ノ五	〇后	一〇三ノ二
貞觀殿	二七〇ノ一	廊の一の口	二八〇ノ六	御むすめの女御	一〇三ノ六
月次の御屏風	二七〇ノ一	御厨子所	二九ノ五	畫の行啓	一〇三ノ六
作物所	二七〇ノ一	宮仕人の批評	二九ノ五	立后の作法	一〇三ノ六
局	二七〇ノ一	御湯殿	二九ノ五	〇后腹の姫宮	一〇三ノ二
局に立ちとまる人々	二七〇ノ一	厩寮	二九ノ五	〇后町の井	一〇三ノ二
殿上	二七〇ノ一	〇桔梗	二九ノ五	〇氣質短氣	一〇三ノ二
殿上の臺盤	二七〇ノ一	〇菊	二九ノ五	〇季節	一〇三ノ二
殿上のなだいめん	二七〇ノ一	九月九日	二九ノ五	五節句	一〇三ノ二

頃は	一ノ九	三尺の几帳	七五ノ二〇	〇黄蘗	七三ノ三
四季の評	一ノ一	同	一九ノ三	〇吉備の中山	一五ノ五
過ぎに過ぐるもの	二二ノ六	同	二七ノ五	〇君達	二四ノ一
〇木曾路の橋	六七ノ六	同	二五ノ七	假粧	二四ノ一
〇祈禱	二二ノ九	同	二九ノ五	彈正にておぼする	二四ノ四
効験	二二ノ九	四尺の几帳	二九ノ一	〇公達	五九ノ二
態度	二二ノ九	袖几帳	八三ノ二	隨身	三三ノ五
〇「きたなげなるもの」	一七三ノ二〇	夏の几帳	二〇四ノ五	直衣姿	一〇四ノ三
〇北の陣	一四ノ六	ひきたつ	二二ノ一	なり上りたる	二〇三ノ九
〇同	二二ノ一	紐	二二ノ一	祭のかへき	二四ノ三
〇同	二二ノ三	ほころびより見入る	一九八ノ二	小忌の公達	一〇五ノ三
〇几帳	一九九ノ二〇	〇貴人	一八〇ノ七	〇「公達は」	三三ノ四
後なるは誰ぞ	一九九ノ二〇	〇衣の名	一四ノ九	〇公任	三三ノ一
押しやる	一八ノ三	〇木のほし	六ノ二	〇きんの御琴	二〇ノ二〇
帷のゆるゆる	一九〇ノ二〇	〇「木の花は」	四七ノ七	〇公信(一條殿)	二二ノ三
几帳の經子	七五ノ四	〇季の御讀經	二六九ノ九	〇琴の袋	一四ノ一〇
朽木形	一〇四ノ二〇	〇「木は」	五ノ九		

入日	三三八七	大夫	一九二九	○藏人辨	二五九四
黒	三三九二	忠隆	一〇ノ三	○競馬	一七四九
白	三三九二	殿上のなだいめん	三三ノ三	○鞍馬の九曲	一九一七
月	三三九三	頭	一三ノ七	○鞍馬詣	八四ノ三
春の曙	一ノ一	任官の際競争ありたる	三三ノ九	○位山	一五ノ五
紫	三三九二	藤原時柄	二六ノ四	○栗のいが	一七三六
○蜘蛛の巣	一五ノ二〇	御琴もたりし人	三三ノ五	○厨	二七ノ五
○「雲は」	三三九一	昔の藏人	一〇ノ二〇	○厨女	六六ノ五
○藏人	一〇五ノ一	同	二七ノ二〇	○「くるしげなるもの」	一七八ノ二
あやめの藏人	一〇ノ二〇	夜行	五八ノ二	○くるべきの森	一三ノ五
青色すがた	二〇ノ二〇	節折	一七八ノ六	○くるべきもの	一八ノ一
犬を調す	二一ノ九	六位藏人	五八ノ七	○車「乗物」参照	
權守	一九三九	同	一〇ノ八	網代車	三六ノ一〇
五位	三三ノ三	同	一九二ノ八	合ひ乗	二七三ノ一
同	五ノ三	○藏人少納言	三三ノ五	葵かつら	三三ノ五
同	三三ノ一	○藏人兵衛佐	三三ノ五	尼の車	二五三ノ二
同	三三ノ一	○藏人辨	三三ノ五	書立に隨ひて乗す	二五三ノ二

唐の車	二五三ノ二	軾	二七三ノ一〇	○胡桃	一七三ノ一〇
借りて乗る	二八九ノ三	とみのを	三三ノ三	○胡桃色	一六〇ノ二
きしめく	三〇ノ一	夏	一四ノ四	○吳竹	一五九ノ一
行事	三五ノ二〇	納涼	二五ノ二〇	○紅「染色」「服装」を見よ	二八六ノ二
行列	三五ノ二〇	業遠朝臣の誠	二八九ノ七	○樽階	七三ノ二
元三の音	二三八ノ四	花の粧飾	二八ノ九	○黒白	七九ノ八
笙の笛	二二ノ六	同	二四ノ九	○鐵	一七三ノ五
下簾	二五三ノ二	張筵	一四六ノ五	○黒戸	七九ノ八
同	二五三ノ三	人給(副車)	三九ノ六	○同	一三三ノ七
同	二九三ノ六	檳榔毛の車	六ノ二	○同	一三三ノ一〇
榻	六六ノ三	同	六六ノ二	○同	一五〇ノ五
正月八日	三ノ一	深き所に陥りたる	二八九ノ八	○懐巻	三五ノ九
車中に入る垣の枝	二五ノ七	船に居う	二七ノ八	○繪畫	
車輪に挫かれたる蓬	二五ノ九	待つ間	一八三ノ七	扇の繪	一一ノ四
後口	二五ノ三	筵張	一七五ノ五	荒海障子	一七ノ四
松明の煙	二六ノ二	物見の裝飾	二八ノ六	大笠	三三〇ノ二
願賀	一五ノ二	女車に續く男車	三三ノ一	「かきまきりするもの」	一三八ノ七

唐繪	一八〇ノ九	采女―「采女」を見よ	五八ノ七	權中將	一四ノ七
屢々見れば目立たず	三三八ノ三	うへの判官	二七ノ五	權の守	一九三ノ九
中宮清少に見せ給ふ	一七九ノ三	右衛門の尉	二七ノ五	五位の藏人―「藏人」を見よ	
地獄畫の屏風	七六ノ〇	右衛門佐	一三ノ二	左大辨	一五三ノ七
布屏風	一七九ノ三	上達部―「上達部」を見よ	二〇四ノ一	雜色―「雜色」を見よ	
屏風の繪	三三八ノ三	上達部になる	二〇四ノ一	式部丞	二四五ノ四
火桶の火に見えたる	二〇七ノ三	掃殿寮	二四七ノ五	式部丞の爵	一七四ノ三
「繪にかきて劣るもの」	一三八ノ五	公達	三三ノ五	式部大夫	二八ノ九
女繪	三六ノ一	藏人―「藏人」を見よ	三三ノ五	上官―「上官」を見よ	
○外出		藏人―「藏人」を見よ	三三ノ二	昇進	二〇三ノ一〇
雨	一四九ノ二	藏人おりたる人	三三ノ二	同	三三ノ二
同	二八五ノ八	藏人式部丞	二六九ノ八	受領―「受領」を見よ	
○皇后宮の權大夫	一七〇ノ〇	藏人少納言	三三ノ五	駿河前司	二八ノ九
○過去	三五ノ八	藏人兵衛佐	三三ノ五	大饗の甘栗使	一〇二ノ三
○官人、官職		藏人の辨	二五九ノ四	大將	二六九ノ八
右近の目	一八八ノ〇	皇后宮の權大夫	一七〇ノ〇	大貳	二〇四ノ一
内舍人	二五七ノ一	關白	一五〇ノ五	臺盤所の雜仕	二四二ノ五
		近衛づかさ	一四ノ八		

大夫	一九三ノ七	主殿の女官	二四七ノ五	○願文	一〇三ノ二
瀧口―「瀧口」を見よ		内侍	一三ノ二	○關白殿―「道隆」を見よ	
彈正	二八四ノ四	内膳	二〇三ノ七	○筭	二〇七ノ四
中少將	二二三ノ二	姫大夫―「姫大夫」を見よ		○履子	五ノ六
地下―「地下」を見よ		別當―「別當」を見よ		○同	一四ノ九
除目―「除目」を見よ		御厨人―「御厨人」を見よ		○同	二七ノ九
作物所の別當	二二七ノ二	御綱助	二二二ノ一	○藝能	
殿上	二五三ノ三	宮司	二四九ノ八	歌よみ	一八〇ノ七
殿上人―「殿上人」を見よ		木工允	三三ノ三	能書	一八〇ノ七
出居の少將	一四九ノ〇	宿りの司の權の守	一九三ノ五	○計略	
頭中將	七九ノ六	六位藏人―「藏人」を見よ		人な謀り得たる	二四〇ノ八
頭辨―「頭辨」を見よ		院司	二五九ノ六	男を謀り得たる	二四〇ノ九
時づかさ	一八三ノ二	院の別當	一九九ノ二	○教育―女子	二〇ノ九
所衆―「所衆」を見よ		衛士	一九〇ノ〇	○教化	一四三ノ一
刀自	一六三ノ四	衛府―「衛府」を見よ			
主殿司―「主殿司」を見よ		○卷	一六〇ノ二		
主殿亮	一三九ノ五	○官	一五三ノ九		

○けぎょう	一三〇九	○懸想人	一六〇二	○顯證	四二〇〇
○袈裟	一七六〇	○懸想文	一〇八一	○同	一九七五
赤	二五三三	○下種、下衆	七三三	○同	二五三二
薄墨	一四二〇	家	二六三	○同	二五三〇
紫	二六〇六	同	五三三	○同(菩提寺)	四〇七
○化粧、假粧	二二〇八	歌うたふ	三三〇二	○同(善提寺)	四〇二
鏡	二四〇一	諧謔	二七六四	○削氷	五〇六
君達	二四〇一	紅の袴	一四七七	○毛拔	七三二
心ときめきす	二五〇五	櫻を引倒す	五八四	○夾算	二二九
指櫛の似合たる	二四〇三	船夫	二四六二	○驗	二五〇四
舍人	二二〇	衰貶	二五〇二	○同	一七九二
涙	一四九八	初瀬詣	二七六六	○嫌疑	五八六
女房	二五〇七	六位藏人	二六〇九	○言語	二八七六
齒黒の乾く間	一八三〇	○けそう	五九七	いひにくきもの	二八七六
眉抜く	九〇四	○顯證	七三九	打解け言	二四〇五
御梳櫛	一三〇七		八〇九	同じ事したる	二四〇六

陸口	一四〇六	使ひ方	二六〇四	うつ人	一七三二
雷鳴の陣の舍人	二〇〇三	長言	二七〇〇	碁石	二二〇五
虚言	一九〇三	情ある人の詞	二七〇二	同	二〇七四
下司	五〇二	禰宜	三六八	碁盤	一八七三
口狀の始終	二七〇六	秘事を公言する	二五〇五	深夜の圍碁	二〇七三
「ことごとくなるもの」	五〇二	文こと葉のなめげなる	三三〇七	つれづれなぐさむもの	一六三二
「詞なめげなるもの」	二〇〇二	無禮	二二〇六	欲深き對手に勝つ	二〇三二
差出口	二八〇五	宮のめ	三三〇三	○小一條	一七三
舟夫	二〇〇三	わざと繕はで言ふ	二六〇二	○小一條の大將	四〇七
知らず見ず聞かぬ事	二五〇八	○驗者	一七〇一	○小一條院	三三〇六
相撲	二〇〇三	○支(象(琵琶))	二〇〇三	○紅梅	四七〇八
消息	二七〇六	○源少納言	二二〇二	○紅梅(家)	一七三
僧侶	五〇二	○建築「家、建物」「宮中」を見よ	一五〇一	○紅梅「織物」「染色」「服装」を見よ	二二〇八
同	三六〇八	○解文	一五〇一	○紅梅の衣	二二〇八
他人に對する批評	二八〇七	○碁		○弘法大師	二〇八三
兒の物言ふ	一六〇二			○鴻門の會	二二〇五
男女	五〇二			○肥えたる人の髪多かる	一四二〇

○五葉	五ノ二〇	御精進	一六ノ八	○心の鬼	一六ノ六
○粉川	二〇八ノ三	山里	二五ノ四	○「こころもとなきもの」	一八ノ九
○こがらし	二〇四ノ二〇	蓬	五ノ四	○「こころゆくもの」	三五ノ三
○木枯の森	一三〇ノ四	○五月五日		○心よしと知られたる人	二七ノ七
○弘徽殿(女御)	一八九ノ五	櫻の花	四九ノ三	○御座	二四ノ九
○古今集	六九ノ五	疊りくらしたる	一三ノ二	○故事	
○古今集の歌	二〇ノ二〇	節句	五ノ四	聞き出でたる	二四ノ一
○古今の草紙	二〇ノ一	○五月節句—書簡	五ノ四	探し出でたる	二四ノ二
○五月		○極樂	一九ノ二〇	斧の柄も朽ちぬべき	七三ノ二
あやめの藏人	一〇五ノ一	○昔	六八ノ四	○小白川	四〇ノ七
五日	一三ノ二	○「こころちよげなるもの」	七八ノ六	○小水龍(横笛)	二〇ノ五
宮中	五〇ノ四	○「こころひの森	一七ノ四	○五節	
菅蒲	五〇ノ四	○心あがり	六八ノ三	かいつくろひ	一〇八ノ八
節句	五〇ノ四	○「こころるづきなきもの」	一四ノ八	かしづき	一〇五ノ五
空	五〇ノ六	○「こころるづきなきもの」	二八ノ七	宮中	一〇九ノ二
朔日	四八ノ一	○「心ときめきするもの」	三五ノ三	行事の藏人	一〇八ノ六
楡	五三ノ五	○「心にくきもの」	二〇ノ八	試の御髪上	一七八ノ八

五節の局	一〇五ノ二	○「こころなるもの」	五ノ二	○近衛の御門	一七ノ二
受領の出す折	三三ノ五	○こととり	七八ノ九	○小半菰	一七ノ二
帳蓬の夜	一〇八ノ八	○ことなし草	六八ノ七	○木幡の森	一三七ノ七
殿上人	一〇八ノ三	○ことなしび	一三ノ四	○戀—「戀愛」を見よ	
主殿司	一〇七ノ二	○同	二八ノ二	○こひぬまの池	五〇ノ二
舞姫	二七ノ五	○「こころに人にしられぬもの」	二二ノ七	○こひの森	一三七ノ七
舞姫の服装	一〇五ノ四	○小舎人童	五ノ二	○御佛名—「佛名」を見よ	
童	一〇五ノ四	○同	二九ノ三	○胡粉	一七四ノ四
童舞の夜	一〇九ノ二	○「任事」の明神	三三ノ二	○こぼす	一五ノ八
○御前	七三ノ二	○詞—「言語」を見よ	三〇ノ二	○護法	二九ノ八
○後撰集	六九ノ五	○「詞なめげなるもの」	三〇ノ二	○氷	
○木燭	六八ノ四	○このきみ	一五ノ一	削氷	五六ノ六
○琴	四八ノ三	○このくれ山	一四ノ二	垂氷	二七三ノ二
桐	一八ノ二	○木の葉	二四ノ二	○駒	六九ノ七
ならふ	一四ノ二	○木のはし	六ノ二	○狛犬	一〇三ノ六
音も弾き整へぬ	二四ノ三	○「木の花は」	四七ノ七	○同	二四ノ三
○こと加へ	九三ノ九	○近衛づかさ	一四ノ八	○狛犬(舞)	二五ノ九

○狛犬しく舞ふもの	一四八ノ九	○後夜	一四三ノ三	○罪科	一〇ノ二
○こまがた(舞)	二二〇ノ七	○小弓	二〇三ノ二	犬を流罪にす	一〇ノ二
○こま野	二〇九ノ六	○同	二〇ノ二	畏勤事	一三ノ八
○こまの物語	二〇九ノ三	○こりすまの浦	二〇八ノ一	○釵子	二五ノ七
○同	二六六ノ三	○こりすまの波	一六ノ二〇	○宰相	三三ノ二
○古萬葉集	六九ノ五	○御靈會	一六ノ二〇	○宰相中將	三三ノ二
○こま山(催馬樂)	一六五ノ二	○振幡	七六ノ七	○宰相中將「齊信」を見よ	三三ノ二
○金鼓	一四一ノ一	○馬長	七六ノ七	○宰相の君	三五ノ二〇
○權大納言	三三ノ二	○伊周(權大納言、大納言)	七六ノ七	○催馬樂	六七ノ一
○權大納言「伊周」を見よ	三三ノ二	遊子猶行殘月の條	二九ノ三		
○權中將	三三ノ五	庚申に歌詠ます	三三ノ四		
○權中納言	三三ノ二	關白(道隆)に沓を穿す	一五〇ノ七		
○菰	六八ノ二	聲驚明王之眠の條	二七九ノ七		
○同	一三七ノ九	清少に物言ふ	一九九ノ二		
○蔣	六九ノ七	中宮に候す	一八ノ二		
○薦	一七三ノ九	女房と物言ひ戯る	一九九ノ七		
○木守	九七ノ二	女房の降車の世話	二五ノ一		

○裁縫	二二ノ三	○草紙	一〇四ノ六	○さうぞき	五ノ八
頓の物ぬふ	二二ノ三	薄様	一〇四ノ六	○さうぞく「服装」を見よ	四〇ノ五
縫ひ競べ	二二ノ二	歌かく	二七六ノ四	○さうちうが家の人	三三ノ二
針に糸を通す	一八三ノ四	下賜の紙	二四ノ六	○さうなしのぬし	三三ノ二
待つ間	一八ノ二〇	草假名書きたる	二〇〇ノ三	○左右の大將	三三ノ二
○祭文	二七〇ノ三	○精進	二七〇ノ五	○笙の笛	一一〇ノ二
○同	三三〇ノ三	行	二七〇ノ五	否かへじ	一一〇ノ二
○齋院	二四ノ三	精進物	六ノ二	淑景舎の得給へる	一〇九ノ八
垣下	二八ノ〇	千日の精進	一三四ノ三	月に車上にて	二二ノ六
同	二八ノ〇	御嶽精進	一三ノ〇	吹く顔	三二ノ七
罪深し	三三ノ二	○障子	一三ノ〇	もてあつかひ	三二ノ七
御輿の通過	三三ノ三	荒海の障子	一七ノ四	○薔薇	七ノ五
宮仕	三三ノ二	開閉	二九ノ二	○菖蒲	七ノ五
雪の日のおとづれ	九六ノ三	北の障子	八ノ三	雨に刈る	一七ノ二
○箏	二二〇ノ九	衝立障子	二七ノ五	「草は」	六八ノ二
○姓	二六四ノ六	布障子	一九九ノ二	五月節句	五〇ノ四
○造花	二四ノ二	○裝飾「柳のかづら	二二ノ四	菖蒲輿	三〇ノ二

書簡の中に入る	五ノ四	〇左京(人名)	一八九ノ五
残の香	二六ノ四	〇櫻(襲の色目)	二七ノ〇
檜皮屋に葺きたる	一四ノ九	〇同	一四ノ〇
〇菖蒲のかづら	一五ノ一	〇櫻	一七ノ六
〇相府蓮	二〇ノ二	青き瓶にさす	一七ノ六
〇才の男	一五ノ二	落葉	二〇五ノ五
〇柳	五ノ一	造花	二四ノ一
〇「さかしきもの」	三〇ノ四	造花を引倒す	二四ノ三
〇捜し物	二四ノ六	花瓶に挿す	四ノ八
急ぎ求むる	二四ノ六	花瓣、葉色、枝ぶり	四七ノ八
文	二四ノ六	給にかきて劣るもの	一三六ノ六
〇看	一三ノ四	〇櫻の唐衣「唐衣」を見よ	一三六ノ六
〇同	二五ノ二	〇櫻の直衣「直衣」を見よ	一三六ノ六
〇嵯峨野	二〇九ノ六	〇櫻井	一五二ノ一
〇さがりば	一八〇ノ六	〇酒	二八ノ九
〇鷺	五ノ五	酒客	二八ノ九
〇「崎は」	二六三ノ三	御經佛供養はて後	一五五ノ七
		〇笹	六九ノ七
		〇棧敷	二四ノ二
		〇さし出	三〇ノ三
		〇同	一四九ノ一
		〇指貫	二四ノ五
		青鈍の堅紋の指貫	二四ノ五
		青鈍の指貫	一四四ノ三
		青鈍の織物	二五ノ二
		葡萄染の堅紋の指貫	二七三ノ八
		葡萄染の指貫	八五ノ一
		酷暑には夏蟲の色	二六〇ノ七
		名あたらす	一五二ノ三
		夏は二藍	二六〇ノ七
		紫のいと濃き	一三九ノ四
		紫の濃き	二六〇ノ七
		萌黄	二六〇ノ七
		〇「指貫は」	二六〇ノ六

〇左大辨	一五ノ七	蟲	四ノ〇
〇定め	一八七ノ四	桃	四ノ六
〇「里は」	六七ノ九	柳	四ノ六
〇里人	二ノ五	夕暮の花風	二四ノ〇
白馬見にゆく	二ノ五	〇三四月「紅梅のきぬ	三三ノ八
六位藏人	五ノ七	〇三十の期	一八七ノ二
〇佐野の船橋	六七ノ五	〇三尺の几帳「几帳」を見よ	一八七ノ二
〇澤田川	六七ノ一	〇参内	七六ノ三
〇雑色「馬の口などす	二九ノ一	〇三條の宮	三〇ノ二
〇雑色	二〇ノ〇	〇三の御前(中宮の妹)	二四六ノ二
藏人になりたる	二〇ノ〇	〇三味堂	一八ノ三
同	三三ノ四	〇三位中將(隆家)	二五ノ二
〇佐保殿	二六ノ二	〇三位の中將	三三ノ二
〇三月	一八五ノ八	〇狭山の池	四九ノ三
急ぎ過ぎたる七夕	一八五ノ八	〇更級山	一五ノ五
三日	一三ノ二	〇舍利の壺	一七ノ五
鳥	四ノ〇	〇猿樂「こと	三〇ノ九
		〇猿樂「こと	二〇ノ三
		〇さるがひ	一六三ノ三
		〇猿澤の池「采女	四九ノ〇
		〇「さかしきもの」	三三九ノ七
		〇左衛門大夫	一九二ノ八
		〇左衛門の陣	二ノ七
		〇同	九〇ノ五
		〇同	一五九ノ三
		〇従者	一九四ノ二
		客待して内を覗く	二八五ノ八
		主思はぬ	二七ノ三
		主人の推し量らるゝ	七三ノ二
		主勝らぬ	二〇三ノ五
		出世したる主に詣ふ	二七二ノ二
		主に物いはせぬ	二七二ノ二

主待ち詫ぶる	七三〇三	〇飭摩 <small>しんま</small> の市	一六〇二	〇職の御曹司	一八三〇六
新参者	七三〇九	〇史記	二九四〇八	〇式部丞 <small>しきぶのじょう</small>	二四五〇四
堅文を取りたる	二九〇二〇	〇四季「季節」を見よ	五四〇三	御使	二七四〇三
使用する者	二七〇八	〇鳴	七三〇三	〇式部丞則理 <small>のりまさ</small>	二五九〇二
服装	空一〇一	〇色彩	七三〇二	〇式部大夫	一九二〇八
よしあし	七三〇七	藍と黄蘗と	七三〇三	〇橘	一四二〇二
〇舅姑	七三〇二	黒きと白きと	七三〇二	〇時雨	二二八〇五
ありがたきもの	七三〇二	花かへる	二〇六〇四	〇四月	四〇〇二
住まぬ聲	二二五〇一	晝よりばえまさる	一六六〇二	賀茂祭	四〇〇二
同	二二五〇八	紫	一〇三〇九	紅梅 <small>つぎぬ</small>	二二〇〇八
〇鹿	二二八〇八	紫の指貫雪に映えたる	二二三〇九	空	五〇〇一
がきまさりするもの	二二八〇八	紫、雪にはゆ	一九九〇一	晦日	四七〇二
聲	二二八〇二〇	〇職の御曹司	六〇〇八	長谷寺に詣づ	二二七〇八
〇志賀(寺)	二二八〇三	〇同	二二〇〇二	杜鵑	五〇〇二
〇試樂	二二八〇三	〇同	二二〇〇二	〇淑景舍 <small>しゆけいしや</small> (中宮の妹)	二二八〇三
〇しかすがの波	二二八〇二〇	〇同	二二〇〇二	御装束	
〇志賀の浦	二二八〇一	〇同	二二〇〇二		

車に乗る女房御覽	二二五〇一	〇下簾「車」を見よ	二〇三〇八	他の女をほむる	三〇〇九
五節のかしづき	二〇五〇六	〇「したりがほなるもの」	二〇三〇八	〇疾病「病人」参照	
笠の御物語	二〇九〇八	〇榻	二二五〇九	脚氣 <small>あしのり</small>	二八四〇七
春宮に参り給ふ事	二二七〇五	大路に立つ	二二五〇九	怠りたる知らせ	二二九〇二〇
〇重正	二二五〇二	檳榔毛の車	六〇〇三	齒痛	二八四〇七
〇獅子	一〇三〇六	〇七月	二二五〇七	情人の見舞	二八五〇一
〇同	二二五〇三	雨	二二五〇七	修法	二二五〇六
〇獅子(舞)	二二五〇九	有明	四二五〇五	讀經	二八五〇四
〇仁壽殿	一〇七〇七	風	二二五〇七	胸	二八四〇七
〇侍従の君	二〇三〇二〇	十五日、盆	二二五〇七	物食 <small>ものく</small> ばぬ	二八四〇七
〇侍従宰相	二二五〇三	相撲	二二五〇九	物怪	二八四〇七
〇熾盛光	二二五〇九	月	四二五〇四	「やまひは」	二八四〇六
〇史大夫	一九二〇八	七日	二二五〇二	〇兒童「童」参照	
〇下襲	二二五〇五	闇	四二五〇五	悪戯	三〇〇五
〇同	二二五〇二	夜	四二五〇四	遊ばずる	三二五〇四
〇同	二二五〇二	〇嫉妬	二二五〇二	抱かれて寝入りたる	一七五〇二〇
〇「下襲は」	二二五〇二	恨み嫌ぶる	二二五〇二	覆盆子	二二五〇七

今やうの三歳子	三〇〇五	装束せきす	八〇五	模倣	二七〇二
美しき	六五〇〇	すくばなし歩く	一七〇二	桃の木切る	一七〇一
美しき動作	一七五〇五	生長	一三〇一	夜泣	五九〇四
梅の買取る	一七〇七	稚兒の寝おひれ	一四〇八	同	三三〇五
嬰兒	三三〇八	稚兒の物いふ	一六〇二	老人	五九〇六
隆口を當人の前にて云ふ	一四九〇一	稚兒の物語し笑ふ	一三〇二	例ならぬ人の前	二九〇六
かなしく慣はされたる	一七〇八	讀書	一六〇二	皇子	一〇〇一
祈禱する女	三三〇五	泣き入る	一七〇〇	童女	一〇〇三
草を携ふる	三三〇九	泣く兒	二九〇四	〇齒	二五〇九
藥玉	一〇〇四	同	七〇二	〇同	二四〇八
肥えたる	六〇〇二	にくげなる	一四〇八	〇禪	一三〇三
同	一七〇一	火取の童	一五〇三	〇品	一六〇一〇
五月節句の童女	五〇二	ふとりたる	一七〇六	〇信太の森	二七〇九
心悪き人の養ひたる	二八五〇〇	瓜に書きたる顔	一七〇四	〇篠原	一五〇一〇
五節の童	一〇五〇四	祭	五〇五	〇忍び	五八〇三
さし出	三〇〇三	乳母	二四〇八		
侍者	一四〇八	乳母の夫	三〇二		

大進 生昌	八〇三	〇鹽籠(和琴)	一〇〇四	蟻通の明神	三三〇一
六位藏人	五八〇九	〇鹽籠の浦	二〇八〇	嚴籬	二六〇二
〇忍の森	一七〇三	〇「島は」	二〇七八	活田の社	三三〇二
〇しのぶ草	六〇〇八	〇自慢、自惚	一四〇九	上の御社(賀茂)	一六〇六
〇芝	六〇〇七	才なき人の	一四〇九	「神は」	二六〇八
〇咳	一六〇八	音も彈き整へぬ琴	二四〇三	任事の明神	三三〇三
〇椎の木	五三〇二	〇進士	七〇八	杉の御社	三三〇二
〇十月		〇神事「祭」参照		龍田の社	三三〇二
蟋蟀	一三〇九	葵祭	六〇二	中の御社(稻荷)	一七〇九
庭園	二五〇五	稻荷詣	一七〇九	はなふちの社	三三〇二
〇十二月		春日詣	一〇〇八	布留の社	三三〇二
御佛名	二七〇二	春日祭	一七八〇八	美久理の社	三三〇二
晦日と正月一日との間	一九〇七	祭	一四〇九	「社は」	三三〇一〇
晦日のなが雨	三三〇二	御祓	一四〇九	〇親族	
晦日の様	三三〇八	六月三十日の御祓	一八〇六	愛憎	二六〇八
節折	二六〇六	臨時の祭(八幡)	一三〇三	思はぬ	一九〇七
〇「集は」	六〇〇四	〇神社「神」参照		談話	二七〇五

○身體 あつげなる 肥瘦 目の大小 ○新中納言 ○寢殿 ○新年「正月」を見よ ○しめぢ野 ○霜 板屋 いと白き 鴨 庭 鶯 ○下野 ○同 ○しもつけの花	二四ノ二〇 四ノ三 二六ノ二 二二ノ二 二二ノ二 二〇ノ六 二八ノ五 一ノ六 五ノ九 三ノ八 五ノ八 一九ノ六 二八ノ二 七ノ三	○正月、新年 白馬 一日 同 大根 霞 薬子 車の音 九重 最初に噓ひたる 十五日 十二月晦日と正月一日 里人 空 内裏 殿上人 寺籠	二ノ五 二ノ二 三ノ二 一七ノ六 二ノ二 一七ノ八 一八ノ四 二ノ九 二〇ノ九 三ノ二 一九ノ七 二ノ五 二ノ二 三ノ二 二ノ七 一四ノ四	舎人 主殿司 七日 同 女官 初瀬詣 望粥の節供 八日 若菜 ○上官 ○同 ○上臈 ○釋迦 ○笏 ○積善寺一切經供養 ○釋奠 ○修驗者	二ノ七 二ノ八 二ノ四 二五ノ三 二ノ八 一四ノ二 三ノ二 三ノ二 二ノ四 一五ノ二〇 一八ノ六 二九ノ七 二〇ノ二 一四ノ四 二四ノ八 二五ノ九
--	---	---	--	---	--

苦しき生涯 こはき物怪預りたる こはき物怪調じたる れぶり聲 病人 物怪 ○朱雀院 ○出産 遅るゝ 祈禱 兒の行末 後産の遅き 男か女か ○手跡 悪筆 老法師のいみじけなる こまぐと書きたる	六ノ四 一七ノ一 二〇ノ一 二八ノ三 二七ノ三 二五ノ一 一七ノ二 一八ノ二 一四ノ一 一八ノ三 一八ノ二〇 一八ノ六 五ノ二 一六ノ一 二六ノ二	雜波わたりの遠からぬ 見知る 物書かまほしうする よく書く ○朱買臣が妻を教へけん年 ○壽命經 ○櫻欄の木 ○承香殿 ○勝負事 ○書簡 雨の日 卵の花につけたる 艶書 大きな木の白きにつ けたる 懐舊 後朝の書簡	一八ノ二 二〇ノ一 二二ノ四 一八ノ七 一八ノ三 二四ノ二 五ノ三 一六ノ九 二四ノ七 二六ノ七 二〇ノ二 二六ノ三 一六ノ八 三五ノ二 二七ノ一	紅梅につく 紅梅の紙 五月節句 親しき人文通を絶つ 情人の贈れる 情人の書簡 たて文 同 同 豎文 地方よりの文 取り違へたる 蓮の花辨に書きたる 火の光に読む 藤につけたる 返事 松につけたる	一五ノ二 二四ノ九 五ノ四 二六ノ四 一八ノ八 一七ノ二 一五ノ一 一六ノ八 二九ノ二〇 二七ノ八 二二ノ〇 二二ノ二 二七ノ二 二六ノ五 一〇ノ二〇 二四ノ三 九六ノ四
---	---	--	---	---	---

密書を見られたる	二二〇七	○白川の關	二六〇二	○すいせい君	二六〇一
結び文	二六〇三	○「しらへは」	二二〇二	○菅原の院	一七〇二
無徳にいひなしたる	七六〇三	○白山の観音	九四〇八	○透影	二〇〇三
めでたきもの	三三〇二〇	○しりうご	二四〇二	○杉立てる門	二二〇五
文字思ひ直したる	二二〇二	○後口	二五〇三	○「過ぎにし方の戀しきもの」	三三〇八
文言の無禮なる	三三〇七	○しりなが	一四〇〇	○杉の御社	三三〇二
柳につけたる	一〇四〇六	○白一黒	七〇二	○誦經	三三〇二
破り捨てたる文の續	三三〇五	○しろい物	二〇〇七	○同	一四〇四
雪の日	二六〇二	○白き管	一八〇二	○宿世	一三〇一
遠方の情人の贈れる	一八〇三	○白くて著よ	九〇八	○同	二五〇二
○叙爵		○四位	二四〇二	○主君	二五〇二
かうぶりえて	一九〇八	○四位少將	三三〇五	○すけた	三三〇三
六位藏人	一九〇八	○透垣	二五〇九	○雙六	三三〇三
○書籍		蜘蛛の巢	二五〇九	一番に勝つ	一九〇四
○白襲	二二〇三	野分の朝	二五〇七	敵の養きたる	一八〇四
○白重の汗疹	二二〇六			采	一七〇二
○白怪	二二〇一			つれづれ慰むるもの	二六〇二

筒	一七〇二〇	子	二七〇二	○蘇枋「染色、模様」を見よ	二六〇三
盤	一七〇二〇	同	一七〇四	○蘇枋	四三〇二
馬おりの	一六〇二二	○雀のこがひ	三五〇四	○蘇枋の羅	四三〇二
○朱砂	一七〇四	○硯	二七〇二	○昂星	三三〇二
○「すのめ」の	三三〇七	髪	二七〇二	○炭櫃	三三〇二
○珠數	二五〇一	心見ゆる	三三〇七	烟たつ	一九〇七
○同	二五〇六	墨つかぬ	三三〇八	長炭櫃	一九〇五
○鈴鹿の關	三三〇二	塵ばみたる	三三〇六	同	二〇〇二
○薄		○すゑるに	二四〇一	○修法	二二〇九
「草の花は」	七〇九	○末濃「染色、模様」を見よ		五大尊	二六〇八
蜘蛛の巢	一五〇九	○塵		熾盛光	二六〇九
○生絹	二五〇八	伊豫籠	一九〇二	佛眼眞言	二四〇二
○生絹の單衣「單衣」を見よ	二五〇九	鉤	二〇〇一	病	二五〇六
○鈴蟲	二五〇九	紫革	一九〇二	○すまし	九八〇六
○雀		帽額	二〇〇一	○須磨の關	一三〇二
親	一七〇五	帽額の無くなりぬる	一九〇二	○相撲	一三〇二
頭赤き	二五〇五	○簀子「燈火」	二七〇五		

言語	三三〇ノ三	大貳、四位	二〇三ノ二	蟹の住家	八七ノ七
負けて入るうしろ手	一四八ノ六	中將になる	二〇三ノ八	一條院の御褒詞	一〇一ノ二
炭		肥瘦	六四ノ二	同	一三三ノ七
頓 <small>いりすみ</small> に煎炭おこす	一八二ノ三	無禮なる	一一三ノ六	歌よまぬ事	二二二ノ四
冬	一〇七	待ちノてなりたる	二〇三ノ五	袿姿	八五ノ七
〇墨		〇「受領は」	一九三ノ二	厭世	二四二ノ三
石こもりたる	二七〇ノ三	〇駿河前司	二八ノ九	行成との問答	六〇ノ二
大なる	二六〇ノ二	〇駿河舞	二二〇ノ四	行成餅餠を贈る	一五二ノ二
すりひらめかしたる	三三三ノ六	〇櫻櫛の木	五三ノ三	高名のふねたきの事	二二六ノ三
〇すみよし(物語)	三〇九ノ二	〇随求經	二〇八ノ六	香爐峰の雪	二七〇ノ八
〇すみれ	七〇ノ三	〇水晶の珠數	五ノ六	虚言の條	二〇一ノ七
〇誦文	三〇ノ三	〇水精の珠數	二五三ノ三	清水に籠る	二七二ノ七
〇修理	一九三ノ六	〇水龍(横笛)	一一〇ノ四	草の庵の條	七九ノ六
〇受領		〇末の松山	一五ノ四	海月の骨の條	一三三ノ二
和泉	一九二ノ四	セ		結縁八講の聽聞	四〇ノ二
紀伊守	一九二ノ四	〇清少納言		五千人の中	四四ノ八
五節	三三ノ五			この君	一五八ノ二〇

伊周に話しかけらる	一九九ノ二	内侍との評定	一四九ノ九	夜をこめての歌	一五六ノ二
最終の車に乗る	二四九ノ四	中なるなとめの條	九ノ五	〇清僧都	二五八ノ四
造花に春風	二四七ノ二	睡きを念じて侍ふ	二七八ノ二〇	〇清範	四四ノ一
實方と和歌應酬	一〇六ノ二	宣方に戯る	一八九ノ九	講師	一五五ノ六
下殿の事	二二二ノ三	始めての宮仕	一九七ノ二	同	二六四ノ六
積善寺行啓の供奉	二五五ノ一	花散りたる梅の條	一三三ノ六	〇姓名	一七〇ノ三
すこし春あるの條	一三三ノ二〇	藤原時柄	一三三ノ三	〇清涼殿	三三〇ノ六
せんぞくれう	二二五ノ九	筆紙疊に心慰む	二四二ノ二	〇同	三三〇ノ六
第一の人と思はれん	二二四ノ五	杜鵑を尋ぬ	一一六ノ八	〇同	一〇七ノ七
大進生昌との問答	七ノ五	枕草紙著作の趣旨	二九四ノ四	〇少將(深草少將)	二七三ノ四
齊信と契らざる條	一五五ノ二	三笠山の條	三三〇ノ一	〇少將(舞人)	一六六ノ五
齊信との應對	八四ノ二	道隆との問答	二四八ノ二	〇少將の井	一九二ノ一
齊信の朗詠を譽む	一八七ノ六	道隆に褒めらる	一四四ノ五	〇消息	四三ノ五
中宮の御里居に伺候	一六九ノ二〇	道長方と疑はる	一六八ノ六	〇消息	四三ノ五
中宮の御姿を評す	二二〇ノ七	物忌に行く	二七二ノ四	内裏より中宮へ	二四五ノ三
地獄繪	六九ノ二〇	雪山	九四ノ二	宰相の君より清少へ	二七二ノ三
經房に思はる	一五九ノ五	よどのの歌の條	二八〇ノ二	齋院より中宮へ	六六ノ五

清少より宰相の君へ	二七三ノ四	○「せちば」	五〇ノ三	○前裁「庭園」を見よ	二五ノ二
清少より中宮へ	二七三ノ三	○節會	二五ノ三	○前司	二〇八ノ三
中宮より清少へ	二〇三ノ一	雨	二七ノ九	○千手	二〇八ノ六
同	三〇ノ一	采女	二五ノ三	○千手陀羅尼	二〇八ノ六
同	二七ノ九	御物忌	二八ノ三	○せんぞくれう	二五ノ三
東宮より淑景舎へ	一三ノ四	○説經	五〇ノ八	○「せめておそろしきもの」	三三ノ三
頭中將より清少へ	八〇ノ五	○節句	五〇ノ四	○芹つみし	三三ノ三
女院より一條院へ	一四九ノ六	五月	三三ノ二	ソ	
女院より中宮へ	二五九ノ五	五節句	五〇ノ三	○そうけ野	二〇九ノ六
宣方より清少へ	一八八ノ二	「せちば」	一九ノ四	○僧都の君「隆圓」を見よ	二九三ノ三
八講の日義懐中納言より物		○節分	三三ノ二	○聰明	一三三ノ二
見車へ	四三ノ四	○雪月花	二九ノ六	○僧侶、僧官	六ノ一
○清和院	一七ノ二	○背縫	二九ノ六	愛子を僧侶にす	六ノ一
○「開は」	一三ノ二	○宣耀殿	二〇ノ七	あらまほしきわざ	二九三ノ三
○節供	三ノ二	○宣耀殿の女御	二四六ノ七	卯杖	二七八ノ八
○同	五〇ノ二	○前庭			
○勢多の橋	六七ノ六				

御佛名初夜の御導師	二七三ノ三	長者	五ノ八	夜居の僧	一四七ノ一
供奉	二〇四ノ五	地位の高下	二〇四ノ五	老僧の行	一四〇ノ二
言語	五ノ三	讀經	一〇三ノ四	老尼	九ノ五
木のはし	六ノ二	同	一七ノ七	律師	三三ノ七
小法師	一四ノ四	讀經に熟せる	一七九ノ七	威儀師	一七八ノ六
十二年の山籠	七ノ九	内供	三三ノ七	女	六ノ三
同	一五ノ一	坊	一四ノ九	女に侮らる	二〇四ノ六
修行者	一四ノ二	聖僧の舉動	三三ノ一	女に目を配る	二八五ノ五
僧綱	一六ノ二	病中の修法	三三ノ六	○蘇香の念	二〇ノ二
同	二五八ノ七	評判よき	二九ノ二	○俗語「和歌、俗語」を見よ	二四ノ九
僧正	二〇四ノ七	服装	一四〇ノ七	○息災のいのり	二四ノ九
僧都	一四ノ七	法師子	一七四ノ六	○續飯	一八ノ二
同	二〇四ノ六	法師のさえある	一〇三ノ三	○足下	二八七ノ三
大行道	二五八ノ三	佛の出現とも見ゆる	二九ノ二	○素盡鳴尊	五三ノ三
大なる	二六ノ二	眞の世捨人	一八ノ四	○袖几帳	三三ノ二
堂童子	一四三ノ二	物怪調ずる	二九ノ一	○そとの濱	二〇七ノ二
持經者	一〇三ノ三	容貌	三三ノ七	○その原	一五ノ一〇

○そばの木	五ノ二〇	薄色	一七ノ二〇	香染	四五ノ九
○尊勝陀羅尼	二〇八ノ六	同	二五ノ三	同	四六ノ一
○染色、模様		同	二五ノ四	唐衣	二四ノ七
浅黄	四〇ノ三	薄紅梅	一九ノ七	同	二八ノ二
浅緑	三〇ノ一	薄墨	二五ノ三	朽葉	二〇ノ二
同	二七ノ二〇	薄にび	八五ノ九	胡桃色	一六ノ三
青色	四七ノ三	同	一八四ノ一	紅	四六ノ一
同	七五ノ五	薄二藍	三八ノ三	同	五八ノ四
同	一〇五ノ四	薄二藍	三五ノ九	同	一〇ノ九
同	二六七ノ九	葡萄染	八五ノ一	同	二八ノ五
青末渡	二九ノ二	同	一〇三ノ八	同	二九ノ二
同	三五ノ一〇	同	一九〇ノ二	同	二九ノ五
青鈍	一四ノ三	同	二五ノ二	同	一三ノ六
同	二八ノ三	同	二五ノ三	同	一八四ノ一
同	二四四ノ五	同	二五八ノ八	同	二四四ノ六
薄色	五ノ六	同	二七三ノ八	同	二四四ノ七
同	二九ノ二	香	四一ノ七	紅梅の濃きうすき	二八七ノ九
				四位五位は冬	

紫苑	二八四ノ二	村渡	一八ノ六	九月三十日、十月一日のほど	
末渡	五ノ四	紫	一七ノ八	五月五日	一〇五ノ三
同	六五ノ四	同	一九九ノ四	同	一三ノ二
蘇枋	四一ノ七	同	一九九ノ一	同	五〇ノ六
同	四三ノ二	同	二六〇ノ七	三月三日	一三ノ二
同	一三八ノ三	萌黄	二六ノ五	四月	五ノ一
二藍	五ノ三	同	二八ノ三	七月七日	一三ノ二
同	三五ノ九	同	二九ノ二	正月	二ノ二
同	四〇ノ二	同	二九ノ八	正月一日	一三ノ二
同	四一ノ七	同	三三ノ一〇	夕	
同	四三ノ二	同	一四ノ三	○田一穗に出でたる	二三四ノ六
同	二六〇ノ七	同	二六〇ノ七	○對	八ノ二
同	二六二ノ三	緑彩	二七〇ノ一〇	○同	一一ノ三
村渡	五ノ五	六位は夏	二八七ノ九	○同	二五ノ一〇
同	五〇ノ二	女のうはぎ	二八三ノ三	○同	二八ノ八
同	一〇四ノ六	○染殿の宮	一七ノ二	○大變	
同	一〇八ノ二	○空			

○談話、物語	一四七ノ四	御祓の爲に官の廳に御座し ます	一八三ノ六	清少を試み給ふ	二四ノ五
いひ募る	三三ノ七	思ふやと問はせ給ふ	二〇ノ七	大進生昌の家に臨み給ふ	六ノ九
貴人の對手	三〇ノ二	車に乗る女房御覽	二五ノ二	寺籠せる清少を召す	二七ノ七
さし出	三六ノ五	五節出ださせ給ふ	一〇五ノ五	女房の局に臨み給ふ	六ノ四
世間話	一六三ノ二	小二條の御里居	一六七ノ五	琵琶を持たせ給ふ	一〇ノ九
つれづれなぐさむ	二七四ノ五	御服装	二五ノ三	法興院行啓	二四三ノ八
宮仕人	一九五ノ四	御容姿	一九七ノ六	道隆のために佛事を修し給ふ	一五ノ五
雪の夜	二七ノ四	同	一九九ノ五	物忌中の清少を召す	二七ノ八
○「たゆまるゝもの」	二〇九ノ八	御容貌	二五六ノ六	我をばいかゞ見る	二五六ノ二
○「陀羅尼は」	二七三ノ五	三條の宮に座します	三〇ノ二	○中間に	八八ノ四
○垂水―水晶の莖	二二ノ四	積善寺行啓	二九ノ三	○中將―蟻通明神	三五ノ四
チ	二〇九ノ八	清少に御文を賜ふ	一六八ノ〇	○ちうせい高杯	九ノ七
○中宮定子	二二ノ四	清少に紙を賜ふ	二四ノ二〇	○ちうせい折敷	九ノ七
扇を給ふ	二〇九ノ八	清少に疊を賜ふ	二四ノ七	○中少將	二二ノ二
否かへじの笠	二八ノ三	清少を愛し給ふ	一九七ノ三	○中納言	二〇ノ二
御装束		同	二五六ノ二	○中納言殿―隆家を見よ	

○中納言の君	三三ノ六	○除目	二〇三ノ〇	○重食	三六ノ三
○同	三五ノ九	一の國得たる人	二〇三ノ〇	○女子の教育	二〇ノ九
○中盤	二七ノ六	宮中	四ノ一	○衝立障子	一六四ノ三
○「近くて遠きもの」	一九ノ六	第一の國得たる人	七八ノ九	○築地の板	二七ノ五
○地下	三九ノ三	知人のなるべき折	一八ノ七	○築土のくづれ	二七ノ八
○同	二五ノ三	官得ぬ人	二五ノ五	○司召	八二ノ七
○地蔵	二〇八ノ三	官得ぬ人の家	一六三ノ三	○同	八三ノ六
○千里の濱	二〇七ノ二	中の夜	二六ノ四	○月	
○地摺	一九〇ノ〇	申文	四ノ一	明きに通ひ来る人	二六六ノ七
○地摺袴	二二三ノ五	○丁	三六ノ三	有明	三六ノ二〇
○知足院	五ノ九	○貞觀殿	二九ノ六	同	二八八ノ八
○父―養蟲	五六ノ三	○ちやうざ	五ノ八	荒れたる家	一四〇ノ三
○千貫の井	一九三ノ二	○帳臺の夜	一〇八ノ八	薄雲	三九ノ三
○小さきもの	一七五ノ二	○定澄僧都	二八ノ一	車	五七ノ二
○陣	六三ノ六	○定	二八ノ一		
○同	一八八ノ五	○枝扇	一四ノ七		
○沈の御火桶	一九六ノ六	○定本	二六ノ二〇		

車にて川を渡る	二六ノ八	○つきはな	一七ノ二	○つば装束	二九ノ七
懐巻	三五ノ二	○月まつ女(物語)	二九ノ二	○壺坂	二〇八ノ三
下衆の家	五ノ三	○作物所	一七ノ二	○壺葦	六九ノ七
月光に文を見る	二六ノ一	○作佛	一〇ノ八	○同	七〇ノ三
こまの物語	二六ノ三	○土塊	一七ノ五	○局主人	一九八ノ二
笙の笛	二二ノ六	○土御門(町)	一九ノ五	○局する	一四〇ノ六
七月	四ノ四	○同(門)	一九ノ二	○壺胡籬	六六ノ五
七月七日	一三ノ三	○躑躅(下襲)	二六ノ三	○つまとりの里	六七ノ二
車中の装束	二七ノ七	○經房	七九ノ一	○罪	三三ノ二
追想	三六ノ一〇	笙の笛	一五八ノ五	齋院	三三ノ二
夏	一ノ二	清少を悦ばす	一五八ノ五	罪はえがたの詞	三三ノ九
二十六七日の月	一四ノ一	○「常より」とにきゆるし	一三八ノ三	○露	四六ノ五
空車	五九ノ五	○椿市	一六ノ一	あはれと思ふ	三九ノ一〇
物見	三三ノ五	○菜花	六八ノ二〇	庭の淺茅	三九ノ一〇
雪	二七ノ四	○つば装束	三九ノ二	○頼杖	二〇八ノ二
○鴨頭草	一七ノ一〇	○同	一八ノ二	○貫之	三三ノ一
○「月は」	三六ノ九			○鶴	三三ノ一

かきまさりするもの	一八ノ八	木立焼けたる	一九ノ二	雛あそびの	三三ノ九
めでたきもの	四ノ四	十月頃	二〇ノ五	雛の	一七ノ二
○椽のかさ	一七ノ六	前栽	三六ノ五	○てうばみ	一五ノ七
○「つれづれなぐさむるもの」	一三ノ二	同	三三ノ七	○手結	一七ノ四
○「つれづれなるもの」	一三ノ二	庭園の月	一四ノ三	○手長足長	一七ノ四
○追従	二〇ノ七	れたきもの	二二ノ三	○手ならひ	一四ノ六
		笹	三三ノ八	○蝶	六九ノ九
		架垣	一八ノ二〇	○殿上	二五ノ二
○手火桶	二八ノ四	雪のふりしきたる	一〇ノ二〇	○殿上のがうし	三三ノ二
○貞操	一八ノ四	女獨棲む家	一九ノ三	○殿上のなだいめん	六三ノ七
○庭園	二〇ノ七	○調	二〇ノ二〇	○殿上のまじらひ	二八ノ八
秋	二〇ノ七	○調	二〇ノ二〇	○殿上人	二八ノ八
秋深き	一三ノ二〇	○銚子	二七ノ六	正月	二七
池	一九ノ三	○手水	二九ノ五	官	三三ノ五
雨後の秋の朝	一五ノ八	○調度	二五ノ八	名	三三ノ二
萱草を植ふる	一八ノ二〇	負ふ	二五ノ八	御湯殿より下り来る	三三ノ二
木立	三六ノ一〇	にくげなる	三九ノ一	○殿上童	三三ノ二

車にのせたる	三三〇四	長谷寺	一七〇八	○童謡「和歌、俗語」を見よ	三三〇三
装束たてられて歩く	一七五九	普門寺	二七〇〇	○春宮の御母女御	三三〇二
○殿上童(人形)	一九六二	法興院	二四三〇	○東宮権大夫	三三〇二
○轉生	二二〇九	山階寺	一四〇八	○春宮亮	三三〇五
○天にはり弓	一七〇二	雲に籠る	一四〇五	○春宮大夫	三三〇二
○天人	一八〇二	○寺籠	一四〇九	○登華殿	三三〇八
○同	二〇一四	花盛	一四〇九	○同	一五〇二
○寺	二〇一四	人を誘ふ	一四〇三	○東三條	一七〇三
雨	一四〇五	○「寺は」	二〇八二	○藤三位	一六〇七
雲林院	二二〇四	○寺詣	一四〇二	○藤侍従	二〇〇六
清水	三三〇八	雨	一四〇二	○燈臺	八〇五
同	二七〇七	同	二八五〇	○同	一〇九二
こもりたる	二七〇五	行粧を人の見ぬ	二六〇四	○同	一三〇五
積善寺	二四〇八	○出居の少將	一四〇二	○藤大納言	二七〇三
知足院	二二〇四	ト	二五〇七	○頭中將	一六〇四
仁和寺	一六〇三	筒	二五〇七	○頭中將「齊信」を見よ	三三〇五
長谷寺	一六〇一				

○頭辨	二二〇四	誦經	三三〇二	○「とくゆかしきもの」	一八〇五
○同	三三〇五	同	一四〇四	○獨鈷	二五〇二
○頭辨「行成」を見よ		千手陀羅尼經	二九〇三	○同	二九〇六
○とうふん	一七〇二	その寺の佛經	一四〇一	○烏籠の山	一五〇二
○時		はるかなるもの	一三〇一	○所の衆	二二〇二
時奏する	二二〇七	不斷經	一九〇五	青色白襲	二二〇二
弦うちす	二二〇八	不斷の御讀經	九〇二	御裝束	一七〇八
時の机	二二〇九	目なくばりつゝ讀む	二八〇四	藏人になりたる	一〇〇二
時つかさ	一八〇二	やすらかに讀む	一七〇七	試樂の日	一六〇三
○時の人	一四〇一	夕暮	二〇〇二	○刀自	一六〇四
○常磐木	三三〇三	○「讀經は」	二九〇〇	○俊賢の中將	一三〇九
○常磐の森	一七〇五	○徳	二九〇二	○蟲の橋	六〇六
○讀經		御徳を見る	三三〇二	○舍人	一七〇八
數多が中にて	一〇三〇	徳見る事	一八〇八	春日祭	一七〇八
季の御讀經	一七〇六	○木賊	六八〇〇	化粧	二二〇〇
同	二六〇九	○讀書—兒童	一七〇二	言語	三三〇三
孔雀經の御讀經	二六〇八	○得選	三三〇〇	正月	二〇七

○殿うつり(物語)	二九ノ二	○宿直所	一八九ノ八	川千鳥	五四ノ八
○主殿司	一五ノ二	○宿直物	六ノ五	鴨	五四ノ九
行成の使	一七ノ二	○同	二五ノ六	鳥「 <small>からす</small> 」を見よ	
五節	五九ノ七	○同	二〇六ノ四	雁「 <small>かり</small> 」を見よ	
下女	二ノ八	○同	二五九ノ九	水鷄	五四ノ二
正月	五九ノ二〇	○鷹	五ノ七	聲	一三八ノ四
裝束	一三ノ二	○飛火野	二〇九ノ六	鷺	五四ノ四
齊信の使	一八六ノ四	○「遠くて近きもの」	一九ノ九	三月	四ノ一〇
文の使	一三九ノ五	○とみのな	三六ノ三	雀「 <small>すずめ</small> 」を見よ	
○主殿亮	二四七ノ五	○ともあきらのおほきみ(人形)	一六ノ二	巧鳥	五四ノ五
○主殿の女官	九六ノ四	○瓶岡	三四ノ九	鷓「 <small>つばき</small> 」を見よ	
○宿直衣	一〇三ノ二〇	○豊浦の島	二七ノ九	鷓「 <small>つばき</small> 」を見よ	
○宿直姿	一〇五ノ四	○鳥	五四ノ二	容鳥	五四ノ七
○同	二二ノ八	○鶯	五四ノ二	火燒	五四ノ三
○同	二七ノ九	○鶯	五四ノ五	杜鵑「 <small>ほととぎす</small> 」を見よ	五四ノ三
○宿直所	八ノ六	○鶯侍	三三ノ九	○長押	一八ノ三
		○内侍のすけ	三三ノ四	○同	三五ノ一〇
		○典侍	三三ノ九	○勿來の關	一七ノ一
		○内膳	一〇三ノ七	○梨	六九ノ七
		○ないりその淵	一六ノ四	○梨の花	四八ノ四
		○「名おそろしきもの」	一七ノ四	○奈志原	一五ノ一〇
		○長炭櫃	二〇六ノ三	○梨原	三四ノ六
		火光	一九ノ五	○謎々合	一七ノ二
		火おこして	六六ノ六	○なだいめん	六三ノ八
		○仲忠が事	二〇七ノ二	○名高の浦	二〇八ノ一
		○長濱	二二ノ四	○那智の瀧	六六ノ八
		○長櫃	六七ノ〇	○夏	
		○ながめの里	六七ノ五	銅の鍛冶	一四六ノ二
		○長柄の橋	六七ノ二	雨	一ノ二
		○長井の里	二九ノ六	池の蓮	四〇ノ二
		○長鳥帽子	二六ノ九	鶯	五三ノ二
		○なぎの花の御輿		牛の鞆の香	二六ノ一

みこ鳥	五四ノ三	水鳥	五四ノ七	都鳥	五四ノ八	山鳥	五四ノ三	鶯「 <small>つばき</small> 」を見よ	一三ノ五	○「とりどろろなきもの」	一三ノ五	○鷓の聲に儲されて	一七ノ二	○鳥の舞	二〇ノ五	○「鳥は」	五四ノ一	○「とりもてるもの」	六八ノ八	○十市の里	六七ノ二	○名	二四ノ六	○「ないがしろなるもの」	三三ノ二	○内供	三三ノ七	○内侍—右近内侍	一三ノ二
-----	------	----	------	----	------	----	------	----------------------------	------	--------------	------	-----------	------	------	------	-------	------	------------	------	-------	------	----	------	--------------	------	-----	------	----------	------

羅	二八三ノ二	畫寢	二九三ノ三	〇七久里の湯	二八八ノ二
かきまさりするもの	二八八ノ八	服裝	四〇ノ二	〇難波津	一八ノ二
汗衫	二八三ノ六	燈	一ノ二	〇なのりその川	六七ノ一
唐衣	二八三ノ二	短夜の戀	七三ノ六	〇繩筵	一七三ノ七
車	一四六ノ四	閑	一ノ二	〇衲の袈裟	一四六ノ一〇
下種女の子貢ひたる	一四六ノ五	夕かた草もつ兒	二二三ノ九	〇なほき木を折る	四三ノ五
指貫	二五〇ノ六	夕涼	二五〇ノ〇	〇直衣	四三ノ五
澤水	二五〇ノ四	夜	一ノ二	櫻の直衣	四ノ九
下襲	二五〇ノ三	〇薺	六八ノ二	同	一七ノ八
疾病	二八四ノ〇	〇夏の几帳	一〇四ノ五	同	八四ノ二
裝束	二八三ノ二	〇夏蟲	五〇ノ四	同	二二三ノ六
修法の阿闍梨	一四六ノ二	〇棗	六九ノ八	同	二四四ノ六
月	一ノ二	〇盟麥	一六九ノ五	二藍の直衣	四〇ノ三
月夜の川	二六八ノ八	うつくしきもの	一七六ノ五	同	四二ノ七
夏と冬と	七三ノ二	草の花は	六八ノ〇	同	二四ノ二
久しく湯浴みぬ	一七三ノ三	繪にかきて劣るもの	一三八ノ六	〇「なほ世にめでたきもの」	二六三ノ二
畫寢	五七ノ八	〇名取川	六七ノ二	〇なまげしからぬ	二四ノ二

〇「なまめかしきもの」	一〇四ノ二	〇二月一定考	一五三ノ九	〇如意輪	二〇六ノ二
〇涙	二七六ノ八	〇「にげなきもの」	七三ノ〇	〇女官	二五三ノ一〇
〇蠅	一四九ノ三	〇西の京	八七ノ二	〇采女の服裝	二五三ノ一〇
〇ならしげ	三三三ノ一	〇西の對	二二三ノ二	〇髪あげたる姿	二五三ノ一
〇業遠朝臣—牛飼	六九ノ二	〇二條	一七三ノ二	〇正月	二ノ八
〇成信	二八九ノ七	〇二條の宮—「法興院」を見よ	一七三ノ二	〇まゐる	一九七ノ一〇
一條院の廂を叩く	二六四ノ三	〇庭—「庭園」を見よ	一七三ノ二	〇女御	一〇三ノ二
伊豫守兼輔が女	二六四ノ二	〇鶴	二七九ノ四	〇女御(宣耀殿)	二〇七
聲を聞き知る	三三三ノ九	隠し置きたる	二七九ノ四	〇女御(弘徽殿)	一八九ノ五
〇業平	三三三ノ九	子	一三九ノ〇	〇女房	二〇七
〇業平の母—歌	二七八ノ二	〇庭燎	一六三ノ三	御乳母になりたる	二二三ノ二
〇濟政	七九ノ一	〇庭燎	一六三ノ八	假粧	二五二ノ七
ニ		〇人形(殿上童)	一六三ノ二	從者	二二三ノ一
〇にえの池	四九ノ五	〇人間—「人」を見よ	七六ノ七	得選	二四九ノ一〇
〇「にくきもの」	二七〇ノ九	〇人—長	七六ノ七	主殿の女官	二四七ノ五
		〇同	一六三ノ三	御手水番の采女	二九ノ二
		〇仁和寺の僧正	一六三ノ三	〇女房の局	三三ノ四

○女院(東三條院)	一〇五ノ六	○布障子	一九二ノ二	○はしりありく	三〇ノ四
○同	一四九ノ六	○布屏風	一七〇ノ三	○れすもちの木	五二ノ二
○同	二四三ノ九	新しき	一七〇ノ三	○「れたきもの」	一一ノ二〇
○同	三五ノ三	繪巻	一七〇ノ四	○念佛の同向	三三〇ノ三
又		○縫殿	五〇ノ七	○年齢	三三〇ノ六
○ぬかつき	七〇ノ五	○織物	一七六ノ二		
○叩頭蟲	五〇ノ二	○塗籠	一六六ノ八	○野	
○貫川	六〇ノ一	木		○秋	
○ぬす人	八三ノ二	○猫		○同	
○盗人		礎の緒引きたる	一〇四ノ二	○野口の驛	一四〇ノ二
強盗	一七〇ノ七	毛色	三三〇ノ六	○のけくび	二九三ノ六
近隣に入りたる	三三三ノ三	耳のうち	一七六ノ一	○のしひとへ	二九四ノ二
警戒	一九四ノ二	命婦のおもと	一〇七	○のぞきの淵	一六ノ六
花盗人	二四七ノ三	○鼠		○後瀬山	一五ノ一
密盗人	一四七ノ一	子	一七六ノ一	○後のあした	一五七ノ一
我家に入りたる	三三三ノ三	住處	一七三ノ二	○「野は」	二〇九ノ五

○信賢—御嶽詣	一三九ノ二	檳榔毛の車	六〇ノ二	○博士	一四五ノ二
○宣方の中将		同	六〇ノ二	女子	三三ノ九
左京を思ふ	一八九ノ六	御輿—「御輿」を見よ	六九	博士のさえあるは	一〇三ノ二
清少を恨む	一八九ノ二	○賭目	一五九	申文	二〇八ノ九
齊信の朗詠をまねぶ	一八七ノ二〇	○呪ふ	一七三ノ三	文章博士	一七三ノ二〇
「露は別の涙」の條	一八五ノ二〇	ハ		○齒固	五三ノ八
「人間四月」の條	一八五ノ二	○齒—齒痛	二八四ノ九	○袴	一五四ノ二
○信經—せんぞくれう	二五九	○拜謝	一四〇ノ四	○同	二〇六ノ五
○蚤	三三ノ一	○同	一五ノ四	○萩	七ノ一
○則光	八二ノ六	○牛靴	一七三ノ三	朝露	七ノ一
蚤の住處	八七ノ二	○同	一四〇ノ二	雨後	一五ノ二
秀句のよろこび	八三ノ七	○はうたう	二九二ノ六	野分の朝	二〇五ノ八
○乗物—「車」参照		○褒貶		○萩原	一五ノ二〇
網代	三三ノ二〇	歌を褒めらるゝ	三三九ノ三	○白衣	三三ノ二
腰輿	三三ノ二〇	思ふ人の褒めらるゝ	三三九ノ二	○齒黒	三三ノ三
葱花の御輿	二六三ノ九	下種の褒貶	二七六ノ六	○容鳥	五四ノ七
檳榔毛	三三ノ九				

○「はしたなきもの」	二八ノ三	雨風	二四ノ二〇	○拔頭(舞)	二〇ノ五
○牛部	八四ノ二	白製	二七ノ三	○花(草を含む)	
○「橋は」	六七ノ四	養蟲	五ノ二	檜	六九ノ八
○はしりくらへ	二〇ノ二	朝座	四ノ一	浅茅「浅茅」を見よ	
○はしり火	三九ノ八	小白川	四ノ七	葎「葎」を見よ	
○走井	一九ノ三	普門寺	二七ノ二〇	櫻「葵」を見よ	
○蓮		菩提寺	四ノ二	あやふ草	六八ノ四
一切經を入れたる	二五ノ二〇	六月	三六ノ二	青草	六八ノ四
うき葉	六ノ三	○恥しき人		青鞭草「青鞭草」を見よ	
同	一七ノ二	歌の本末問ふ	二四ノ四	覆盆子「覆盆子」を見よ	
はなびらに歌を書く	四ノ三	物おこせたる返事	二七ノ七	いつまで草	六八ノ五
村雨にあひたる	七六ノ七	○「はづかしきもの」	一四ノ二	山石榴	七二ノ四
○長谷寺	一六ノ一	○初瀬	四ノ五	蘋萍	六八ノ二〇
○鱈板	一七ノ五	○同	二六ノ九	萍	一九ノ二
○促織	五ノ九	○初瀬詣	一四ノ六	卯の花「卯の花」を見よ	
○蜂の巣	一八ノ九	○同	一四ノ七	梅「梅」を見よ	
○八月					

淨濁	六八ノ三	菰「菰」を見よ	六九ノ七	芽花	六八ノ一〇
杜若	一〇三ノ九	蔣	二四ノ二	靈董	六九ノ七
酢漿	六八ノ四	造花	二四ノ二	同	七〇ノ三
雁緋	七〇ノ二	造花の雨	二四ノ八	木賊	六八ノ二〇
鷹來紅	七〇ノ一	造花を引倒す	二四ノ三	梨	四八ノ四
唐葵	七〇ノ三	薔薇	七ノ五	薔	六八ノ二
刈萱	六九ノ二	菖蒲「菖蒲」を見よ		瞿麥「瞿麥」を見よ	
桔梗	六九ノ一〇	櫻「櫻」を見よ		ならしげ	六八ノ二
菊「菊」を見よ		笹	六九ノ七	萩「萩」を見よ	
「木の花は」	四七ノ七	しのぶ草	六八ノ八	蓮「蓮」を見よ	
桐	四八ノ一〇	芝	六九ノ七	花盗人	二四七ノ三
「草の花は」	六九ノ九	しもつけの花	七〇ノ三	濱茅	六八ノ一〇
葛「葛」を見よ		薄「薄」を見よ	一〇三ノ九	濱木綿	六九ノ二
紅梅	四七ノ八	すべて紫なるは	七〇ノ三	女羅「女羅」を見よ	
苦	六八ノ四	すみれ	七〇ノ三	菱	一七三ノ六
木蠟	六八ノ四	橘「橘」を見よ		蛇床子	六八ノ四
ことなし草	六八ノ七	鴨頭草	一七三ノ二〇	藤「藤」を見よ	

牡丹	一七〇ノ八	○はなふちの社	三三〇ノ二	○半臂の緒	三三〇ノ五
荊三稜	六八ノ二〇	○箒	二七〇ノ五	○葉守の神	五二〇ノ二
三稜草	一五〇ノ五	新しき	二五〇ノ一	○暴風	一七〇ノ五
みくな草	一四〇ノ三	えせ板敷の	一五〇ノ五	○原の池	五〇ノ一
葎	四〇ノ六	○柞山	一〇ノ七	○「原は」	一五〇ノ九
桃	四九ノ二	○灰―冬の晝	二八ノ七	○祓	三六ノ五
八重葎	六九ノ二	○はひぶし	二〇ノ五	○同	二九〇ノ二
麥門冬	六九ノ二	○葉二(横笛)	五七ノ二	○同	二九三ノ八
山吹	一七〇ノ二	○蠅	六八ノ二〇	○春	一〇ノ一
楊梅	六九ノ二	○濱茅	六七ノ五	曙	二二ノ八
山藨	七〇ノ四	○濱名の橋	一〇七ノ二〇	網代	五五ノ四
夕顔	六九ノ二	○「濱は」	二九二ノ三	鶯	二八三ノ六
蓬	六九ノ二	○濱木綿	一四二ノ二	汗衫	三〇四ノ一〇
龍膽	二〇四ノ二〇	○盤	七二ノ二	夕暮の花風	一六三ノ三
女郎花	二〇四ノ二〇	○半挿	一四二ノ二	臨時の祭の試樂	三三〇ノ一〇
花風	一四ノ九	○反對	一四二ノ二	○遙なる世界	三三〇ノ一〇
花盛―寺籠	一四ノ九	○半臂の緒	一四二ノ二	○「はるかなるもの」	三三〇ノ二

ヒ

○日―入日	三三〇ノ七	○日陸	一〇八ノ二	○菱	一七三ノ六
○日―凶會日	三三〇ノ八	○ひきいれ聲	三三〇ノ八	○美醜	三三〇ノ二
○火	三三〇ノ八	○ひきはこえたる	一七〇ノ二	○聖僧の舉動	三三〇ノ一
近處の火事	三三〇ノ二〇	○同	一八〇ノ二	○火焼(鳥)	五四ノ三
火事	二八〇ノ二	○「ひきものは」	三三〇ノ九	○火焼屋	一六四ノ五
警戒	二四〇ノ八	○同	二二〇ノ八	○同	一九八ノ五
火桶の火	二七〇ノ三	○「ひきものは」	二二〇ノ三	○常陸介	九三ノ一〇
船の火	二七〇ノ七	○茅蜩	二六〇ノ三	○ひちかき雨	一七〇ノ七
文を讀む	二六九ノ五	○蜩	三三〇ノ六	○筆策	二二ノ八
冬	一〇ノ七	○ひくれの驛	二九三ノ二	○ひぢなりたる廊	二七〇ノ六
焼けたる所	一七三ノ六	○同	二九三ノ九	○秘點	二六二ノ一〇
○難あそびの調度	三三〇ノ九	○鬚籠	一〇四ノ七	○人―ありがたきもの	七三ノ二
○難の調度	一七五ノ二	○牽牛	三三〇ノ三	○ひとしき	一八七ノ四
○女龜	六九ノ二	○提	二〇六ノ二〇	○人 給	二二九ノ六
○同	六九ノ七	○同	二七〇ノ六	○同	二五四ノ七
		○同	八ノ二	○ひとつ橋	六七ノ五
		○同	六三ノ三	○ひとづまの里	六七ノ一〇

○「人にあなづらるるもの」	二七〇六	○「ひとばえするもの」	二七〇四	○「ひとへは」	二六〇二	○琵琶は	二二〇三
○「人の家につきくしきもの」	二七〇七	○「ひとへは」	二七〇七	○無名	二六〇二	○檜皮屋	二〇九四
○人々しき	二七〇四	○人丸	二七〇四	○ひはの山	二六〇二	○「客」客を見よ	二〇九二
○単衣	二七〇五	○同	二七〇四	○「客」客を見よ	二六〇二	○姫大夫	一四〇二
青き	二七〇五	○人見の間	二七〇四	○同	二六〇二	○病人「疾病」参照	二二〇三
色きばみたる	二七〇三	○人め(物語)	二七〇四	○火取の童	二六〇三	○修験者	二七〇三
色黒き人の	二七〇二	○火取の童	二七〇四	○人忘れがちなる	二六〇三	○健やかなる人	一七九八
白き	二七〇三	○人忘れがちなる	二七〇四	○檜	二六〇三	○貴く思ふ人	二二九〇
生絹の単衣	二七〇三	○日(装束)	二七〇三	○「日は」	二六〇三	○見舞	二八四二
同	二七〇三	○日の装束	二七〇三	○琵琶「音楽、楽器」参照	二六〇三	○屏風	二八四二
同	二七〇三	○ひの装束	二七〇三	○「琵琶」音楽、楽器参照	二六〇三	漢書の御屏風	二六九三
同	二七〇三	○「日は」	二七〇三	○「ひきものは」	二六〇三	唐繪の屏風	一九〇九
男女	二七〇二	○琵琶「音楽、楽器」参照	二七〇三	○「ひきものは」	二六〇三	坤元録の御屏風	二六九三
練色のきぬ	二七〇二						
のしひとへ	二七〇二						

地獄の屏風	七六〇〇	○晝寝	七六〇二	火おこさぬ	二二〇八
月次の屏風	二七〇一	○親	二六〇三	火の大きなる	二七〇三
布屏風	一七〇三	○夏	二五〇八	冬	一〇八
給	二六〇三	○洞	二九〇三	物語の折	一九五〇
○兵衛の藏人「雪月花の條	二六〇三	○女	二九〇三	よく調じたる	二〇七二
○檳榔毛	二六〇九	○蛇林子	二六〇四	○蟬	二六〇九
○檳榔毛の車	二六〇二	○領神	二五〇一		
○同	二六〇三	○同	二九〇三	○夫婦	七三〇二
○平野「神輿宿	二六〇三	○同	二九〇三	○風俗歌	二六〇五
○ひらの山	二五〇一	○火桶	二六〇二	○「音楽、楽器」参照	
○平緒	二七〇九	○大なる	二六〇二	有明	一九五〇
○晝	二七〇九	炭と火の置き方	二七〇五	一條院のふかせ給ふ	三三〇九
○「後の行啓	二〇三六	他人の炭おこしたる	二七〇四	ならふ	一八〇二
冬	一〇七	竹玉給かきたる	二七〇七	笛の聲	一六〇四
吠ゆる犬	二二〇八	沈の火桶	二六〇六	横笛	二二〇一
待ち明して	二二〇七	手のあぶり方	二八〇四	○「笛は」	二二〇三

○風香調	二〇〇ノ二	青摺	一〇五ノ七	卯花重	一八ノ一〇
○深杏	一四〇ノ三	青鈍の堅紋の指貫	二四ノ五	うへのきぬ	五三ノ一
○吹上の濱	二〇七ノ二	青鈍の指貫	一四ノ三	同	一三五ノ五
○服	一八三ノ六	青柳(襲の色目)	一四ノ一〇	うへのきぬの袴	一四ノ一
○服装		青山吹(襲の色目)	二九ノ四	采女	二五ノ一〇
赤色櫻の五重の唐衣	二五八ノ一	衣服の名	一五ノ八	梅(襲の色目)	九七ノ三
赤色の羅の御衣	二五八ノ五	浮紋の御衣	二八ノ三	葡萄染の五重の御衣	二五ノ三
赤色の唐の御衣	二五九ノ二	後をまかす	一四ノ四	葡萄染の織物の指貫	二五ノ二
赤衣	二四ノ七	薄色(襲の色目)	一五ノ八	葡萄染の織物の直衣	二五八ノ八
赤袷	一七八ノ七	薄色の裳	一六ノ一〇	葡萄染の堅紋の指貫	二七三ノ八
赤紐	一〇五ノ九	同	二五ノ四	葡萄染の指貫	八五ノ一
袖「袖」を見よ		薄墨の衣	二九ノ二	大口	一五四ノ三
浅黄の帷子	四〇ノ三	薄墨の袷衣	二五ノ三	搦練重	一〇八ノ六
青色の紅の衣	一三九ノ五	薄鈍の衣服(喪服)	一八三ノ一	搦練の下襲	一六五ノ五
青き單衣	二四ノ五	羅の袷	二九ノ二	香の羅	四一ノ七
青朽葉	二二三ノ二	羅の袷	二八ノ一	汗衫「汗衫」を見よ	一七八ノ二
青末濃の裳	二五三ノ一〇	うらたるきぬ	一六五ノ一〇		

髪	二〇六ノ二	紅梅の衣	一七二ノ二	白き綾	一〇四ノ五
唐綾の柳の御衣	二五五ノ二	濃き綾の御衣	二八ノ二	白き綾の衣	五七ノ二
唐衣「唐衣」を見よ		濃き紫の指貫	一七ノ八	白き御衣	一七ノ八
唐繪の革の帯	二〇〇ノ一	象眼重ねたる衣裳	二五ノ一	紫苑(襲の色目)	一六ノ一〇
狩衣「狩衣」を見よ		櫻(襲の色目)「櫻」を見よ	二九ノ八	紫苑の衣	二八四ノ二
着かた	二六三ノ三	櫻の汗衫	二九ノ八	生絹の單衣「單衣」を見よ	二六ノ三
黄朽葉(襲の色目)	一六ノ一〇	櫻の唐衣「唐衣」を見よ	二六ノ六	蘇芳襲	二六ノ三
公達の直衣裳	一〇四ノ三	櫻の直衣「直衣」を見よ	一五ノ三	蘇枋の織物の袷	一八ノ三
裙帶「裙帶」を見よ		指貫	二六ノ六	摺衣	四一ノ七
紅の御衣	二二三ノ六	同	二六ノ六	摺りたる袴	一四ノ二
同	二四ノ六	従者	六五ノ一	水干袴	一三九ノ五
黒き衣	二九ノ三	淑景舎	二八ノ三	隨身の長の狩衣	一四ノ一〇
黒牛臂	二三ノ三	襪	一三ノ六	背縫片よせて著たる	二九三ノ六
檢非違使の袴	一七四ノ六	下襲「下襲」を見よ	一〇ノ三	僧侶	一四〇ノ七
紅梅の固紋	二八ノ三	下襲の裾	一五ノ八	袖口	一五〇ノ七
紅梅の狩衣	一四四ノ三	同	五六ノ六	中宮	二八ノ三
紅梅の衣	三三ノ八	白重の汗衫			

中宮	三五〇二	單衣「單衣」を見よ	三五〇二	萌黄(襲の色目)	二八〇五
地摺の唐の羅	二五〇一	單衣襲	二五〇一	同	二九〇七
地摺の裳	一九〇二	日の装束「日の装束」を見よ	一九〇二	萌黄の固紋の御衣	二八〇三
童装束「つば装束」を見よ	一九〇一	平縦の御衣	一九〇一	萌黄の狩衣	二四〇三
主殿司	五九〇〇	領巾「領巾」を見よ	五九〇〇	裳、唐衣	一四〇二
宿直衣	九六〇四	二藍の直衣	九六〇四	紋	二八三〇
萎えたる	一七三〇	藤(襲の色目)	一七三〇	柳の下襲	二二〇八
萎えたる練色の衣	一七三〇	ほそなが	一七三〇	山吹(襲の色目)	一七〇二
直衣「直衣」を見よ	一七三〇	法服	一七三〇	綾のうへの袴	二二〇二
直衣、指貫の紫色	一九〇一	まひろげ姿	一九〇一	わきわけ	五八〇二
衲の袈裟	一四六〇	道隆	一四六〇	女の上衣	二八三〇
のけくび	二九三〇	同	二九三〇	〇普賢	二〇八〇
のしひとへ	二九四〇	道隆の室	二九四〇	〇普賢十願	二〇八〇
袴「袴」を見よ	二九四〇	無紋の御袈	二九四〇	〇ふさう雲	一七三〇
萩(襲の色目)	一六七〇	紫の袈裟	一六七〇	〇伏見の里	一七三〇
牛臂	一六三〇	紫の指貫	一六三〇	〇豊前(采女)	一七三〇
牛臂の緒	一六三〇	裳	一六三〇	〇二藍	二五〇二

織物	四三〇〇	〇文机	二二三〇	讀經「讀經」を見よ	二六〇三
さいで	三五〇九	〇佛眼眞言	一四八〇	念佛の同向	四〇〇二
指貫	四三〇三	〇佛事	二四三〇	八講	四〇〇七
同	二六〇七	一切經供養	二六〇七	同	二六〇二
下襲	二六〇三	御佛名「佛名」を見よ	二六〇三	同	二七〇一
直衣	四一〇七	祈願	四一〇七	初瀬詣	一四〇六
直衣、指貫	四〇〇三	季の御讀經	一七八〇	同	二八〇九
二藍などのもの	五〇〇三	同	二六〇九	同	二六〇九
〇舞蹈	一四〇五	經供養	一七九〇	御齋會	二六〇九
〇同	一〇五〇	經を習ふ	一七九〇	御修法	二六〇八
〇二貫(和琴)	二一〇四	孔雀經の御讀經	二六〇八	御嶽精進	一三六〇
〇藤	二一〇四	熾盛光の御修法	二六〇九	〇佛名	一三六〇
あてなるもの	五九〇七	正月	一四三〇	雨	一五〇二
しなひ長く色よき	四七〇八	説經に來る人	三九〇六	御装束の所の衆	一七八〇
松にかかりたる	一〇一八	千燈の御志	一四二〇	地獄繪の屏風	七八〇〇
〇淵は	一六〇三	千日の精進	一四二〇	宮の	二五〇二
〇藤原時柄	一六〇三	陀羅尼	二〇九八	〇筆	二五〇二

人の筆	三三ノ二	火	二七ノ七	下種女の子貢ひたる	一四ノ五
よき筆	二四ノ五	船人の言語	三三ノ三	下襲	二六ノ三
○不動尊	二〇八ノ二	帆あげたる	三三ノ六	霜	一ノ六
○船岡	三四ノ九	道	一九ノ二〇	炭櫃	一ノ八
○船		蓬庫	二七六ノ一	炭	一ノ七
海路	二七五ノ二	櫓	二七五ノ五	夏と冬と	七ノ二
航海する人	二七五ノ八	○文―篇	三五ノ五	灰	一ノ八
風疾に帆上げたる	一九ノ五	○文―「書簡」「消息」を見よ		火	一ノ七
械取	一七八ノ二〇	○「文は」	二〇八ノ八	晝	一ノ七
車を居う	一七〇ノ八	○文章―良否	二六ノ八	火桶	一ノ八
菰積みたる	一三〇ノ九	○文房具		火桶の火	二七〇ノ三
潮干の潟なる	一四八ノ五	頓著せざる	三三ノ二	冬の夜の戀	七ノ九
他船を見る	二七六ノ五	人の目とむ許りなる	三三ノ九	冬は	一ノ五
積荷	二七五ノ三	○冬		雪	一ノ六
乗りて行くまじき	二七六ノ八	曉	二七三ノ二	夜を居あかす	一九ノ三
遊艇	二七六ノ七	御佛名の夜	二七三ノ三	○瓜	一七五ノ四
早緒	二七六ノ二	かきまきりするもの	一八ノ八	○振播	七六ノ七

○布留の瀧	六ノ八	○法師―「僧侶」を見よ	二九ノ八	中宮行啓	二四三ノ八
○布留の社	三四ノ一	○法師陰陽師	二九ノ六	道隆清少の間答	二四八ノ二
○「ふるものは」	三六ノ二	○法師子	一七四ノ六	道隆、中宮に候す	二四八ノ五
○ふれあそび	二二ノ三	○「法師は」	三三ノ六	御階のものと造花	二四九ノ一
○陪従		○牡丹	一七〇ノ八	院内のしつらひ	二四三ノ八
試樂の日	一四ノ三	○ほうちほうたう	二九二ノ六	○菩薩	二五八ノ六
しなおくれたる	三三ノ八	○法輪	二〇八ノ三	○星	
○餅餅	一五ノ二	○鳳凰―桐	四八ノ三	七月七日	一三ノ二
○屏帳	二四ノ二	○法會―説經	三三ノ二	昂星	三六ノ三
○別當	一四ノ八	○牧馬(琵琶)	一一〇ノ四	牽牛	三六ノ三
○同	一四ノ八	○法華經	二〇八ノ六	明星	三六ノ三
○辨	五ノ三	○鉢	五九ノ三	長庚	三六ノ三
○變化の物	二〇ノ四	○ほこぼし	一七〇ノ六	流星	三六ノ三
		○法興院(二條の宮)	二四六ノ三	○「星は」	三八ノ二
		北の方、中宮に候す	二四六ノ三	○臍	二九四ノ三
		造花の木を抜く	二四六ノ二	○細冠者	二九ノ八
		活少車に乗り後る	二四九ノ四	○細大刀	一〇七ノ九

○細谷川 ほそこの	六七〇一	卯の花	四七〇二	○孟嘗君	一五七〇三
○廊	五九〇一	同	五九〇二	○申文	四〇一
○同	七四〇五	賀茂の奥	一六〇九	除目	二〇八〇九
○ほそなが	一五〇九	五月節句	五二〇八	博士の	二〇七〇七
○細長	二四〇二	忍ばぬ	五二〇九	○籬の鳥	二〇七〇七
○細櫃	一七三〇九	橋	四八〇三	○まかなひ	一九八〇七
○螢	一〇二	花橋	五二〇三	○巻染	五〇五
○同	五九〇九	祭の頃	五〇二	○同	一八二〇六
○佛	二八六〇二	六月	五九〇二	○蒔繪	三三〇一〇
御顔拜む	一六〇二	「鳥は」	四〇二	○秣	二八〇〇六
観音	二八六〇二	○頰	二九四〇一	○枕	二九四〇九
關白より勝る	一五〇四	○酸漿	二六〇二	○方弘	六四〇四
○佛の御國	三三〇二〇	○盆(子蘭盆)	二七〇七	なだいめん の事 人に笑はるる事	一三五〇三
○「佛は」	二〇八〇〇	○堀江の橋	六七〇六	○ますだの池	五〇一
○杜鵑	二二二〇六	○堀兼の井	一九二〇三	○ませこし	三三〇二
鶯	三三〇四			○松	
鶯との比較					

大なる	二六〇三	○祭		○待兼山	一五〇四
かきまさりするもの	一三八〇八	葵	六六〇二	○「舞は」	二〇〇三
藤のかくりたる	二〇二八	神樂の笛	一六五〇八	○舞人	一四八〇九
○待つ		かへさ	四七〇一〇	狛犬しく舞ふ者	一六六〇五
必ず來べき人を	二四〇四	同	五二〇九	少將といひける人	二六四〇二
車	一八二〇八	同	二二〇三	八幡の臨時祭の試樂	一〇五〇四
戀人	二四〇二〇	同	二二〇一	○舞姫	
修驗者	二八〇三	賀茂祭の頃	四〇二二	五節	二〇七〇五
人を待ち明して	二二五〇五	四月	四〇二二	服裝	二〇五〇七
人を待つ夜	三三〇六	使	三三〇四	○まひろげ姿	二九〇一
夜の明くるを待つ	一八三〇四	御神樂	五二〇一	○萬葉集	六九〇五
呼びし人の來ぬ	二二六〇二	宮のほとりの	一九〇七	○まめ人	七六〇六
○松が浦島	二〇七〇九	見る	一四九〇九	○檀	五二〇二
○松君	一三〇〇九	物見車の競争	二四〇五	○客人「客」を見よ	
○同	二五八〇八	八幡の臨時祭の還立の事	一六〇八	○丸屋	三三〇六
○松尾	二二二〇九	臨時の祭	五二〇一	○鞠	二〇〇一
○松蟲	五九〇九	臨時の祭の舞人	一〇五〇四		

○ 荆三稜	六八〇	○ 御匣殿	六八〇	○ 密盗人	一四七〇
○ 御形の宣旨一人形	一六〇二	○ 三稜草	六八〇	○ 御禊	一四七〇
○ 御格子まゐる	二四七五	○ 同	六九〇七	○ みそひめ	一六三〇
○ 御格子もまゐらす	一七〇二〇	○ 美久理の社	三四〇二	○ 美	五二八〇
○ 御神樂「神樂」を見よ	一七〇二〇	○ 「見ぐるしきもの」	二九〇五	○ 御嶽	六〇五
○ 三笠山	一四〇三	○ 御梳櫛	一三〇七	○ 御嶽詣	五三〇八
○ 帝一老人	三三〇三	○ 御輿	六〇九	○ 同	一三九〇
○ 養の原	一五〇〇	○ 同	一四九〇	○ 道方	七九〇
○ 御厠人	二二〇八	○ 神輿宿	二二〇二	○ 道隆(關白殿)	二四三〇
○ 同	三三〇	○ 同	二五〇三	經供養	一九〇八
○ 水草	一九〇二	○ 御齋會	二六九〇	しほのみつの歌	二七〇〇
○ 御匣殿	八四〇五	○ 「山陵は」	一六〇〇	中宮に参る	四一〇七
○ 同	三三〇三	○ みじかききぬ	一四〇二〇	入講聽聞の事	二九〇二
○ 同	二四〇三	○ 「短くてありぬべきもの」	二七〇二	服装	二四〇五
○ 同	二五〇〇	○ 御節供	九八〇六	同	二四〇五
				御使に祿を出す	二四〇三
				威勢	一五〇五

○ 道隆の室	二四六〇	○ 水うみ	一六〇八	○ 「見ならひするもの」	二七四〇
中宮に候す	二四六〇	○ 御厨子	一六〇一	○ 「峯は」	一五〇七
服装	二二〇九	○ 御厨子所	六四〇五	○ 美濃の御山	一五〇五
○ 道長(宮の大夫)	一五〇二	○ 水鳥	五〇七九	○ 養蟲	五六〇〇
○ 檀紙	三三〇二	○ 水鳥	四九〇七	秋	五六〇〇
白く清げなる	三三〇二	○ 水なしの池	四九〇六	いとあはれなり	五六〇九
同	二四〇三	○ 御綱助	二二〇一	鬼	五六〇九
清少の慰辭	二四〇三	○ みつはしの渡	一六〇〇	○ 御太刀	一五〇二
疊紙	四六〇六	○ みつばよつば	五三〇五	○ 御簾	一〇三〇
○ 陸奥國	一四〇三	○ 水ぶき	一七三〇	○ 三保が崎	二六三〇
○ 御帳	一〇三〇	○ 同	一七三〇	○ 任那成行	一五〇二
○ 同	三三〇三	○ 醫	二六〇二	○ 耳敏川	六六〇二
○ 同	三三〇三	○ 御讀經	一七〇七	○ 耳とき人	三三〇三
○ 水	五七〇五	○ 水無瀬川	六六〇二	○ みく草	一五〇五
蠟	二二〇八	○ 南面	一三〇五	○ 耳無山	一五〇四
水晶の破れたる様に	二二〇八	○ 南院(道隆の家)	二五〇四	○ 命婦のおもと	一〇〇七
物に入る透影	一七〇九				

○命婦の乳母	二二〇六	○「見るものは」	二二〇二
○宮城野	二〇九七	○彌勒	二〇八〇
○都	六九七	○三輪の山	一五〇四
○都鳥	五〇八	○身をかへたらん人などはかくや あらんと見ゆるもの	三三〇一
○御息所	一〇五五		
○宮司	二四九八		
○宮仕、宮仕人			
○愛情	三三〇八		
○あぢきなきもの	七〇二〇		
○兄の家	一四九〇		
○有り難き	二四〇五		
○遊興	一九九〇		
○一品の宮	三三〇二		
○御前近く召さる	二四二二		
○親	一九〇八		
○君々の賛辭	二七〇三		
○懷妊	一四八二		
○情人の訪問	一九〇七		
○談話の對手	二七〇五		
○宮仕人の里	一九〇八		
○わろきことに思ふ男	三三〇〇		
○遠慮なき家	一九〇〇		
○男に物食はず	二八〇四		
○「宮仕所は」	三三〇〇		
○宮の大夫(道長)	一五〇三		
○宮の中將(源頼定)	二八〇四		
○宮のめ一言語	三三〇三		
○みやはじめの作法	二〇三六		
○深山木	五〇一		
○行幸「行幸」を見よ	三三〇一		
○「見るにことなることなき物の文 字にかきてことごとくしきもの」	一七〇九		
○みるめの關	二八〇三		
○「昔おぼえてふようなるもの」	一九〇八		
○昔の御行	一五〇二		
○蜈蚣	一八〇八		
○椋—落葉	二〇五五		
○葎	一四〇三		
○驅籠	一三〇三		
○塔	一三〇三		
○選ばれたる	二〇三二		
○思ふさまならぬ	七〇一		

○通はぬ	二四〇七	○柳蟲	二二〇八	○「蟲は」	五〇八
○于なき	二六〇二	○鈴蟲	五〇九	○無心	二五〇四
○参内	三〇五	○蝶	五〇九	○むつかし	六九〇二
○住まぬ家の舅	三三〇八	○夏蟲	五〇四	○むつかしう	二四二二
○住まぬ婿の出世	三三〇九	○蜘蛛	三三〇一	○「むつかしげなるもの」	一七〇三
○時に逢ひたる人の	三三〇九	○叩頭蟲	五〇二	○むとく	二四八〇
○無情	三三〇二	○促織	三三〇一	○「むとくなるもの」	一四八〇
○夜がれがちなる	一九〇三	○蠅	五〇二	○「むれつふるもの」	一七〇八
○忘れにし人	三三〇三	○蜂	五〇九	○馬	三三〇一
○無期	二二〇〇	○蜂	五〇九	○蟻通の明神	三三〇一
○蟲		○松蟲	五〇九	○大なる	二二〇三
○秋	一〇五	○蠶	五〇九	○毛色	三三〇一
○蟻「蟻」を見よ		○蠶「蠶」を見よ		○馬ぞひ	一四九〇
○蚊「蚊」を見よ		○松蟲「松蟲」を見よ		○馬	二六〇八
○寄居蟲	二八〇五	○蜈蚣	一八〇八	○馬の命婦	一〇〇八
○蛙	一九〇二	○われから	五〇九	○馬場	二二〇三
○蟋蟀「蟋蟀」を見よ		○むしくひ	五〇三	○「むまやば」	三三〇五

○馬長 七六ノ七	○紫野 二〇九ノ七	○頼頼の藤 二九ノ八
○無名(琵琶) 一〇九ノ四	○村雨 七八ノ七	○木工丸 三二ノ二
○同 二〇ノ四	○馬道 二二ノ一	○もたいな 二八ノ四
○無紋 二六ノ七	○「めでたきもの」 二〇ノ七	○喪中 一八三ノ六
○むしれ木(物語) 二〇九ノ三	○乳母 二四ノ八	○望月の節供 三三ノ二
○村上院 一六ノ三	○内、東宮の乳母 一八ノ三	○望月の驛 三四ノ六
雪月花の條 二〇ノ七	○御乳母の服装 二二ノ二	○元結よる 一七四ノ九
宣耀殿の女御 二〇ノ七	住まぬ婿を呪ふ 三三ノ一〇	○求子(舞) 二〇ノ四
○村濃「染色、模様」を見よ 五〇ノ二	乳の出ぬ 二七ノ三	○物あはせ 二〇四ノ七
○紫(染色)「染色、模様」を見よ 一〇三ノ九	夜泣する兒 一七八ノ二	○物忌 二〇四ノ七
糸 一〇三ノ九	○萌黄「染色、模様」を見よ 一〇四ノ二	こもる 一五ノ二
紙 一〇三ノ九	○朝額 一九〇ノ二	三月頃 二七ノ四
花 一〇三ノ九	○同 一九〇ノ二	さるがふ男 一六三ノ三
六位の宿直姿 一〇三ノ一〇		書簡 二四ノ三
○紫野 五七ノ一〇		つく(標を) 五〇ノ二
		徒然 二五ノ八
		所さりたる 一六三ノ三

村上帝 二〇ノ三	行幸の車 二八ノ二	強くさせ 一九ノ三
○物羨み 二九ノ一	車の色々 二八ノ三	番人 一九三ノ二
○物語 一九九ノ四	車の歸り騒ぐ 三九ノ二	○紋 二八三ノ二〇
口に任せて言ひたる事 二六ノ九	車を立つる 二八ノ九	○文集 二〇八ノ九
作者 二六ノ九	車服の悪き 二八ノ三	○文章博士 一七二ノ一〇
まだ見ぬ 二九ノ四	白き管見つけたる 一八ノ二	○文珠 二〇八ノ三
○「物語は」 二〇九ノ一	他の車を逐ふ 二九ノ五	○文選 二〇八ノ九
○「物のあはれ知らせがほなるもの」 九〇ノ三	納涼 二五ノ二〇	○「紋は」 二八三ノ九
○物怪 二九ノ三	人の顔見知らぬ 二七ノ二	○文盲 二八ノ一
うつすべき人 二九ノ三	待つ間 一八ノ一〇	○桃 四ノ六
○物見車 二九ノ三	○物見車 一四ノ九	○桃の木切る 一七二ノ一〇
○「裳は」 二五ノ一	○「裳は」 二八三ノ三	○母屋 七六ノ一
○模倣 二八ノ二	○模倣 二七四ノ二	○同 九六ノ六
○紅葉 二九ノ二	○紅葉 五二ノ二	○同 二〇六ノ一
○門 二九ノ二	○門 五二ノ二	○同 二九ノ一
○物見 二九ノ一	家の門 六ノ九	○「森は」 一三三ノ三
かへさ 二九ノ一	于定國 七ノ八	○唐土 一三三ノ三

鳳凰	四八ノ二	○「やどりの司の権の守は」	一九ノ五	○山里	かきまきりするもの	一三八ノ八
梨花	四八ノ六	○柳管	一〇八ノ二	五月頃の景	雪	二五ノ四
○唐土の帝	三五ノ三	○柳	四ノ六	○山菅の橋	○山菅の橋	三九ノ二
○諸寄の濱	二〇七ノ二	○同	五ノ一〇	○山菅の橋	○山菅の橋	六九ノ二
		○「屋は」	二七ノ五	○山路	○山路	一三八ノ八
		○八幡	二六ノ九	○山鳥一鏡	○山鳥一鏡	五四ノ三
○矢	五九ノ三	○八幡行幸(一條院)	一四九ノ五	○山梨の木	○山梨の木	五ノ二
○楊器	一九ノ三	○八重葎	六九ノ二	○やまの驛	○やまの驛	三四ノ六
○楊貴妃	四八ノ八	○山	三八ノ七	○山の井	○山の井	一九ノ二
○やうしたる	一〇五ノ九	○山	一ノ一	○山井の大納言(道頼)	いとよくおぼす	一三ノ七
○やくがひ	一六ノ四	○山	五ノ八	○山は	○山は	二五ノ二
○薬師佛	二〇八ノ三	○山	三二ノ一	○病「疾病」を見よ	○病「疾病」を見よ	一四ノ二
○焼けたる所	一七三ノ六	○山	七ノ九	○「やまひは」	○「やまひは」	二八ノ六
○社「神社」を見よ	二七三ノ六	○山	一五ノ一			
○「社は」	三四ノ二〇	○山	二八ノ二			
○八十島	二〇七ノ九	○山	七ノ九			
○やどり木	五ノ三	○同	一五ノ一			

○山吹	二六ノ二	薄雪	一九ノ三	紫の指貫	二三ノ九
花辨に歌をかく	二六ノ二	梅の花	五ノ七	物語	一九ノ三
花辨の大なる	二六ノ三	音信	二六ノ九	楊器に盛る	一九ノ三
繪にかきて劣るもの	二八ノ六	御佛名の長	二七ノ二	山里	一三ノ二
○楊梅	一七ノ二	香爐峰の雪の條	二七ノ八	○ゆきあひの橋	六ノ六
○山間	六九ノ二	挿頭の花にかゝる	二二ノ三	○行「成」行成を見よ	
○閣	七ノ九	瓦の目毎に入る	三三ノ四	○雪山	九三ノ二
知らぬ所	七ノ九	通ふ人	二六ノ七	○靱負佐(渾名)	三三ノ七
夏	一ノ三	下衆の家	五ノ三	○靱負佐	
○遺戸	二九ノ二〇	残月に映す	二七ノ四	狩衣すがた	二五ノ五
○同	二七ノ五	雪月花	一九ノ三	○夜行	五八ノ四
○同	三三ノ二	中宮、清少を召し給ふ	一九ノ二	○弓長	二二ノ六
		寺籠	一四ノ五	○油單	一三ノ五
		宿直姿	二二ノ八	○櫛	五ノ六
		光	一五ノ五	○ゆづるはの峯	一五ノ八
		檜皮葺	二八ノ三	○「湯は」	一三ノ二
		冬	一ノ六	○夕顔	七ノ四

○夕暮	一ノ三	○容貌風采	二四ノ二	晝寝起きて見交す顔	二四ノ一
秋		色黒き人の生絹單	二四ノ二	瓜にかきたる兒の顔	一七五ノ四
川竹	二五ノ二	牛飼	三三ノ二	醜き顔	三三ノ二
旅より家の主の歸る	三九ノ九	面相よき人	二六九ノ五	物語中の男女の繪	二三八ノ六
讀經	三〇九ノ二	貴公子	三七ノ四	養子の顔	七〇ノ三
人の來集	三三九ノ八	小舎人	三七ノ五	女の寝起	六〇ノ三
○夕涼—音楽	二五ノ三	雑色隨身	三七ノ三	○よこばしりの關	三三ノ三
○夕日—秋	一ノ三	説經師	三七ノ七	○横笛	
○夕日の里	六七ノ〇	中宮	二〇ノ二	曉に見つけたる	二二ノ四
○弓		特に美なる所	二八ノ二	宇多法師	二〇ノ五
漣口	三三ノ三	夏の晝寝起	二九ノ三	釘打	二〇ノ五
舎人の	二七	寐くたれの朝顔	二四八ノ一	携帯	二二ノ二
眞弓	二七ノ四	博士の顔	一〇三ノ三	小水龍	二〇ノ五
してありく	五九ノ三	花婿	三七	水龍	二〇ノ五
○夢—夢合	三三九ノ六	人の貌	三九ノ一	音の遠近	二二ノ一
○萬木の森	五四ノ三			葉二	二〇ノ五

文のやう	二二ノ五	庚申の夜	二二ノ四	夜を居あかす	一九四ノ三
○興謝の海	一六ノ八	五月雨の夜	五ノ三	○夜のおとど	七九ノ二
○義懐中納言	四ノ三	忍びやかなる笑	三〇七ノ五	○よるこび奏す	一四ノ四
○よしなよしなの關	一三ノ三	深夜の園基	二〇七ノ三	○夜折	一七八ノ六
○吉野川	六〇ノ三	兒	五ノ三	○夜居の僧	一四七ノ三
○淀の波	一三七ノ八	時奏す	二六三ノ七	○同	一五ノ二
○流—星	三三ノ三	泣く兒	三三ノ五	○雷	
○蓬		なくもの	五ノ三	雷鳴の陣	二六九ノ一〇
いとをかし	六八ノ九	同	三三ノ五	「名おそろしきもの」	一七七ノ五
香	二五ノ八	夏	一ノ二	夜鳴る	二三五ノ三
五月節句	五〇ノ四	寝起きて飲む水	三六ノ五		
高く生ひたる庭	一四〇ノ三	晝と夜と	七三ノ二		
○夜—「月」参照		笛の聲	二六三ノ二		
明くるを待つ間	一八三ノ四	冬の夜	七三ノ九		
鶯	五ノ二	待つ夜	三三ノ六		
同	三三ノ四	短夜の戀	七三ノ六		
音楽	二二ノ一	夜の鳥	七三ノ四		

○老人	好色	一五〇ノ三	隆圓(僧都の君)	〇龍膽	六九ノ二
乞兒	一四六ノ五	行成の文を懇望す	〇旅行	海路	二七六ノ八
兒童	二五九ノ六	笙の笛を懇望す	陸路	陸路	二七六ノ九
椎	五八ノ三	服裝	〇禮儀作法	詞遣ひ	三三ノ九
寢惑ひ	五八ノ三	〇律師	無作法	無作法	二八ノ三
人になづらるるもの	二七〇ノ七	〇立紋	同	無遠慮	一三三ノ三
無作法	二八ノ五	〇臨時祭	〇冷泉院	〇れいたう	一四ノ二四
髻になちたる	一四八ノ七	榊	〇例の思ふ人	〇例の君	一五ノ二二
老女と梅	五八ノ三	試樂	〇六親音	〇六位	一九ノ三
老女と若き男	五八ノ二	使	頭白き	宿直姿	一〇五ノ四
老女の妊娠	五八ノ一	使の服裝	〇六位藏人	〇六位藏人	二六八ノ三
若きと老いたると	七二ノ二	調樂	〇露臺	〇皇子	一〇三ノ二
女親	二二ノ八	見るものは	〇黄鐘調	〇和歌	二二〇ノ二
〇禮盤	二四ノ八	八幡	〇和歌	暗記	二四〇ノ四
〇落躰	二二〇ノ六	横笛	〇和歌	鶯	五五ノ五
〇羅文十蜘蛛の集	一五ノ九		〇和歌	歌の題は	六九ノ六

曉の出入	四五ノ五	短夜	七六ノ六	杜鵑	一八三ノ六
曉の別	三ノ二	名聞の爲に通ふ	二六六ノ二	節折	一七八ノ六
雨の日に來る人	二六五ノ七	雪に通ひ來る人	二七〇ノ七	〇六親音	二〇八ノ二
有明の月	二八八ノ七	忘れし戀	七三ノ三	〇六位	一九ノ三
ありがたきもの	七四ノ三	〇縁衫	二六七ノ〇	宿直姿	一〇五ノ四
恨み言	四七ノ一	〇ろうの長	一七〇ノ六	〇六位藏人	二六八ノ三
風の夜に通ひ來る人	二七〇ノ六	〇縁一暗誦す	二九〇ノ七	〇皇子	一〇三ノ二
交野少將と落躰少將	二六七ノ四	〇縁	二六ノ八	〇黄鐘調	二二〇ノ二
樟	五三ノ四	〇同	九三ノ二	〇和歌	二四〇ノ四
後朝の消息	二八九ノ二	〇同	九七ノ三	暗記	二四〇ノ四
戀する人の例	五三ノ三	〇同	九七ノ一	鶯	五五ノ五
忍びて通ふ局	七四ノ九	〇同	一三二ノ〇	歌の題は	六九ノ六
せかるゝ戀	二二九ノ二	〇同	一三〇ノ一〇		
月の夜に來る人	二六六ノ七	〇同	二四ノ八		
獨住する人	二八九ノ二	〇六月			
冬の夜	七三ノ九				
待つ夜	三五ノ六				

「歌は」	二六〇ノ四	いかにして(中宮)	二七二ノ二	雲のうへに(清少)	二七二ノ三
歌よむ	一三三ノ九	いはで思ふぞ(古今六帖)	二六九ノ一	今日來ん人を	一九五ノ九
集は	六九ノ四	いはどいはなん(後撰)	二四七ノ一	こゝろにのみ(清少)	九五ノ一
題	二六ノ八	山田(貫之)	二四八ノ七	これをだに(一條院)	一六二ノ二
返歌	一八三ノ一	いよ／＼見まく(伊勢物語)		さかしらに(清少)	二七二ノ七
褒めらるる歌	七六ノ三	うすきこそ(清少)	二七六ノ二	早苗とりしか(古今)	二四七ノ七
よく詠む	一八〇ノ七	うす氷(清少)	二〇二ノ五	狭山が池のみくりこそ(古今六帖)	四九ノ二
○若きと老いたると	七三ノ二	うらやまし(常陸介)	九五ノ九	下ゆく水の	七三ノ六
○和歌俗語		おふの水草	四六ノ三	下敷こそ(中宮)	二二三ノ三
あかれさす(中宮)	一一二ノ七	おしひだに(清少)	二八二ノ三	しほのみつ	一九九ノ九
秋にはあへず(貫之)	二五三ノ一	かけまくも(清少)	二四三ノ四	すこし春ある	一四一ノ一
あしびきの(實方)	一〇六ノ四	霞の間より(古今)	一三〇ノ五	その人の(清少)	二四四ノ三
跡の白浪(沙彌滿誓)	二七六ノ八	かづきする(清少)	八九ノ五	そらさむみ(清少)	一三四ノ七
逢坂は(清少)	二六二ノ一〇	賀茂の社のゆふだすき(古今)	二二九ノ九	高瀬の淀(引歌)	一三七ノ一〇
雨ならぬ名(清少)	三三〇ノ八	くづれよる(清少)	八九ノ三	薪ころ(小野殿の母)	二七二ノ二
有明の月の(拾遺)	二八八ノ八			七夕つめに(業平)	六七ノ三
いかにして(中宮)	二〇三ノ二				

千枝にわかれて(古今六帖)	五三ノ三	杜鵑尋ねて(清少)	一三三ノ五	わたつ海に(道命阿闍梨)	二七〇ノ八
千賀の鹽蔵	二五九ノ五	杜鵑なく音(藤侍従)	一三〇ノ二	わたつみの(兵衛藏人)	一九九ノ九
誓へ君(清少)	二八三ノ七	ほととぎすよ(俗語)	二三四ノ一	わらはへの(童語)	二八二ノ三
つかさまされと(俗語)	一〇八ノ四	三笠山(中宮)	三三〇ノ四	我よりさきに(新拾遺)	二四八ノ三
月も日も(萬葉集)	一八〇ノ四	道もなし(拾遺)	一九九ノ三	男山の峰の(俗語)	九三ノ三
つめどなほ(清少)	一五三ノ七	みつ葉よつばに殿造(古今集)	五三ノ五	姥捨山(古今)	二四二ノ八
年経れば(古今)	一九三ノ三	水増す雨の(古今)	二六八ノ八	なりもてぞ見る	七二ノ五
遠江の浪やなき	六〇ノ九	皆人は(中宮)	三三三ノ三	○若菜	二一四
なかだかわらはおひ(俗語)	三三三ノ三	峯に別る(古今)	二五二ノ一	○同	一五三ノ三
中なるなとめ(宇津保)	九〇ノ九	みまくさを(清少)	二八〇ノ一〇	○和歌の浦	二〇八ノ一
泣きて別れし(拾遺)	二四六ノ九	みもひも寒し(催馬樂)	一九三ノ一	○わきあげ	五八ノ二
七曲に(蟻通明神)	三三七ノ三	もとすけが(中宮)	三三三ノ三	○和琴「音楽、樂器」参照	一〇九ノ四
れくたれ髪を(人丸)	四九ノ二	もとめても(清少)	四〇ノ四	○わすれ山	一四二ノ三
花の衣	一六〇ノ七	山近き(中宮)	二七三ノ九	○綿ぎぬ「夏とほしたる	二〇四ノ三
ふりにこそふれ(拾遺)	二四七ノ二	山とよむ(齋院)	九七ノ一	○渡殿	一三三ノ三
		夜は誰と寐ん(俗語)	九三ノ三	○同	一三三ノ四
				○同	二五二ノ二

○男は張養	一八六ノ二
○小野殿の母	二七〇ノ二〇
○小野の浮橋	二七〇ノ七
○小野宮	一七〇ノ三
○姨捨山	一五〇ノ五
○尾張人の種	三三〇ノ二
○女郎花	六九ノ二〇
○同	二〇五ノ八
○小忌の公達	一〇五ノ三
○小忌の女房	二五〇ノ二
○女	
あはくしき	二七〇ノ七
蟹	二七〇ノ二
疑深き男に思はれたる	一七九ノ三
上衣	二八二ノ二
幸福	二〇四ノ三
風の朝	二〇五ノ二

かづらしたる	二九三ノ九
かどなからぬ	三三八ノ五
上達部の女、后となる	二〇四ノ三
賀茂の道の傍なる	三三〇ノ二
火光に文を讀む	二六九ノ五
教育	二〇ノ九
下種に寝めらるゝ	二七八ノ七
下種の家の主	三三〇ノ二
下司の名	六四ノ八
下種女	二七八ノ六
下種女の髪	二七〇ノ三
子生まぬ	一一六ノ二
聲	二二七ノ三
齒痛	二八四ノ七
嫉妬	五八ノ二
嫉妬して家出したる	一四八ノ七
自慢	一五〇ノ二

装束	二八四ノ一
拗ねたる	一一三ノ九
受領の北の方	二〇四ノ二
僧侶	六〇ノ三
同	二〇四ノ六
男女の中	一九二ノ二〇
兒買ひたる下種女	一四六ノ六
兒の祈、祓する	二二〇ノ五
主殿司	五九ノ二〇
内侍	二二〇ノ九
掌侍	二二〇ノ九
典侍 <small>ないしのり</small>	二二〇ノ九
長病	一七六ノ三
情ある	三三〇ノ二
妊娠	五八ノ一
寢起	三三ノ四
寢たる有様	四五ノ八

單衣	二六二ノ一
獨棲む家	一五三ノ三
鄙の女	二七〇ノ二
服装	一三九ノ二
郭公を歌ふ田舎女	二四〇ノ二
宮仕	三三〇ノ七
容貌風采	六〇ノ二
老婦	五八ノ一
男	二四〇ノ一〇
○女あるじ	三三〇ノ二
○「女のうはぎは」	二八二ノ二
○「女は」	三三〇ノ八
○女繪	三六ノ一
○折櫃	九九ノ三

枕草紙索引終	
--------	--

○阿彌陀の像	三〇三ノ二
○安元三年一火災	三〇九ノ八
○雨一曉	二九八ノ四
○あらしぬ世	三二二ノ四
○泡	三〇八ノ六
○勢ある者	二九七ノ七
○衣冠布衣	三〇七ノ八
○石山	三二一ノ九
○衣食	三二二ノ三
○一期の樂	三二四ノ九
○一期の月影	三二五ノ二
○粟津の原	三二二ノ三
○粟一金	三二二ノ三
○跡の白波	三二二ノ三
○價一家	三二二ノ三
○足の乗物	三二二ノ三
○阿字	三二二ノ三
○麻のふすま	三二二ノ三
○朝顔の露	三二二ノ三
○秋一外山の庵	三二二ノ三
○白地	三二二ノ三
○曉の雨	三二二ノ三
○閑伽棚	三二二ノ三

方丈記索引

語句の配列順は總て
歴史的假名遣に據る

○憐	三〇三ノ二	○一條	三〇四ノ一〇
○阿彌陀の像	三〇九ノ八	○命	三二四ノ一〇
○安元三年一火災	二九八ノ四	命をつぐ	三二五ノ一
○雨一曉	三二二ノ四	天運にまかす	三二五ノ一
○あらしぬ世	三〇八ノ六	餘算	三二二ノ七
○泡	二九七ノ七	いはなし	三二二ノ七
○勢ある者	三〇七ノ八	○庵	三二二ノ三
○衣冠布衣	三二一ノ九	○岩間	三二二ノ三
○石山	三二二ノ三	○衣服「服装」を見よ	
○衣食	三二四ノ九	○家、住居「庵」参照	
○一期の樂	三二五ノ二	あだなる様	三〇三ノ二
○一期の月影	三二五ノ二	價	三〇三ノ二
○粟津の原	三二二ノ三	庵を愛す	三二二ノ三
○粟一金	三二二ノ三	假の庵	三二二ノ一
○跡の白波	三二二ノ三		
○價一家	三二二ノ三		
○足の乗物	三二二ノ三		
○阿字	三二二ノ三		
○麻のふすま	三二二ノ三		
○朝顔の露	三二二ノ三		
○秋一外山の庵	三二二ノ三		
○白地	三二二ノ三		
○曉の雨	三二二ノ三		
○閑伽棚	三二二ノ三		

京中の家 二九ノ三	邊地 三〇七ノ八	身 三二五ノ二
権門の傍 三〇七ノ一	都 二九七ノ三	○牛車 三〇〇ノ三
心と一つの庵 三〇八ノ三	我身のために造る 居屋 三三三ノ七	○うたかた 二九七ノ一
毀たれて淀川に浮び 三〇〇ノ二	○庵「家」「長明」参照 三〇八ノ三	○うたくれの枕 三二五ノ三
毀ちて市に賣る 三〇三ノ九	大原山の庵 三〇八ノ三	○うちおほひ 三〇九ノ三
さびしき住居 三二五ノ五	假の庵の有様 三二〇ノ三	○うつせみの世 三二〇ノ八
浄名居士の跡 三二六ノ三	假の庵の長閑さ 三二二ノ九	○埋火 三二二ノ六
住家を造る習 三二五ノ五	外山の庵「外山の庵」を見よ 三二九ノ七	○海―地震 三〇五ノ五
末葉のやどり 三〇八ノ二	方丈の庵内部の設備 三二九ノ七	○恨 三二五ノ一
狭き地に居る 三〇七ノ七	方丈の庵の結構 三二九ノ二	○愁 三二五ノ一
作れる家は少なし 三〇二ノ六	○今の京 三〇二ノ二	樂 三二五ノ五
土居 三〇九ノ三	○依頼 三〇七ノ一〇	民の愁 三〇二ノ二
同 三二二ノ〇	○浮雲 三〇一ノ七	○魚―水 三二五ノ七
人 二九七ノ二	おほひ	○疫病―養和年間 三〇三ノ三
一間の庵 三二五ノ五		
檜皮葺 二九九ノ九		
富家の隣 三〇七ノ五		

オ

○老の寢覺 三二二ノ六	○香―死人 三〇三ノ七
○恐 三二二ノ二	○がうな(蟲) 三二二ノ二
白波の恐 三〇八ノ六	○垣 二九八ノ八
妻 三〇七ノ九	風 三二〇ノ二
通世 三二五ノ一	姫垣 三〇九ノ四
○大原山 三〇八ノ二〇	○かけがれ 三二二ノ二
○大原山の庵 三〇八ノ三	○笠取 三二二ノ二
○恩 三二二ノ二	○風 三〇二ノ四
○恩愛 三〇四ノ三	鹽風 二九七ノ二
飢饉 三〇四ノ五	地獄の業風 二九七ノ五
人なほこくむ 三〇七ノ二〇	治承四年 三〇八ノ五
○親子 三〇六ノ三	長明の庵 二九七ノ五
飢饉 三〇六ノ三	辻風 三〇六ノ七
子のかなしみ 三〇六ノ三	常に害なす 三二二ノ五
	○かせぎ 三二二ノ五

カ

○桂 三二二ノ一	○乞食―「乞食」を見よ 三二四ノ一〇
○糧 三二四ノ一〇	○門―門「を見よ 三〇八ノ二
○悲 三〇六ノ三	子のかなしみ 三〇六ノ三
	歎ある時 三〇七ノ三
	○川―地震 三〇五ノ四
	○皮籠 三〇八ノ一〇
	○河原 三〇四ノ二
	餓死者 三〇三ノ八
	死人 三〇三ノ八
	○蠶 三〇八ノ二
	○閑居の氣味 三二五ノ八
	○閑寂 三二五ノ二
	○假の庵 三二〇ノ三
	○同 三二二ノ九

○假の庵 三三〇一	○假の宿 二九七〇八	○狩人の一夜の宿 三〇八〇二	○假屋 二九八〇七	○家屋「家、住居」を見よ	キ	○宮殿樓閣 三五〇四	○牛馬七珍 三五〇四	○飢饉 三五〇三	○恩愛 三〇四〇三	○親子 三〇四〇七	○祈禱 三〇三〇九	○乞食 三〇三〇一	○寶物 三〇三〇二	○頼む方なき人 三〇三〇九	○長承三年 三〇五〇二
○養和年間 三〇三〇五	○祈禱—飢饉 三〇三〇九	○金—粟 三〇三〇三	○禁成 三〇三〇二	○狂 三〇三〇二	○京極 三〇三〇二	○京都—「都」参照 三〇三〇四	○京の習 三〇三〇一〇	ク	○陸—地震 三〇三〇五	○口業 三〇三〇二	○叢の燈 三〇三〇三	○九條 三〇三〇一	○車 三〇三〇三	○車やどり 三〇三〇五	○火災—「火」参照 三〇三〇五
安元三年 二九八〇四	狭き地の家 三〇七〇七	たびくの炎上 三〇三〇三	○管絃 三〇九〇一〇	○官人 三〇〇〇八	○観念のたより 三〇〇〇六	○官位 三〇〇〇九	ケ	○結縁 三〇四〇九	○源都督の流れ 三〇三〇二	○元暦二年—地震 三〇三〇四	コ	○子 三〇三〇三	子のかなしみ 三〇三〇三	死せる母の乳房 三〇四〇七	

○五穀 三〇三〇七	○心 三〇七〇一〇	○恩愛につかばる 三〇八〇七	○心を悩ます 三〇三〇三	○同 三〇三〇四	○心を養ふ 三〇三〇二	○三界 三〇三〇四	○濁 三〇三〇二	○濁にしむ 三〇三〇三	○妄心 三〇三〇五	○身 三〇三〇一	○同 三〇三〇四	○もし安からば 三〇三〇四	○慰藉 三〇三〇一〇	○乞食 三〇三〇一	○飢饉 三〇三〇一
都	○箏 三〇三〇二	○木丸殿 三〇三〇二	○木の實 三〇三〇二	○同 三〇三〇三	○木幡山 三〇三〇一〇	○駒 三〇三〇六	○小童 三〇三〇五	サ	○罪業 三〇三〇七	○妻子眷屬 三〇三〇六	○罪障 三〇三〇八	○財寶馬牛 三〇三〇七	○嵯峨天皇—冥都 三〇三〇五	○櫻 三〇三〇二	○障 三〇三〇三
○三界—心 三〇三〇四	○三途の關 三〇三〇一〇	○猿の聲 三〇三〇三	○猿丸太夫が墓 三〇三〇一	シ	○死、死者 三〇三〇一	○壓死 三〇三〇四	○餓死 三〇三〇九	結縁 三〇三〇三	志深き者 三〇三〇三	○焼死 三〇三〇二	○取り捨つるわざ 三〇三〇六	○秋風の樂 三〇三〇二	○周梨樂特が行 三〇三〇四	○四大種 三〇三〇七	○絲竹花月 三〇三〇一

○賤	三三〇ノ九	貧富	三〇七ノ九	往生要集	三〇九ノ〇
○七珍萬寶	二六ノ三	世のありにくきこと	三〇六ノ二	和歌	三〇九ノ〇
○死首	三〇四ノ九	世を知る	三三三ノ四	○所領	三〇一ノ一
○柴の庵	三二一ノ五	世を遁る	三五ノ一	○白河—餓死者	三〇四ノ三
○執	三〇八ノ九	○進退	三〇七ノ四	○白波の恐	三〇八ノ六
○同	三三三ノ二	○親昵朋友	三三三ノ六	○白銀黄金の箔	三〇三ノ二
○人生	三三五ノ二	○薄陽の江	三二一ノ一		
一期のたのしみ	三三五ノ二	○障子	三〇九ノ九		
今の世の中	三三三ノ四	○賞罰	三三三ノ二		
假の宿	二七ノ八	○浄名居士の跡	三三六ノ三	○姿を恥づる悔	三三三ノ〇
心なやますこと	三〇七ノ一	○庄園	三〇一ノ一	○朱雀門—火災	二九八ノ五
山林に入る	三三六ノ二	○主君	三〇〇ノ九	○朱雀	三〇四ノ二
生涯の望	三三五ノ三	○主君師匠	三三三ノ六	○雀	三〇七ノ四
處世の難	三〇七ノ〇	○勝地	三二一ノ〇	○崇徳院の御代—飢饉	三三三ノ一
住所の煩ひ	三〇七ノ三	○諸國七道	三五ノ一	○簀子	三〇九ノ七
濁悪の世	三〇四ノ一	○書籍	三〇九ノ二	○すばき姿	三〇一ノ一
人と住家	二七ノ二	管絃	三〇九ノ〇	○住家—「家、住居」を見よ	三〇七ノ五

○炭山	三三二ノ二	○園	三三〇ノ二	○立居	三〇七ノ四
○瑞相—亂世	三〇二ノ〇			○谷	三〇五ノ五
○末葉のやどり	三〇八ノ二	○大家	二九七ノ五	○田上川	三二二ノ一
○末廣	二九八ノ八	○大學寮—火災	二九八ノ六	○樂	三三三ノ二
		○大極殿—火災	二九八ノ五	一期の樂	三三三ノ二
		○大地	三〇六ノ七	愁なきを樂とす	三三三ノ五
		○内裏	三〇一ノ四	用なき樂	三三三ノ二
		○盜		○玉ゆら	三〇七ノ二
		白波の恐	三〇八ノ六	○民の愁	三〇一ノ二
		古寺の佛を盗む	三〇三ノ二	○田井	三二一ノ八
		邊地の家	三〇七ノ八		
		○堂舎塔廟	三〇五ノ七		
		○寶	三〇七ノ九		
		○寶物	三〇一ノ二		
		○薪	三〇三ノ二		
		○竹の簀子	三〇七ノ七		

○地獄の業風	二九ノ二	○外山の庵	三〇ノ四	○つばな	三二ノ七
○地質		○身 <small>み</small> の爲 <small>ため</small> に庵 <small>いほ</small> を結 <small>むす</small> ぶ	三〇ノ二	○茅花 <small>つばな</small>	三二ノ九
○元暦三年	三〇五ノ四	○六十 <small>むそ</small> の露	三三ノ七	○爪木	三三ノ四
○齊衡年間	三〇六ノ九	○濁悪 <small>じやくあく</small> の世	三〇八ノ二	○露 <small>つゆ</small> 朝顔	二九七ノ九
○餘波	三〇六ノ四	○築地	三〇四	○條里	三〇一ノ三
○治承四年	二九ノ五	○同	三〇五ノ二	○手のやつこ	三二ノ四
○風		○同	三〇八ノ四	○天運	三二ノ一
○遷都	三〇〇ノ四	○つか <small>つか</small> なみ	三〇九ノ二	○東大寺の佛の御首	三〇六ノ九
○長承三年 <small>一</small> 飢饉	三〇五ノ二	○月	三二ノ三	○科	三五ノ二
○帳のとびら	三〇九ノ九	○つぎ <small>つぎ</small> 琵琶	三〇九ノ五	○讀經	三〇ノ九
○長明		○辻風	三〇一	○獨身	三〇七ノ九
○五十 <small>いそ</small> の春	三〇八ノ八	○同	三〇八ノ一	○羽鳥	三二ノ一〇
○官祿	三〇八ノ九	○土	三〇五ノ五	○土木の煩	三〇一ノ八
○妻子	三〇八ノ八	○津 <small>つ</small> の國 <small>くに</small> 今の京	三〇二		
○出家遁世	三〇八ノ二				
○住家	三二ノ六				
○つれづれの友					

○富 <small>とみ</small> 一 <small>い</small> 恐多し	三〇七ノ九	○款 <small>か</small>	三〇一	○念佛	三〇ノ九
○遁世	三二ノ一	○風	三〇七	○閑居	三二ノ六
○同	三二ノ二	○権門 <small>ごんもん</small> の傍 <small>そば</small> に居 <small>ゐ</small> る者	三〇七ノ三	○不諱 <small>ふごん</small> の念佛	三二ノ六
○友 <small>とも</small> 一 <small>い</small> 選擇	三二ノ一〇	○夏 <small>なつ</small> 一 <small>い</small> 外山の庵	三〇七	○望 <small>のぞ</small>	三三ノ五
○外山	三二ノ五	○難波 <small>なにわ</small> の京	三〇八	○静 <small>しず</small> なるを望 <small>のぞ</small> とす	三三ノ五
○外山の庵		○二		○生涯 <small>しんが</small> の望	三三ノ三
○秋	三二ノ七	○西 <small>にし</small> の京 <small>きやう</small> 一 <small>い</small> 餓死者	三四ノ三	○方丈	三〇九ノ二
○山中の景色	三二ノ七	○丹 <small>に</small> つき	三四ノ二	○方丈の庵	三〇九ノ七
○その處 <small>ところ</small> のまき	三二ノ四	○仁和寺	三四ノ八	○箔 <small>はく</small>	三〇九ノ二
○夏	三二ノ七	○ぬか <small>ぬか</small> こ	三二ノ八	○島	三〇〇ノ二
○春	三二ノ六	○盗 <small>ぬす</small> 人 <small>ひと</small> 一 <small>い</small> 盗 <small>ぬす</small> を見 <small>み</small> よ		○恥 <small>ち</small>	三〇六ノ三
○日 <small>ひ</small> 々の行事	三二ノ六				
○冬	三二ノ八				
○鳥 <small>とり</small> 一 <small>い</small> 林	三二ノ八				
○土居	三〇九ノ三				
○同	三二ノ一〇				

死首の数	三〇四ノ二	○物の心	二九八ノ三	身、他の奴となる	三〇七ノ一〇
人心	三〇〇ノ一〇	○武士の子	三〇五ノ二	身を奴とす	三二四ノ一
常習	三〇二ノ一〇	○紅葉	三二二ノ二	○山―地震	三〇五ノ四
住家	三〇七ノ三	○門	三〇八ノ五	○山がっ	三〇三ノ九
同	二九八ノ三	長明の庵	二九八ノ八	○山鳥のほろくと鳴く	三二二ノ四
生活	三〇〇ノ四	吹き放たれたる	三〇八ノ五	○山守	三二一ノ五
遷都	三〇〇ノ八	○養生	三二四ノ七	○雪	
難波の京	三〇一ノ二	○養和年間	三〇三ノ三	大原山の庵	三〇八ノ五
風俗	三〇二ノ二	疫病	三〇三ノ五	外山の庵	三〇三ノ八
風聞	三〇三ノ二	飢饉	三〇三ノ三	○行く川の流れ	二九七ノ一
田舎	三〇三ノ一〇	○薬草	三〇三ノ二	○世―「人生」を見よ	三二五ノ二
○都のてぶり	三〇一ノ一〇	○奴	三二二ノ二	○用なき樂	三二五ノ三
○無言	三〇一ノ一〇	人の奴たる者	三二二ノ二	○餘算	三二五ノ一〇
○無常	二九七ノ一				
○馬鞍	三〇〇ノ三				

○淀川	三〇〇ノ二	○往生要集	三〇九ノ二〇	○なりくの美景	三二五ノ三
○世に仕ふる程の人	三〇〇ノ八	○往反のわづらひ	三〇七ノ八		
○世の不思議	二九八ノ三	○和歌	三〇九ノ一〇		
○夜―庵	三二二ノ三	○和歌―月かげば(長明)	三〇九ノ一〇		
○夜の床	三〇九ノ三	○我身―今昔	三二四ノ三		
○喜	三〇七ノ三	○厥	三二二ノ二		
隆曉法印	三〇四ノ八	○わらびのほどろ	三〇九ノ三		
○流泉曲	三二一ノ三				
○蓮胤	三二六ノ七	○田舎	三〇三ノ一〇		
		○居屋	三〇八ノ三		
		○なり等	三〇九ノ二		
		○岡の屋	三二〇ノ三		

方丈記索引終

○葦の御簾	三三三ノ二	○扇	法顯三藏	三六四ノ九	○安樂	四四五ノ八
○阿字本不生	四〇四ノ三	連歌の賭物	三六八ノ四	○雨	三九五ノ二	
○飛鳥川の淵瀬	三三二ノ三	○櫻	三三〇ノ一	登蓮法師	四三六ノ二	
○汗	三九〇ノ二	かけわたす	三九七ノ二	○怪	四四〇ノ五	
○あそび法師	三九八ノ一	枯れたる葵	三九八ノ三	○綾小路の宮	三三三ノ一	
○仇討	三八二ノ四	祭の後	三九八ノ二〇	○菖蒲	三三八ノ一	
○あだし野の露	三三〇ノ六	○押領使	三三六ノ二〇	○鮎の素干	四三三ノ四	
○味	四〇六ノ三	○尼	三三三ノ四	○荒夷	四〇二ノ五	
○晋妻人	四〇一ノ七	噓々	三七六ノ七	○あらがひ	三九三ノ二	
○東人	三三八ノ一	比丘尼	四三三ノ九	○嵐	三三五ノ三	
部の人との比較	四〇一ノ七	松下禪尼	四三三ノ九	○争	三九〇ノ二〇	
都の人に交る	四二二ノ二	男に別れし女	四三三ノ六	争を好む失	三九〇ノ二〇	
女	四三三ノ一	○餘りに興あらんとする事	三三八ノ一〇	己が境界にあらざる	四二九ノ二	
○穴(横笛)	四二二ノ二	○安喜門院	三七七ノ六	もの	四二九ノ二	
鮑	四三六ノ九	○詣證の禪師	四二九ノ一〇	虚無僧	三八三ノ二	
				死後の財産争	四〇一ノ三	

資季と具氏と	三九三ノ六	イ	○優越	三九〇ノ二〇	栲器	四三三ノ六
月と露	三三九ノ三	○同	○遊戯	四二二ノ九	唐櫃	三七三ノ三
ともがらに争はず	三九〇ノ二	○遊戯	石を弾く	四二四ノ二	乾砂子	四二〇ノ一〇
人鬼見る人	三三三ノ六	貝合	興	四二四ノ九	火爐の炭	四三三ノ三
物に争はず	三九〇ノ四	興	雙六「雙六」を見よ	三九〇ノ四	内裏の建築	三三六ノ八
○改めて益なき事	三八八ノ六	雙六「雙六」を見よ	謎々	三七四ノ五	烏柴	三五五ノ二
○有明の月	三七六ノ一	まゝ子立	○幽玄の道	三八六ノ六	箱の栗形に緒つくる	三七二ノ七
○在兼卿	四三三ノ五	鞠「鞠」を見よ	○有職、故實	三八八ノ八	紐	四三三ノ一
○有栖川	三八二ノ九	園基「園基」を見よ	ありたきこと	四〇九ノ二	ふるまひ	三三三ノ二
○ありたきこと	三八二ノ七	○園基「園基」を見よ	大臣大饗	四〇九ノ二	やない筥	四五〇ノ七
○有仁(花園左大臣)	三三〇ノ二	○幽玄の道			○型	四三三ノ二
○有房(六條の内府)	三九四ノ九	○有職、故實			怒	四三三ノ二
○有宗入道	四四二ノ二	ありたきこと			鳥獸轟	三六九ノ三
○あるじなき所	四四九ノ二	大臣大饗			恥	四三九ノ二
○あるじまうけ	四三八ノ九				深く物を憑む	四三六ノ二
○荒れたる宿	三七四ノ八				勢	三三三ノ八
○青葉	三三七ノ九					

○勢	三六三	○異説	三八三	○一律(音)	四二
○池	三五九	○伊勢物語	三五二	○一切經	四三
龜山殿の池	三五九	○磯の禪師	四四	○一切の有情	三八九
神泉苑の池	四三九	○板敷	三七四	○一生の懈怠	四二六
法成就の池	四三九	あやしき板敷	三七四	○五緒	三五四
○石	三八九	倚廬の御所	三三二	○偽	三五四
○醫師、醫術	三七三	小板敷	三三二	語り傳ふる事	三八二
足鼎被きたる僧	三七三	○いたづらなる人	三八六	智恵	三八九
あつしげ	三七七	○一言芳談	三七二	人の心	三五二
忠守	三七四	○一時の懈怠	四二六	○泉	三五二
必要	三六二	○一大事の因縁	四二七	○出雲	四九
善き友	三八二	○一條室町	四二七	○絲	四九
○意趣	三八二	○一日の起居	三七八	白き絲	三三二
○醫書	四二四	○一年の相	四二四	みなむすび	四二二
○衣食住の三大事	三八二	○一念の念佛	四二四	○絲竹	三八六
○伊勢	三二〇	○一の上	四二六	○因幡	三九
○伊勢(大神宮)	三三二	○一人	三七四	○犬	三九

生きたる犬の足	三八九	人を待たず	三五二	子孫の多き家	三八九
大鷹	四二八	不思議	三八三	後世の願	三五三
飼主に飛びつく	三八六	雪の如き	四三二	造作	四九
小鷹	四二八	○祈	三八九	死者の家	三三二
人くふ犬	四三三	○石清水	四二六	都「都」を見よ	三三二
人に優る	三八五	○衣服「服装」を見よ	三八七	寢殿	三九
人をとがむ	三七九	○庵	三八七	寢殿に繩を張る	三三二
むく犬	四三〇	○家、住居、建築	三九二	主人の心	三三二
○命	四三〇	ありたき木	三九二	總門	四三二
雨のはれまを待たず	四三二	あるじなき所	四九二	内裏の建築	四三三
一日の命	三七〇	板敷「板敷」を見よ	三七四	竹のあみ戸	四二〇
命を結ぶる大事	三七四	倚廬の御所	三三二	中陰	四三三
刹那	三七七	格子	四二六	中門	四三三
存命のよろこび	三七〇	閑院殿	三三二	妻月「妻月」を見よ	四三三
鳥獸	三八九	京極殿	三三二	天井	三九
長ければ恥多し	三三〇	櫛形の穴	三三九	長押	三七六
人と蟲	三三〇	構造	四二二	夏	三八二

○魚	鮎	四三〇四	○應對	四二〇二
えび	三六八〇八	○夷—廻鶺鴒	三九二〇二	
心樂ぶ	三三〇〇四	○えび	三三六二〇	
鯉—「鯉」を見よ	四三三〇三	○縁	四〇〇三三	
蛙		結縁	四〇〇三三	
		請	三六二〇三	
		放下すべき時	三八二〇二	
		離る	三六二〇二	
		○延喜式	四三三〇一	
		○延政門院	三五三〇二	
		○衣紋	三七七〇九	
		○老—「老年、老人」を見よ	四三三〇四	
		○老の方人	四三三〇四	
		○應對	三三三〇二	
		○老—「武、武士」参照		
		荒夷	四〇三〇五	
		管絃	三三三〇九	
		佛法	三三三〇九	
		物のあはれ	四〇三〇五	
		○衣胞滞る時の呪	三五三〇八	
		○江の侍従	三九九〇九	
		○えび	四八〇〇九	
		○多久資	四四〇〇六	
		○大原野	三三三〇二	
		○大原の里の飯	三三三〇九	
		○大社	四四九〇八	
		○大井川	三三三〇九	
		○同	四四〇〇二	
		○大井の土民—水車	三三三〇九	
		○恩愛の道	四〇三〇八	
		○御衣胞	三三三〇八	
		○音楽、舞樂、樂器—「管絃」参照		
		神樂	三三三〇五	
		寒暑	四四三〇六	
		國の樂	四三三〇〇	
		廻忽	四三三〇九	
		廻鶺鴒	四三三〇九	
		立上	三三三〇一〇	
		聲をかくして	三三三〇九	
		想天戀	四三三〇七	
		相府蓮	四三三〇七	
		絲竹に妙なる	三三三〇六	
		笙	四三三〇〇	
		調子	四三三〇三	
		音をたてんと思ふ	四三三〇三	
		箏	三三三〇五	
		人の咎	四三三〇一	
		琵琶—「琵琶」を見よ		
		笛—「笛」を見よ		
		牧馬	三三三〇〇	
		天主寺の舞樂	四三三〇三	
		横笛—「笛」を見よ		
		夜	四三三〇一	
		和琴	三三三〇六	
		○御菓物	四三三〇四	
		○飲食—「飲食」を見よ		
		○御鷹飼	三三三〇二	
		○陰陽師、陰陽道	四三三〇二	
		有宗入道	四三三〇二	
		牛	三三三〇二	
		赤舌日	三三三〇二	
		○陰陽のともがら	四三三〇五	
		○面影—名	三三三〇二	
		○思ひたつ日	三三三〇八	
		○親子		
		親の志	四三三〇九	
		子孫の多き	三三三〇九	
		子無くてありなん	三三三〇一	
		子を愛する女	四三三〇五	
		生活	四三三〇二	
		鳥獸蟲	三三三〇二	
		無常の來る時	三三三〇二	

○魚	鮎	四三〇四	○應對	四二〇二
えび	三六八〇八	○夷—廻鶺鴒	三九二〇二	
心樂ぶ	三三〇〇四	○えび	三三六二〇	
鯉—「鯉」を見よ	四三三〇三	○縁	四〇〇三三	
蛙		結縁	四〇〇三三	
		請	三六二〇三	
		放下すべき時	三八二〇二	
		離る	三六二〇二	
		○延喜式	四三三〇一	
		○延政門院	三五三〇二	
		○衣紋	三七七〇九	
		○老—「老年、老人」を見よ	四三三〇四	
		○老の方人	四三三〇四	
		○應對	三三三〇二	
		○老—「武、武士」参照		
		荒夷	四〇三〇五	
		管絃	三三三〇九	
		佛法	三三三〇九	
		物のあはれ	四〇三〇五	
		○衣胞滞る時の呪	三五三〇八	
		○江の侍従	三九九〇九	
		○えび	四八〇〇九	
		○多久資	四四〇〇六	
		○大原野	三三三〇二	
		○大原の里の飯	三三三〇九	
		○大社	四四九〇八	
		○大井川	三三三〇九	
		○同	四四〇〇二	
		○大井の土民—水車	三三三〇九	
		○恩愛の道	四〇三〇八	
		○御衣胞	三三三〇八	
		○音楽、舞樂、樂器—「管絃」参照		
		神樂	三三三〇五	
		寒暑	四四三〇六	
		國の樂	四三三〇〇	
		廻忽	四三三〇九	
		廻鶺鴒	四三三〇九	
		立上	三三三〇一〇	
		聲をかくして	三三三〇九	
		想天戀	四三三〇七	
		相府蓮	四三三〇七	
		絲竹に妙なる	三三三〇六	
		笙	四三三〇〇	
		調子	四三三〇三	
		音をたてんと思ふ	四三三〇三	
		箏	三三三〇五	
		人の咎	四三三〇一	
		琵琶—「琵琶」を見よ		
		笛—「笛」を見よ		
		牧馬	三三三〇〇	
		天主寺の舞樂	四三三〇三	
		横笛—「笛」を見よ		
		夜	四三三〇一	
		和琴	三三三〇六	
		○御菓物	四三三〇四	
		○飲食—「飲食」を見よ		
		○御鷹飼	三三三〇二	
		○陰陽師、陰陽道	四三三〇二	
		有宗入道	四三三〇二	
		牛	三三三〇二	
		赤舌日	三三三〇二	
		○陰陽のともがら	四三三〇五	
		○面影—名	三三三〇二	
		○思ひたつ日	三三三〇八	
		○親子		
		親の志	四三三〇九	
		子孫の多き	三三三〇九	
		子無くてありなん	三三三〇一	
		子を愛する女	四三三〇五	
		生活	四三三〇二	
		鳥獸蟲	三三三〇二	
		無常の來る時	三三三〇二	

○河竹	四三ノ六	○鎌倉の中書王	四三ノ五	○紙 <small>かみ</small> 拾	四三ノ八
○蛙	三三ノ三	○神 <small>しん</small> 神社參照	四三ノ二	○漢 <small>かん</small> 廻鶴園	四三ノ九
○蒲 <small>かほ</small> の冠者	四四ノ四	鬼神	四三ノ二	○閑暇	三六ノ二〇
○土器	四三ノ三	五條の天神	四三ノ三	あまりの暇	三六ノ二〇
○甲 <small>かみ</small> 香 <small>かほ</small> (貝)	三六ノ二	參詣	四九ノ六	名利	三七ノ九
○かひどり姿のうしろ手	四九ノ三	錢	四九ノ二	老人	四〇ノ四
○貝をおほふ人	四二ノ九	大神宮	四三ノ二〇	○閑居 <small>かん</small> 山里	三三ノ六
○可不可は一條	三八ノ二	蛇	四三ノ八	○顔回	三三ノ六
○かぶしかたち	三七ノ三	靴 <small>くつ</small> かけられたる	四三ノ四	不幸	四三ノ五
○樂府の御論義	四四ノ二	夜詣 <small>よぎ</small> つ	四九ノ六	勢を施さず	三六ノ七
○冠物		○髮		○漢詩	
今昔	三五ノ八	鯉の羹	三八ノ一	沅湘日夜 <small>(三體詩)</small>	三〇ノ二
烏帽子	四四ノ七	女の髮	三二ノ七	去者日已疎 <small>(古詩)</small>	三四ノ三
男 <small>おとこ</small>	三七ノ九	女の髮筋をよれる綱	三三ノ一	人非木石 <small>(鮑照)</small>	四〇ノ八
冠桶 <small>かぶりかじ</small>	三四ノ八	○上 <small>かみ</small> さま	三三ノ二	○漢字 <small>(虚無僧)</small>	三八ノ一
楓	四〇ノ七	○かみなづき	三三ノ九	○甘心 <small>かんじん</small>	三六ノ六
鎌倉 <small>かまくら</small> 一塵	三八ノ八	○紙 <small>かみ</small> の金	四〇ノ二	○上達部	三二ノ三〇

○千の穴 <small>(横笛)</small>	四二ノ三	○唐のもの	三八ノ二	落葉	四〇ノ六
○感涙	四五ノ六	○唐橋中將	四〇ノ一〇	庭に多き	三五ノ九
○閑院殿	三六ノ九	○唐櫃	三七ノ二	○氣	四〇ノ七
○龜菊 <small>(白拍子)</small>	四四ノ二〇	○唐瓶子	三七ノ七	○灸	四〇ノ二
○龜山殿	三三ノ九	雁	三八ノ四	穢	四〇ノ二
池に水を引く	四三ノ七	秋	四二ノ二	四十以後の人	四〇ノ四
蛇		大雁	四二ノ二	○宮中	
○賀茂		くろみ棚	三八ノ四	朝餉	三二ノ一
岩本	三五ノ一	○狩衣	三二ノ二	門	三二ノ一
競馬	三九ノ二	○同	四三ノ五	神さびたる有様	三〇ノ三
神社	三二ノ二〇	○假 <small>かり</small> のやどり	三三ノ四	黒戸 <small>くろ</small> 「黒戸」を見よ	
橋本	三五ノ一	○苳 <small>かき</small> 萱	四〇ノ九	小板敷	三二ノ三
○鴨長明	三九ノ四	○乾 <small>かき</small> 砂子	四〇ノ八	小菰	三二ノ二
○蚊遣火	三八ノ三	キ		諸司 <small>しよし</small> の下人	三二ノ四
○からさげ	四三ノ二	○木		仁壽殿	四三ノ六
○鳥	三三ノ三	家 <small>いへ</small> にありたき木	三九ノ二	眞言院	四二ノ八
○唐の狗	三七ノ九			神泉苑	四二ノ八

大極殿	三九ノ六	したり顔に言ふ	四二ノ八	花の盛	四二ノ九
内裏の建築	三六ノ八	名と面影	三五ノ二	○北	三九ノ九
高遣戸	三二ノ二	○菊		○北山太政入道	四六ノ九
陣「陣」を見よ		秋の草は	四〇ノ九	○北山入道殿(實氏)	三八ノ四
殿	三二ノ一	黄菊	四〇ノ九	○栴檀	四〇ノ八
主殿寮	三〇ノ九	菊玉	三九ノ六	○吉日	三六ノ二
内侍所の鈴の音	三二ノ五	○菊亭の大臣	三五ノ〇	○吉凶	三六ノ六
布の帽額	三三ノ三	○機嫌	四〇ノ二	○木造の地藏	四二ノ四
御簾	三三ノ二	○雉		○狐	
御調度「調度」を見よ		梅の作り枝につく	三五ノ二	あるじなき所	四九ノ三
夜の御殿「夜」を見よ		雙なき鳥	三六ノ三	ばげ損じたる	四六ノ二
露臺	三三ノ一	○鬼神	四二ノ二	人に食ひつく	四〇ノ九
居睡	三三ノ四	○起請文	四三ノ八	未練の狐	四六ノ三
○弓馬のわざ		○季節		○喜怒哀樂	三八ノ二
○記憶の感	三五ノ五	移り變る	三七ノ五	○奇特	三五ノ二
○聞く		氣の變化	四〇ノ四	○衣被の女房	三五ノ一
音に聞くと見る時と	三五ノ三	四季の序	四〇ノ九	○同	三七ノ〇

○技能	三六ノ三	○君の籠	四三ノ五	○行	三九ノ三
○木の端	三七ノ〇	○金一餓	三六ノ八	○變態	四二ノ九
○希望「明日の命	三七ノ九	○公明(侍従大納言)	三七ノ六	○同	四七ノ一
○牙あるもの	四二ノ八	○金玉のかざり	三七ノ三	○境界	三九ノ二
○器物、道具		○近火	三五ノ九	○行雅僧都	四〇ノ〇
具足	三四ノ三	○禁獄	四二ノ四	○京極殿	三三ノ二
古代の姿	三三ノ七	○公實(堀川院)	三三ノ三	○京極入道中納言	四〇ノ五
選擇	三三ノ五	○禽獸に近き振舞	三三ノ二	○狂人	四二ノ三
調度「調度」を見よ		○金錢「財寶、金錢」を見よ	三五ノ五	○狂人のまれ	三六ノ六
手なれし具足	三四ノ六	○公任(四條大納言)	三三ノ二	○行成大納言	三三ノ八
○貴船	三三ノ二	○公孝(徳大寺右大臣)	四三ノ二	○行宣法印	四三ノ四
○規模	三七ノ四	○公經(北山太政入道)	四六ノ九	○變膳	三五ノ二
○君		○公衡(竹林院入道左大臣)	三六ノ五	○行歩	三七ノ二
恩	三五ノ二	○經		○行法	四二ノ六
後世願ふ人	三五ノ五	一切經	四三ノ三	○經文の紐	四三ノ一
錢	四九ノ〇	首楞嚴經	四三ノ四	○格「灸治」の穢	四三ノ二
帝位	三七ノ三	善業	四〇ノ八	○毀譽	四三ノ二

己が境界に非ざるもの	四九ノ二	○綺羅	三七五ノ二	秋の草は	四〇〇ノ八
死人を譽むる	四〇三ノ九	○記録—占文の裏に書ける	四二ノ六	草は	四〇〇ノ八
外の譏を知らず	三九二ノ八	○驥を學ぶ	三六五ノ七	十月	四〇八ノ六
譽を受する人	三六ノ六	○祇園精舎の無常院の鐘聲	四二ノ九	庭に多き	三三八ノ九
○許由	三六ノ二〇			墓所	三三五ノ六
○興				めなもみ	三七二ノ〇
餘りに興あらんとする	三六ノ二〇			○草の庵	三九八ノ七
遊戯	三九〇ノ四			○噓—呪	三四三ノ四
幼兒を言ひ辱む	三九ノ八			○公事	
酒	四一九ノ三			ありたきこと	三八ノ八
智	三九〇ノ八			年の暮	三九ノ一
ふるまひ	四四六ノ二			又五郎をのこ	三七四ノ二
○凶事	四三四ノ五			○櫛形の穴	三三六ノ九
○凝當	四〇九ノ二			○愚人—「愚」参照	
○虚言—「言語」を見よ				犬の心	四六ノ二
○魚道	四〇九ノ三			下愚の人	四〇六ノ五
○清行	四六ノ六			光陰	三六六ノ九
		唐のものは	三八四ノ三		
		士大根	三五六ノ〇		
		庭	四四ノ五		
		人間四大事の一	三八七ノ二		
		めなもみ(草)	三七二ノ〇		
		○曲者	三五三ノ一		
		○具足	三四四ノ三		
		○菓子	四一九ノ四		
		○愚癡	三八九ノ四		
		○蛇—「蛇」を見よ			
		○蛇—めなもみ	三七二ノ〇		
		○九條相國(伊通)	四五三ノ三		
		○九條太政大臣(伊通)	三三〇ノ二		
		○九條殿—遺誠	三九二ノ二		
		○口傳	四四二ノ二		
		○國—「政治」参照			
		國を保つ道	三八〇ノ三		
				驕奢	三八ノ二
				○公人	四三三ノ二
				○功能	三九四ノ八
				○水鷄	三八ノ二
				○九品の念佛	三八二ノ四
				○君子	
				仁義	三七二ノ一
				多能	三八六ノ六
				○久米の仙人	三三二ノ五
				○公物	三七三ノ四
				○九郎判官	四四三ノ四
				○くらき人	四三九ノ七
				○苦樂	四三六ノ一〇
				○競馬	三九二ノ二
				○鞍馬	四三三ノ三
				○栗	三九ノ九

賢者を惜む	三六五ノ二	疾病	四二五ノ五	存命の樂	三七〇ノ九	樂	三七七ノ二	たはぶれ	四三〇ノ二	智者は愚者	三七二ノ八	人の終焉	四〇三ノ八	人の智	四二九ノ七	物を憑む	四三六ノ二	老死を悲む	三六〇ノ七	利	三八ノ一	○葛	四〇〇ノ九	○醫師—「醫師」を見よ	三九六ノ六	○藥玉	三九〇ノ一	○藥—「疾病」参照	三九〇ノ一	汗	三三三ノ四	芋頭	三三三ノ四

○栗栖野

三三ノ六

○車

五緒

三三ノ六

大きな

三三ノ二

轆

三七ノ二

物見

三九ノ五

○呉竹

四三ノ六

○餓一金

三八ノ八

○黒戸

四三ノ二

○同

四三ノ一

○くろみ棚

三八ノ四

○怪異

四三ノ二

牛

四三ノ二

かへりてやぶる

四三ノ五

狐

四三ノ二

○繪畫「書畫」を見よ

四三ノ二

○廻鶺(音楽)

四三ノ九

○廻忽(音楽)

四三ノ九

○廻鶺

四三ノ九

○快樂

四三ノ九

愚者の樂

三七ノ二

靜かに一生を送る

三八ノ一

暫く樂ぶ

三二ノ三

人生

三〇ノ六

生を樂む

三〇ノ九

道を樂む

四一ノ九

欲

四〇ノ六

樂といふは

四三ノ二〇

六塵の樂欲

三二ノ二

○光陰

三二ノ二

一日の事

三八ノ二

何の爲にか惜む

三七ノ三

無益の事

三六ノ九

惜むべし

三七八ノ五

○光孝天皇(小松の御門)

四三ノ二

○皇居一蟲

四三ノ一〇

○皇族

三七ノ四

○光明眞言一追善

四三ノ七

○荒涼

四一ノ二

○過去

四一ノ二

懷舊

三三ノ二

古き世

三〇ノ六

見ぬ古の跡

三三ノ二

臨終

三三ノ二

○過差

三三ノ二

○同

三三ノ二

○火災

三五ノ九

○過失

三三ノ二

緩急

三三ノ三

佛道

三三ノ三

安き所に起る

三三ノ一〇

○欺(くわじやう)

四三ノ四

○寛嚴

四三ノ九

○管絃「音楽」参照

三二ノ八

ありたきこと

三二ノ九

夷

三二ノ九

○觀察

四三ノ一

○元日の奏賀

三九ノ五

○官人、官職、官位

四三ノ一

章兼

四三ノ一

一の上

四三ノ六

一の人

三二ノ四

高位高官を望む

三八ノ五

看督長

四三ノ四

車の五緒

三三ノ六

外記

三七ノ三

檢非違使

四三ノ三

相國

三三ノ七

上卿

三二ノ三

隨身

四〇ノ五

聖賢

三八ノ四

大將

三八ノ七

大理

三三ノ二

道志

四三ノ三

太政大臣

三六ノ五

拙き人

三三ノ三

舍人「舍人」を見よ

三三ノ六

主殿司

三三ノ六

内記

三三ノ八

典侍

四三ノ一

内辨

三三ノ八

北面「北面」を見よ

三三ノ八

勝れる人

三三ノ二

揚名目

四三ノ三

揚名介

四三ノ三

蓮府

四三ノ九

庭弱の官人

四三ノ四

衛士

三七ノ二

○完全、不完全

三六ノ一

○灌佛

三三ノ二

○願望

三三ノ二

惡念

四三ノ九

此世に生れては

三三ノ三

財寶

四三ノ八

死期の願

四三ノ四

所願無量

四三ノ六

妄想

四三ノ七

道

四三ノ六

よろづの願

四三ノ二

○願文

三三ノ九